K2A-36
Z32-B88

金の星

昭和二年四月五日印刷納本　昭和二年五月一日發行

五月号

第九巻
第五號

国立国会
8. 3. 26
図書館

童話作家協會

日本童話選集

第壹輯

菊判 美裝 五四〇頁
普通裝 三八〇
定價三圓七十五錢
送料廿七錢

附錄—日本童話史・會員著作年表（挿繪差に帙裝）

岡本歸一
川上四郎
村山知義
武井武雄
初山滋

執筆會員——秋田雨雀・藤谷清村・安倍季雄・巖谷小波・岩井信實・宇野浩二・小川未明・小野政方・小寺融吉・尾關岩二・沖野岩三郎・北村寫夫・久留島武彥・楠山正雄・酒井朝彥・鈴鹿野風花・相馬泰三・千葉省三・豐島與志雄・中島孤島・長尾豐・野溪地天馬・藤田廣介・藤澤衛彥・馬淵冷佑・前田晁

松原至大・水谷まさる・宮原晃一郎・村山籌子・山內秋生・吉田絃二郎・麻島鳴秋・久保田萬太郎

兒童の爲め
學校及家庭の文
庫に愛藏せらるべき
新興童話の傑作集（二著）

小川未明著
初山滋挿畫
武井武雄裝幀
未明童話集
第一卷
菊判 美裝 四八〇頁 定價三圓
送料 四八錢 郵料 廿七錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋
東京—神田・三田・早稲田・丸ビル
横濱 福岡 仙臺 札幌

目次

五月の朝（表紙・石版）……岩岡ごも枝
あの丘越えて（口絵・三色版）……寺内萬治郎
泣く子（童話）……（四）……野口雨情
同作曲……（二）……本居長世
恐れを知らぬ人（童話）……（六）……立石美和
大石主税（長篇）……（一二）……三島霜川
童心句……（二六）野口雨情選
險呑な宿屋（童話）……（二八）……川崎春二
春祭り（推薦童謡）……（三六）……野口雨情選
猿小父さん（童話）……（四〇）……田中宇一郎
武悪の幽霊（童話）……（四四）……西川喜平
うそどり（大人篇）……（五四）……野口雨情選
警察へ行つたピー（童話）……（五七）……大島智惠子
ぶッこわし除け（童話）……（六二）……大木雄三
お寺の百目柿（入選童話）……（七一）……中岡康男
白帆の唄（長篇）……（七四）……小城庄一
涙の池（童話）……（八四）……大戸喜一郎
漂流二百三十日（長篇）……（九二）……久米舷一
暗闇城（長篇）……（一〇二）……小島政二郎
青い木の芽（童話）……（一〇八）……達崎龍
阿新の仇討（童話）……（一一〇）……窪田空穂
すゞめ（子供篇）……（一一〇）……野口雨情選
おなべの中（譜方）……（一一四）……齋藤佐次郎選
研究……（一一〇）
編……（一一〇）
信……（一二〇）
通……（一二六）
讀者だより……（一二六）
出版だより……（一二八）

あの丘越えて

寺内萬治郎畫

曽我兄弟

赤穂四十七士

日本歴史實傳物語叢書・三島霜川先生著・羽鳥古山畫伯畫

定價壹圓
送料十二錢

『曽我兄弟』は日本の物語として永久に傳へられるべき貴れにして、ゆかしい物語です。

東海道は大磯の里に、語り傳へられてゐるこの物語！かういふ物語こそ、皆さんに愛讀されずして、外に物語がありませうか。

三島霜川先生の苦心の結晶になつた本書は、恐らく少年少女の爲めに書かれた『曽我兄弟』として、この物語と共に永遠に傳へられる可き名著である事を信じます。是非御愛讀下さい。

芝の泉岳寺には今尚香煙の絶えない四十七士の墓があります。本書は三島霜川先生が最も力得意の研究であるだけに、出鱈目な講談などと違ひ、眞に迫つてゐるので、皆さんの受ける感動も深いでありませう。

大石内蔵助をはじめ、四十七士が、血の涙を拭して主君の仇を討つたその當時の有樣が手に取るやうにわかつて、面白い事限りがありません。恐らく皆さんは此の本を一度では惜くて二度も三度も讀まれるでせう。

東京本郷區勸坂町三五九　金の星社　振替東京五九五九六番

奬學賞品贈物用として眞に絶好

十八冊完成

尋常小學副讀本

東京高等師範訓導 馬淵冷佑先生 共著
飯田恒作先生

尋常一・二年 上・中・下 各金四拾錢
尋常三・四年 上・中・下 各金四拾五錢
尋常五・六年 上・中・下 各金五拾錢

郵送料各六錢

課外讀本の種類も數多いが、その最も先驅をなしたものは本書であつたといへよう。本書は初號を發行してより已に數年を閲し、これが著作動機と計畫に到ては更に十年餘の過去に遡る。其間似而非副讀本類雨後の筍の如く續出し、世人また流行を追ふが如き輕擧を以てその選擇をさへ誤る者があつた。本書の著者は深くこれを遺憾とし、益々自重すると共に飽迄も初志を貫徹せしめんと涙ぐましきばかりの眞摯なる態度を以て、一冊を產むにも容易ならぬ苦辛を重ねられ、すべて兩先生が日常教へ兒との愛の生活體驗を基調として互ひに檢討深究を重ねられた。

されば本書の內容は、兒童日常實生活に最も親み深き題材を中心とし、淸新なる情操陶冶の優しい材料に依て、各方面の題材を巧に執りこなし、讀んでいくうちに高雅な讀書趣味を養ふと共に、知らず知らず自己の生活を內面の深みへひきこんでしみ〳〵考へさせ、彼らの生活を純化していくやう細かな考慮をせられた。今や全十八卷完成せられて、この偉大なる愛の努力によつて產れた本書こそ眞に少年少女諸君の心の糧として推奬するに足る理想的模範讀本であることを確く信じて疑はないのである。

東京神田錦町一丁目
培風館
振替東京三二六一七

漫畫

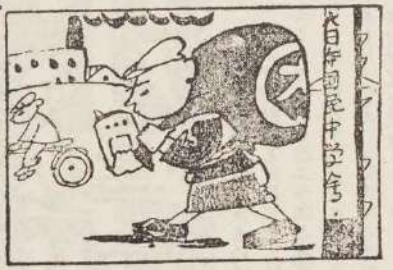
信吉ノ成功

(一)小學校ヲソツゲフシタ、メクサンノコドモタチハ、イエイヨウノナカヘトビダシタ。ヨウノナカハ小學校ニキルトキオモツタホド、タノシクハナカツタ。

小學校卒業後

いろ〳〵な事情で上の學校へ行くことの出來ない諸君は今スグ本會へ入會して日本一の中學講義錄で勉強なさい。

(二)シンキナハ、ウチガピンボウナメメ、アタチニダサレタガ、ヒトニマケナイキデ、ボイニホンコクミンチユウガクイニユフタワイシテ、ヨーギロクデベンキヨウシタ。



僅か一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。

(三)ヨサクモ、ウチノテツダイチシナガラ、コーギロクデベンキヨウシタガ、トンキナトヨタロウハ、トウキヨウノ、ナユウガタヘハイアテモ、ナマケテ、カツドウシナシン、バカリミテアルイタ。

(四)二十ネンホドメツテ、レンキナハ、リツパナカイシヤノシナチヨウニナリ、ヨサクハソンカイギインニナツタガ、トンキナトヨタロウハ、ナナサケテ、シンキナノカイシヤニツカツテモラツテイル。

◎入會するのには今が一番好いときです

講義錄見本 規則書 申込み次第 無代で進呈します

東京駿河臺 大日本國民中學會

電話神田壹貳壹壹・壹壹壹貳・壹壹壹參 振替東京四二〇〇番

コロンブス

少年少女偉人傳大系 (10)

三井信衛先生著

四六判箱入美本
定價金九十錢
送料十二錢

地球が平べつたいものとまだ信じられてゐた十五六世紀の頃に、大西洋に船を浮べてアメリカ大陸を發見したコロンブスは世界の偉人で、又私たちの大恩人です。しかも、このコロンブスは生きてゐた間はあらゆる艱難に出遇ひ、不幸のどん底に死んで行つたのです。小說よりも、もつと〳〵不思議な運命に出遇つた人だけに、幾度讀んでも興味のあるのはコロンブスの傳記です。

家かき兒

少年文學名著選集 (2)

三宅房子先生譯

四六判箱入美本
定價金壹圓二十錢
送料十二錢

『家なき子』は世界的の名作として、世界各國語に譯され、如何なる少年少女も一度は讀んで置くべき本として推薦されてゐるものです。原作は佛國の文豪マーローの作になり、一人の孤兒の一生を書いたものです。名家に生れながら、不思議な運命に弄れ、途に旅藝人に賣られ、村から村へさすらひ歩く涙と教訓に滿ちた一大長篇です。

東京本郷區動坂町三五九 金の星社 振替東京五九五九六番

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編 ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャーウッドの森に住んで正義のために戰つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで興をたどらせます。惡い知事や僧正や、王をやつゝけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として祭れてゐる物語りです。昔アラビヤに惡い王があつて、毎日一人づゝお妃を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤン・ナイト』だといはれてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遊々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

第九編 シェークスピヤ物語

有名なシェークスピヤの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のまゝ』『ベニスの商人』『がみ〳〵女調し』『真夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編 グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十一編 繪入 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づつの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

第十二編 日本神話 古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありますまい。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出來た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第十三編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

第十四編 西遊記

支那から印度へ、はる〳〵お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で樣々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作です。この本を讀まない者は不幸です。

第十五編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロミュラスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて來て、息もつけぬ程面白い物語です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十六編 聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものは無いと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム。イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷など、實に面白い物語です。

第十七編 奴隷トム物語

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第十八編 ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることの出來るものです。

第十九編 アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで飽かたければならないほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一册を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第二十編 小公子

『小公子』の名は古ぐから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第二十一編 母を尋ねて三千里

本書は伊太利文豪アミチスの世界的名作『クオレ』の中から、最も面白い部分を選んで一册としたものであります。三千里の遠をはるゝ〳〵と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乘り込んで自分の身を棄てゝ少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生涯忘れられぬ物語りばかりです。少年少女必讀の書。

第二十二編 不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちにつひウト〳〵と眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な〳〵夢を見たのです。暫あてからのち、アリスはお姉樣にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

第二十三編 青い鳥

メーチルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありますまい。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未來の國と移り歩るくチルチル、ミチル二人の姿は、ちようど活動寫眞でも見るかのように、皆樣の眼の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

第二十四編 爲朝一代記

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありますまい。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバラシイ魅力をもつ事でせう。本書の表紙畫の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀ますして本書の内容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

第二十五編 ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シエークスピヤの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる魅しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したか、又、可憐な花の如きオフエリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよ〳〵熱涙を覺える名篇であります。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第廿一編 ジヤンバルヂヤン

有名なフランスのユーゴーの傑作で、世界中何處へ行つてもこの話を知らぬ者はありません。ジヤンバルヂヤンは若い時、パン一片を盜んだために、永い間牢へ入れられてゐましたが、ふとしたことから立派な人間になつて、哀れな人達を救ふと云ふ美しい物語です。この物語を讀んで泣かぬ者はありません。

第廿二編 みなし兒

父に別れ、母に愛せられて育つたデヴィッドが、やがては父も母も失ひ、たゞ一人さすらひの旅に出て、色々と苦しい目にあひます。併しデヴィッドは、どんな貧しい時でも、決して正直と云ふ事を忘れませんでした。その爲に遂に最後の幸福を得ると云ふ、英國のディッケンスの名作です。少年少女必讀の書

第廿三編 平家物語

日本歷史の中で、最も面白いお話の多いのは源平時代です。中でも、平家のお話は事實にあつたお話として、これほど華やかな、そして又はかない、哀れなお話はありますまい。平家の盛んな時代から、滅亡に至るまでの事を知るには、この本を措いてほかにはありません。

第廿四編 フランダースの少年

この物語は、誘術家の尊い魂を持つて生れながら、その日の暮しにも困るやうな、哀れな家に育つた少年の物語です。その優しい心と、藝術にあこがれる天才的熱情とその奮鬪心とは、實にあはれにして、嚴肅な氣持ちを與へます。世の少年少女に、一人でも多く讀んで戴きたいと思ひます。

第廿五編 ジーグフリード王子物語

ドイツの野に生れた英雄ジーグフリードの、勇壯極まりなき一大武勇傳です。或る時は惡龍と戰かひ、或る時は惡者と鬪かつて弱い者を救ふこの王子の物語は、如何に讀者の血を湧かしめるでせうか。全篇愛と力に滿ち溢れ思はず快哉を叫ばずにはゐられません。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第廿六編 新ロビンソン漂流記

スキスを船出した汽船が大暴風雨に出遇ひ、南洋の一無人島で難破して了ひ、一家族六人の者だけが助かります。その内四人は少年でしたこの六人の者が救ひの船の來るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生の植物を食物にしたり、猿や鸚鳥をお友達にしたりして、實に面白いお話です。

第廿七編 ポムペイ最後の日

伊太利のベスビヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたポムペイの町のお話です。妖術使や魔女のやうな惡い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、空の星のやうな美女や、義俠に富む勇士などが現れて、歷史になかく傳へられる『ポムペイ最後の日』のあはれにして、悲しい物語となつてゐます。

第廿八編 少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、豐なだれにあひました。その時なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血をどり、涙ながれるものばかりです。

第廿九編 ロミオとジユリエット

有名なシエークスピヤの作つたロミオとジュリエット二人の物語りは、最初から終りまで泣かずには讀めない程あはれにして、はかないものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、あはれな話、悲しい話の好きな方々には、きつと大歡迎を受けます。是非讀んでいたゞきたい世界の悲劇です。

第三十編 竹取物語

『竹取物語』は世界にほこることの出來る日本の大文學です。日本中で一番美しいかぐや姫を、自分のお嫁さんにしようとして、大勢の皇子やおくげ樣たちが競爭をします。しかし、かぐや姫は月の世界の人であつて、かりに此の世に生れたのですから、五色の雲に乘つて月の世界へと歸つてしまふのです。

偉人傳大系 第一編

ジャンヌ・ダルク

大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第二編

ローマ英雄 シーザー

羅田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第三編

ネルソン

三井信義先生著。トラファルガアの海戰に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第四編

リンコルン

久米鼓一先生著。最も優れた立志傳として、この『リンコン傳』をおすゝめする。紙一枚、ペン先一ツ買へぬ貧しいリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかちゝ得たか。本書を讀まぬ者は一生の不幸である。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第五編

太閤秀吉

三島霜川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第六編

ナイチンゲール

入交縫一郎先生著。女神様のやうに氣高い心を持つたナイチンゲール嬢の一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少呼少女の爲に書れたはじめての本です。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第七編

ワシントン

三井信義先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第八編

大楠公

三島霜川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感じるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が解る本です。

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第九編

ロシア英雄 ピーター大帝

大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシヤを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です

金九十錢 送料金六錢

偉人傳大系 第十編

お釈迦様

齋藤佐次郎先生著。お釈迦様ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釈迦様の一生をわかりやすく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がたい本です。

金九十錢 送料金六錢

金の星

五月號

（通卷第九拾號）

金蘭社の新刊書

世界童話叢書第十三編
加治亮介編　池上浩裝幀
オランダ童話集
四六判箱入美本
本文三〇〇頁
原色版　四枚
凸版副挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

オランダと云ふ國は德川幕府の鎖國時代にあつても特に通商を許され、我が國文化の父とも云はれた關係深い國であるだけに、我々には非常に親しみのある童話を持つてゐます、殊に雜中「鬼の旅行」は日本を題材としたものです。是非御一讀下さい。

世界名篇物語叢書第十一編
大戸喜一郎編　高坂元三裝幀
ノートルダムの傴僂男
四六判箱入美本
本文一七二頁
挿畫三色版外十葉
定價金九十錢
送料十二錢

パリーのノートルダム寺院を取卷いて此の物語りは生れ出でます。氣味の惡い傴僂男の片眼、陰々と鳴り渡る鐘、深刻な場面は到る處に展開されます。吾國でも活動寶眞となつて廣く紹介されてゐます。原作は本叢書第七編ミゼラブルの作者ユーゴオです。

少年少女文藝講談叢書第五編
小久保陽三編　池上浩裝幀
天一坊と伊賀之亮
四六判總クロース
原色版カヴァ附
挿畫三色版外十頁
本文二〇二頁
定價金一圓
送料十二錢

大岡政談中でも最も大きな事件の一つとして、後年芝居に講釋に語り傳へられてゐる天一坊の德川天下乘取り事件は、何度聞いても飽きない面白い物語りです。伊賀之亮と大岡越前守とのしのぎをけづる大智謀合戰は、讀んでゐるうちにも思はず手に汗を握らせられます。

少年少女科學大系第二編
松平遼夫著　池上浩裝幀
兒童地文學
（地球の歴史）
四六判總クロース
ドイツ式裝幀
本文約一七四頁
定價金一圓
送料十二錢

吾々が住んでゐる地球は、どんな風に出來たのか、又あの恐ろしい地震は如何して起るのか、噴火、海嘯等凡そ地球上に起るすべての現象の疑問は本書に依つてたちまち解かれます。

少年少女科學大系第三編
松平遼夫著　池上浩裝幀
兒童進化論
（生物進化の歴史）
四六判總クロース
ドイツ式裝幀
本文一七四頁
定價金一圓
送料十二錢

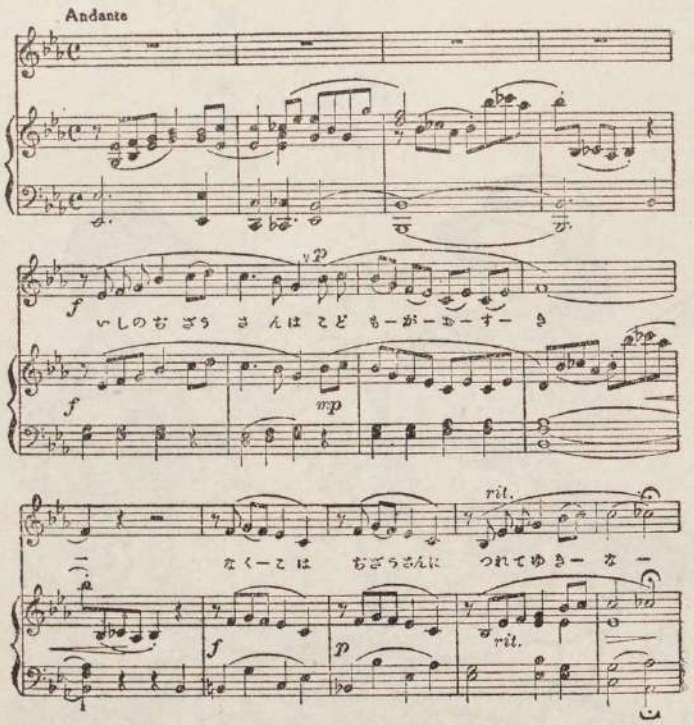
人間の先祖は果して猿でせうか、先祖は同じであつても時代をふるに從つて其形が變つて遂には別種のものとなると云ふやうな、人類を始めとして動物植物の進化の有樣な興味深く書いた、自然界の童話ともいふものです。

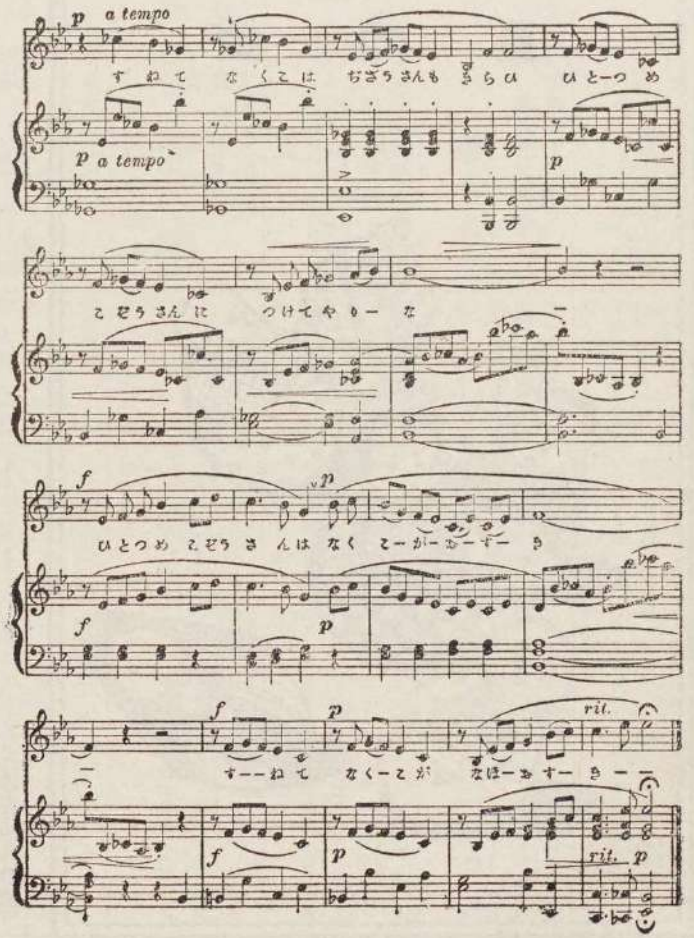
東京市外巣鴨上駒込二八二　金蘭社　振替東京六一七〇一番　電話小石川五五六六番

泣く子

作曲　本居長世

作謠　野口雨情





泣く子

野口雨情

寺内萬治郎畫

石の地藏さんは
子供がおすき
泣く子は地藏さんに
連れてゆきな
すねて泣く子は

地藏さんもきらひ
一つ目小僧さんに
つけてやりな
一つ目小僧さんは
泣く子がおすき
すねて泣く子が
なほおすき

附記。低學年の子供さん達のうちで、お友達の誰かが、すねて泣いてゐたならこの童謡をうたつてみて下さい。

恐れを知らぬ人

立石美和
川上四郎畫

一

世界中の、強い國を對手にして、獨逸が戰爭をして居た時の事であります。

強い、強いと、うわさされた獨逸の軍人の中でも「恐れを知らぬ勇士」と稱えられて、ことさら社會から、尊敬されて居た軍人がありました。

戰地で負けた、傷をいやす爲に、南の方の、温かい療養場に、永い間、滯在して居たこの人が、數週間の休暇を貰つて、久し振りで、ベルリンへ歸つて來た時の事でありました。

新聞は筆を揃えて、勇士の武功を數えたてました。

華々しい歡迎の宴が、そこでも、こゝでも、毎日のやうに開かれました。

人々は、熱狂に近い程、勇士を迎え、勇士を訪れ、勇士をとりまいて、親しく、勇士を見、勇士と語り、勇士の手を握る事の出來る名譽を、競つて居るやうにさえ、見えるのでした。

最後の日、勇士の、極く親しい、お友達や知人達が寄り合つて、ごく内輪の、目立たない、そして質素な、しかし乍ら、一番親しみの深い、一番熱心な筈の、歡迎會が開かれました。

食卓につく前に、ある人は、勇士と抱きあつて、長い間むせび泣いて居ました。

『小父さま！』

勇士を見るなり、さう叫んで、首っ玉へ、嚙りついた、可愛い女の子も居ました。

云ひ表す事の出來ない。懷しい視線！

語り盡す事の出來ない、無言の友情！

愛情の波が、部屋の空氣にとけこんで、靜かな感激が、つゝましく人々を抱いて居るかのやうに見えました。

勇士は立ち上りました。

何故か、勇士はうちしほれて見えました。何故か一沫の、物悲しい影が、勇士の顏をかすめて動きました。

暫らく、勇士は、眼を緘じたまゝ、動きませんでした。

やがて、靜かに、斯う語り出すのでした。

二

『……皆さん！　皆さんは、平常から、私と、極く親しい方ばかりです。で、昨日までの、外の會合での時と異ひまして、私は少しの飾氣も、極端に云へば、少し位、禮儀に欠けた、振前さえも、許して頂けるやうな氣がします。で、私は、自分の、思ふま

まの、感じたまゝの、お土産談を、させて頂けると思ふのであります。

何故か、そして、いつの間にか、私は「恐れを知らぬ勇士」といふ、素晴らしい名で呼ばれる男に、なつて終ひました。

まつたく、開戰以來、私達の聯隊は、何處でも、此處でも、勝ち續けて來たのであります。いつでも私達は、前へ前へ進みました。不思議な程、大した困難にも、出會つた事がなかつたのであります。

絶え間のない進軍！　たゞ、それを續けて居ればよかつたのです。すると、後ろの方では、即ち、母國では、私達の聯隊に、武勳の名譽を、になわせて下さつたのです。

歸つて見て、いや、内地から郵送された、新聞を見た丈でも、自分達の名譽の、餘りに大きいのに、驚いたのは、決して、私ばかりではないと思ひます。

……ある日、その前日の夜から、夜明けにかけて先登部隊と、敵軍の間には、隨分烈しい戰鬪が繰り返されて居ました。

夜が明けきつて見ると、廣い戰場には、一人の敵影も見えませんでした。

ロシア軍は、すつかり退却して終つて、例に依つて、私達は、新らしく占領した、廣い原野の守備につけばいゝのでした。

部隊は前進しました。

私は、十名ばかりの、下士卒を連れて、占領地の見分に廻りました。

所々に、敵の死骸が、横はつて居ました。

中には、まだ呼吸がきれないで、うめいて居る人さえありました。

ちようど、だら〳〵坂を下り乍ら、左の方の、木蔭になつた窪みを、見た時、私はハッとして、立ち止つて終ひました。

其處には、五六人の、敵の兵隊が、折り重つて倒

れて居ました。が、それは、何んでもない事です。他の所では、五十人も百人も、時には、何千人といふ程の、死骸さえも見る事があるのですから。……併し、その蔭に、眞黑な、不思議な人影が動いたのを、私は確に見たのです。

「何んだらう？」

私は、自分の部隊と分れて、獨りで、窪みの木蔭へ近づいて行きました。

三

『誰だ？』

叫んで、私はピストルを向けました。

其處には、少しの傷も負はないロシア兵がかくれて居たのです。

私の聲を聞くと、ロシア兵は、愕いて飛び上りました。そして、私の、差し向けたピストルを見ると同時に、大きな兩手を、不器用に、高く差し上げて終ひました。

私は、何時でも、引金を引けるやうに、身構えながら、一歩々々、そのロシア兵に迫つて行きました。

ロシア人は、もう、四十を、いくつも越したらしい老兵でした。が、世の中に、こんな物悲しい、賴りない表情をする男が、またと一人あるでせうか？

何んといふ、氣力のない空ろな眼でせう！　オドオドと、おびえ切つた不安の影が、青ざめた老兵の顏を、せわしく去來して居ます。私は、正視するに忍びませんでした。

老兵は、よろ〳〵と、倒れかゝるやうな足取りで二三歩、私の方へ進み出て來ました。

そして、かわき切つて、もつれる舌を、喘ぐやうに、大げさにあやつり乍ら、しわがれた聲で、何か話し初めました。

耳を澄しては見ましたが、元々私には、一言のロシア語も分らないのでした。

でも、私の、耳を傾けて居る樣子が、幾分老兵を安心させたのでせうか、空ろだつた奥眼に、歡びに似た、涙が輝き初めて、もつれ勝ちな口を、烈しくうごかせて、だん〳〵力强い、高い聲になつて、それは〳〵熱心に、語り續けるのでした。

『何を云つて居るのか？』

何んなに私は、その男の言葉を知りたかつたか知れません。

これ程熱心な、人の樣子を、私は見た事がないのです。敵の前で、今、この男の眼にやどつて居る涙程、不思議な力を持つた、眞實の輝きに、會つた事がないのです。

殘念な事には、言葉が、私に、この人の心を傳へて呉れない！　が、ふと氣がつくと、老兵は、高くさゝげて居た兩手を、いつの間にか、烈しく振り動かして、何か、手まねをして居るらしいのです。

左の手では、三本の中指を立てゝ何かを示し、右の手では、太い、不器用に大きい親指一本を立てゝ、何かを示して居ます。

『何んだらう！』

私はまた考へました。

次の瞬間、私は、不愉快な、苦い笑ひが、自分の唇へ上るのを、かくし切れませんでした。

『はゝあーん、金だな！』

私は、さう思つたのでした。

『命を助けて呉れ！　さうすれば、これこれのお金をやるから、さう云つてるのだな』

私はさう、解釋したのでした。

さう思ふと、私は一時に、カッとして、頭のほてるのを感じました。

『無禮な奴だ！　下劣な奴だ！　貴樣達に、ドイツ人の魂がわかるか！　よし！　ぶつ放してやるぞ！』

私は、さう思つたのであります。

が、また、せつなさうな、老兵の顏が、私の決心をにぶらせました。

それに、きつと、殘忍な私の決心が、響のやうに老兵の心を打つたのでせう。新らしい戰きが、ありありと、青ざめた顏に影さして居ます。突然、熱心の度を加えた、その話し振りは、叫び出したといふよりか、うめき出したと云つた方が近いやうに聞えます。眼からは、堪え切れない哀願の涙が、おし氣もなく、流れ出て居ます。

私は、眼がくらみさうな氣がしました。

『可哀さうな奴だ！　憐れな奴だ！』

同情するとも、輕蔑するともつかない心持ちで、私は、自分で自分に、云ひわけをしました。

『……それに、いま、既に戰爭がすんで、敵の陣地を占領して終つたいま、この男一人を、助けても、また助けなくても、わが獨逸軍の榮冠には、少しの係りもないのだ！　さうだ、よし、助けてやらう！』

私は、また、全く反對の決心をしました。

そして、老兵に、大きく點頭いて見せて、差し向けて居た、ピストルを引きました。

私の心が、通じたのに異ひありません。老兵は、高い、叫び聲のやうな、歡びの聲をあげて、崩れる樣に、私の方へ走り寄つて來ました。

わずかに、あと、六歩か七歩で、私達の身體は、觸れ合つたに異ひありません。

それ程、間近かく駈け寄つた時、老兵は、急がしく、右手をポケットに差し込んで、何かを摑むらしい樣子を見せました。

突嗟！

『ピストルだ！』

私は、稻妻のやうに想像し、それよりも早く、さう確信したのです。

惡寒が、ぞつと、身體中を走りました。

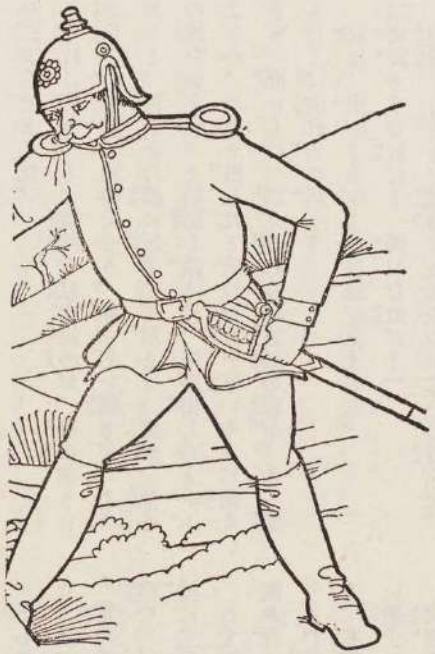
次の瞬間でした。

何といふ早さだつたでせう！

私は、ズドン！　と、自分のピストルを打ち放つたのであります。』

四

誰も、一言も、口をきく人がありませんでした。一座は、水を打つたやうに、しづまり返つて居ました。



人々は、聲をのんで、話の續きをまつて居ました。

勇士は、語り續けました。

『……命中したのです。ロシア兵は、のけざまに、倒れて終ひました。而も、右の手は、なほ、固くポケットの中で、何かを握つて居ます。私は、すいつけられるやうに、走り寄つて、老兵の右の手を引き出して見ました。

ピストル？　何が、其處にあつたとお思ひになります？

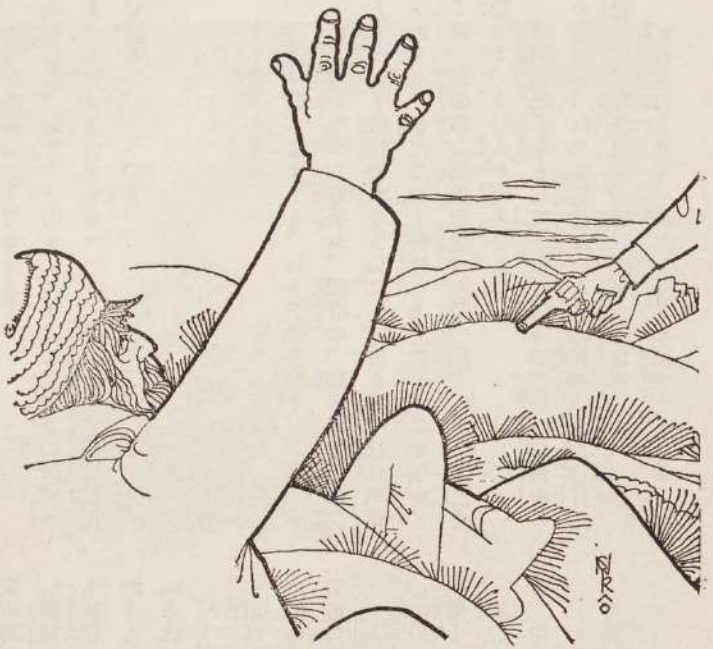
……これです、いま、お目にかけます。この、一枚の寫眞が、老兵の手に握られて居たのです。

三人の、いたいけな子供達と、一人の、年取つた老夫人、私は、この寫眞を、一眼見た瞬間、あの老兵が、差し出して見せた三本の左の中指と、不器用な右の手の親指とが、何を語つて居たかを、すぐに、覺る事が出來ました。

そして、私は、自分の魂が、強い後悔に、青ざめて、震えるのを覺えました。

……この、白髮の、おばあさんは、ロシア兵の、死におくれた母親ではなかつたでせうか！　三人の、いぢらしい姿は、母親に先き立たれた、老兵の子供達ではなかつたでせうか！　さうです！　この寫眞の裏の、子供達の手で書かれた、たどたどしいロシア文の意味は、

『お父さま、早く歸つて來て下さい、きつと、きつとですよ。お父さまが、心配するといけないから、妾達は、毎日、温和しくして、おばあさんを、困らせないで、お父さまを待つて居ます』



と、いふのださうであります。

『そして、お父さまのカーチャ、お父さまのペヂエリ、お父さまのナーシャ』と、子供達の名が、並んで居るのださうです。

……皆さん！

私は、耻ぢなくても、いゝでせうか？

戰ふ力を失つた老兵が、國許の、頼りのない母親と、幼い子供達の事をうつたへて居る時、私は、『はゝあーん、金だな』と解釋しました。老兵の手が、この、涙の多い寫眞を握つた時、『ピストルだ！』と思つて、その人を射ちました。

感謝の紀念品として、ある限りの、歎びの情をこめて、贈られたに異ひないこの寫眞を、私は、打ち殺して、奪ひ取つて歸つて來ました。

私は告白します。「恐れを知らぬ勇士」といふ、稱

賛の聲が、私の身にふりかゝる度に、私は、恐ろしい質問の聲に詰かれるのです。私自分のか、それとも神様のか、あるひはあの老ロシア兵の聲か、ともかくも、眼には見えない人の聲があつて、

『それはお前か？』

と、私にきくのです！

「恐れを知らぬ勇士」！　それは私でせうか？

せめて、私が、今少し、恐れる事のすくない人間であつたら……』

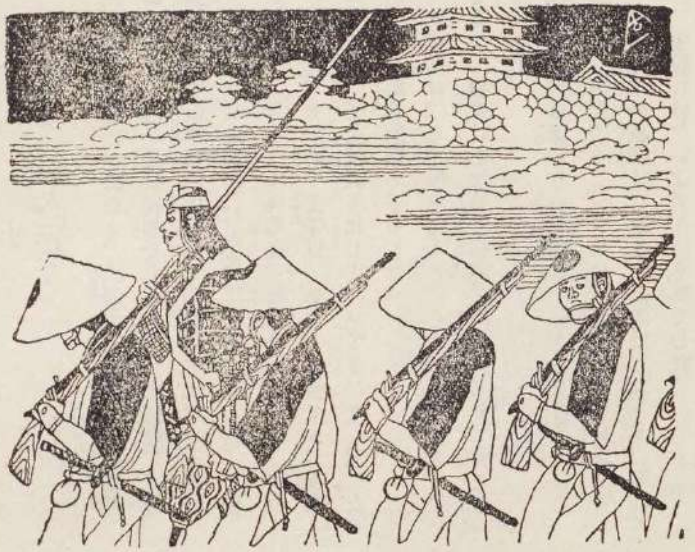
五

勇士の話は終りました。

隅の方では、シク〳〵と、聲を忍んで、泣いて居る、やさしい女のお客も居ました。

――長い間、人々は、默つて居ました。

（をはり）



大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫

【前回の梗概】元祿十四年三月十四日、淺野内匠頭は江戸の芝、愛宕下、田村右京太夫の邸で切腹をさせられました。しかし、その領地、赤穗の方では夢にも、その事を知りませんでした。

すると、十八日の眞夜中頃、二挺の早駕籠が、大石内藏助のところへやつて來ました。早見藤左衞門と茅野三平とは、死んだやうになつて、江戸表の恐ろしい「知らせ」を持つて來ました。つゞいて十九日の晩方、原惣右衞門と大石瀧左衞門とが、やはり早駕籠で、やつて來て、内匠頭に切腹、家は斷絶――城も取り上げられさうな「知らせ」を持つて來ました。赤穗の家中は、初め、天下の兵を引受けて籠城しようと云ひました。次に殉死をしようと云つて、おしまひに、すなほに、城を明渡して了うといふことに「評定」がきまりました。主税は、多くの家中と一緒に、城を出に討死する覚悟をしてゐました。ところが、お城、明渡しと評定がきまつた――さア、主税は不平でゝたまりませんでした。

五、「浪人」になッて

「お金の分配」が濟むと、大野九郎兵衛、郡右衛門の父子は、眞ッ先に夜逃をしました。それは、九郎兵衛が、「お金奉行」岡崎八十右衛門の惡口を云ッて大力の八十右衛門に「だんばん」に押掛けられ、それが怖くて、豫定よりも早く、赤穗を逃出して了ッたのでした。その時、父子は、あんまり慌てゝ、五歳になる女の子を置去りにして行ッて了ひました。女の子は、郡右衛門の子でした。

内藏助は、その事を聞くと、その子を引取ッて、そして、懇意にしてゐる赤穗の町人に預けて育てさせました。

『子どもには罪がない。殊に、子どもを置去りにして逃げた者があると云ッては、赤穗家中の恥辱だ』

たぶん、内藏助は、さういふ考でしたらう。それが、主税には、いよ〳〵、不平でした。

『お父上も、つまらん事をなさる。九郎兵衛のやうな人非人の孫女なぞが、どうなッたッて、かまはんぢやないか。不忠者の見せしめのために、大道に、酒物にして置いてやれば可いンだ』

さう考へて、ムカ〳〵してゐました。そして、

『何故、籠城をしないのですか。お城を明渡しては、赤穗武士の面目が、丸つぶれぢやありませんか』

と、思ふ存分に、やッつけたい心もちが、胸、一杯でした。それが、喉のところまで、突ッかけて來るやうなこともありました。しかし、沈着な父の前に出ると、それがどうも、口まで出ませんでした。

するうちに、ある日のこと。留守居役として、京都に行ッてゐた小野寺十内老人が、ひよッくり内藏助のところへ訪ねて來ました。そして、座敷で、二人きりで、永い〳〵間、何か、ヒソ〳〵、話をしてゐました。

恰ど、主税が、二度目の茶を汲むで行ッた時のこ

とでした。二人は、頭と頭とを突合はせて、何か、卷物のやうなものを繰り展げて見てゐましたが、主税が入ッて行くと、内藏助は、慌てゝ其れを、隱すやうに、傍へ押しやりました。そして、變に、氣まづい顏をして見せました。

主税も、何か知らず『うッかり、惡いところへ來た』と、いふやうに、ハッとしました。そして、急いで、座敷を引退りました。さうして、一人で、考へて見ました。

『小野寺の伯父樣は、すてきな學者だ。それに、大へん、義の堅い人だといふから、ひよッとすると、お父上に、籠城をすゝめに來たのかも知れない……いや、きッと、さうだ』

と、かう、主税は、自分だけで、きめて了ひました。

皆が、默りこくッて、靜に考へてゐるやうな邸のうちに、「籠の鶯」の啼く聲が、のどかに、うるはし

く聞えました。主税は、この頃、その鶯のことも忘れて了ッてゐました。朝に晩に、自分に摺餌を作ッてやッて、ずゐぶん、大事にしてゐたのですが、もう、すッかり、吉千代に任せきりになッてゐました。

――で、のんきに、鶯を大事にしてゐたことなぞはもう、よほど、遠い、以前のことであッたやうにも思はれました。

小野寺老人は、それから、間もなく歸ッて行きました。主税は、玄關へ見送りに出ました。

『ほゥ、主税殿、久らくお目にかゝらぬうちに、ぐんと、大きくなられたな。アヽ、お見事なかつぶく（體格）ぢや』

と、小野寺老人は、柔和に、にこ〳〵しながら、さう云ッて、さて、『何事もない』と、いふやうに、ひよッくり〳〵、出て行きました。

内藏助も、平々凡々――至極、穩に、少しのきんちようもなく、小野寺老人を見送ッてゐました。

『何アんだ』――主税は、また、あてがはづれたやうな氣がしました。少し「張やひ」の出て來た心もちが、また、グシャンとなッて了ひました。

小野寺老人が、門の外へ出て了ふと、内藏助は、チラと、主税の方を見たまゝ、クルリと背を向けて、自分の居間の方へ行ッて了ひました。主税は、耐らなく、心淋しくなッて來ました。

主税も、自分の部屋に歸りました。そして、どたりと、仰向けに寢ころがりました。『あゝ』と、いふ歎息が、おのづと、重くるしく出て來ました。

『いよ〳〵、お城を明渡すとなれば、わしは、どうすれば可いのだ』

主税は、天井を見つめながら、じッと、その事を考へてゐました――主税は、この日も、やはり、小野寺老人が、敵討の「連判狀」に加はッたことを知らないのでした。

赤穗の城下を始め、近國でも、「籠城」の噂が、ずゐぶん、盛でした。

『内藏助といふ、えら物が、まさか、ノンベンダラリと、城を明渡しはしないだらう』

皆な、さう云ッて、一と戰爭、始まることゝ思ッてゐました。

四國、中國の大名は、江戸幕府のお手傳をして、功を立てようと、めい〳〵、國境々々へ兵を出しました。ある者は、「間諜」をよこして、赤穗の樣子を探らせました。ある者は、赤穗の沖へ、兵船を差向けました。

その、今にも『何事か起る』と、思はれるやうな物騷がしいうちに、お城受取りの上使の來る日が、だん〳〵に、近づいて來ました。家中の者は、大野九郎兵衛を始め、近藤源八、玉虫七郎右衛門――さういふ身分の好い者から先きに、赤穗を立退いて行きました。家中の屋敷町には、一日々々に、空家が増えました。そして、ひッそりと、淋しくなッて行きました。

『腰拔め』――主税は、屋敷を引拂ッて行く者がある度に、さう云ッて、ふんがいしました。そして、また、『殿樣が切腹なされてから、まだ五十日にもならないのに、何んといふ、けいはくな人等だ』と、思ッて、變に、悲しくもなりました。

しかし、行く者は行ッて了ひました。空家は、ドン〳〵出來ました。近所は、晝も、ピタリと雨戸が閉ッて、盲のやうな家ばかりになりました。その情ない有樣を見て、主税は、ホロ〳〵、泣いてゐることもありました。

『成程、これでは、籠城も出來ないな』

主税は、ック〳〵と、さう思ひました。そして、籠城をしようとしない、父の心もちが、やッと解ッて來ました。

その頃、内藏助は、毎日〳〵、お城へ行ッて、五

十何人の「同盟」の人々を指圖して、せッせと、お城受取りの上使を迎へる支度をして居りました。城内の整頓、掃除、道路の普請、橋の架けかえ――殘ッてゐる人等の仕事は、なか〳〵、忙しいことでした。

ある時、お城では、穴を堀ッて、たくさんの、書きつけ類を燒きました。すると、その煙のあがるのを見て『あれ〳〵、お城では、鐵砲の彈を作ッてゐるのだ。こりや、籠城の支度をしてゐるのだな』

さういふ噂が、また、一時、パッと世上にひろまりました。

その頃、お藏奉行の貝賀彌左衞門が、人足どもを指圖して、城外のお米藏から、二百石の米をお城へ運入れました。それを見て、

『いよ〳〵、籠城に違ない』

と、云ッて、赤穗の町人のうちには、老人や子どもを、遠くの方へ預けたり、さアと云へば、いつでも逃出すやうな支度をしてゐる者もありました。赤穗の町は、火の消えたやうに淋しくなりました。そして、皆な、ソワ〳〵して『どうなることか』と、思ッて居りました。

四月の十六日になると、江戸幕府から、荒木十左衞門と、神原采女とが、上使として、やッて來ました。これは、お城を受取る上使ではなく「お城を取上げる」と、いふ、命令を持ッて來たのでした。そして、家中の者は、三十日の間に、城下を引拂へといふ命令でした。

これは、内藏助も、かねて、覺悟してゐたことでした。謹むで、その「命令」を受けて、上使等も、『行屆いたものだ』と、感心するほどに、禮儀をつくしました。

十八日の夜になると、播州龍野の城主、脇坂淡路守が、兵を引きつれて、やッて來て、城下の大手先に陣を取りました。つゞいて、十九日の未明、備中足守の城主、木下肥後守が、同じく兵を引きつれてやッて來て、城の搦手の方へ陣を取りました。これが、どちらも、お城、受取りの上使でした。さうして、朝のうちに、赤穗城は、この二人の上使に明渡されて了ひました。

脇坂淡路守と木下肥後守とが城へ入ると間もなく内藏助は、すべての「手續」を濟まして、川口門の方から、城を出ました。そして、六十人ほどの家中――多くは「同盟」の人々と一緒に、一と先づ、華岳寺といふ、お寺へ引揚げました。内藏助等は、お城の方を振返り〳〵、悄々とお寺の方へ歩みました。三人、五人と一緒になッてゐましたが、誰、一人として、口をきく者もありません。多くの人の眼には悲痛の涙が光り、頭は、低く、俛れてゐました。

内藏助の邸では、その四五日前から、邸を「引拂ふ」支度をして居りました。

『あすは、遠林寺へ立退くのだ』

内藏助は、その日、邸に歸ると、家の者に、さう云渡しました。

主税は、近所の邸が、だん〳〵、空家になッて行くのを、ふんがいしてゐました。それが、今度は、自分の邸も空家にしなければならなくなりました――それが、どんなに、情けなく、悲しかッたことでしょう。

『あの、青柳も、どこへか、やられて了ふ……あすは、別れて了はなければならない』

主税には、わけても、それが、悲しいことでした。殿樣から、ぢき〳〵に下された馬、七歳の年から、づッと稽古をさせてくれた馬――その「青柳」が、馬商人の手に渡されて了ふかと思ふと、主税は、あんせんとして、おのづと、涙が、滲み出して來るのでした。

昨日から今日にかけて、主税は、いく度、厩の前へ行ッて見たことでしよう。あんまり、何度も〳〵行くので、しまひには、そッと、忍んで行くやうにして、出かけました。そして、いつものやうに、大きな手で、長い顔を撫て遣りながら、『お前も一緒に遠林寺に行くと可いンだが、わたし等も、あすこに永くはゐないのだ。もう、浪人になッて了ッたのだから、どこへ行くか解らない……殘念だが、お別れだ。達者でゐてくれ、可いか。達者でゐるのだぞ』

と、まるで、人間に云ふやうに、よく、云ッて聞かせたりしました。「青柳」は、おとなしく、主税のするまゝになッてゐました。

主税は、馬商人に賣られて行く「青柳」が、不思議なほど、可哀さうに思はれてなりませんでした。

もう、晩方に近い頃のことでした。主税は、自分の部屋で、本やなどの荷作りをして、「引擲」の支度をして居りますと、そこへ、吉千代が、バタ〳〵と

駈込むで來ました。

『兄さん、鶯は、どうするンです……逃がしてやるンですか』

と、少し、息を切らしながら、たづねました——すてきな「事件」でゝもあるやうに。

『うん……さうだな』

と、主税は、何か、別なことを考へてゐるやうにボンヤリした返事をしました。

『阿母樣は、逃がして了へと有仰るンです』

と、吉千代は、『そんな事が出來るものか』と、いふやうに、不服らしく云ひました。

『さうか……』

と、主税は、やッぱり、あいまいな返事をしました。

『ぢや、逃がしてやッても可いンですか』

『うん……』

『この間、捕ッた奴も……』

『うん……』

『ぢや、二羽とも逃がしてやるンですか』

と、吉千代は、いよ〳〵、不服らしく、念を押しました。

『仕方がないぢやないか。遠林寺へは持ッて行けないもの……』

と、主税は、やッと、ハッキリと云ひました。

『さう……』と、吉千代は、がッかりしたやうに云ッて、悄々、引返さうとしました。

『待ちなさい……』

主税は、物を片づける手をとめて、慌てゝ呼止めました。

『今、兄さんが行くよ。それまで、逃がしちや可かんよ』

『はい……』

と、吉千代は、好い加減に、返事を投捨てるやうにして、とッとと、出て行きました。

『ア、鶯も逃がしてやるのか』

主税は、それを、大して惜しいとも悲しいとも思ひませんでしたが、しかし、一ッ一ッ、自分の物が自分を離れて行ッて了ふのが、何んとも云ひやうのないやうに、淋しく思はれました。そして、『家も無くなッた。浪人になッた。生まれ故郷も去る』――さういふ感じが、かはる〳〵、シミ〳〵と、胸に迫ッて來ました。

『わたし等には、もう、お城もなければ家もない』

主税には、それが、どんなに、悲しく、口惜しく思はれたことでしよう。

ホ、ホ、ホ、ケ、キョ、ケ、キョ……人間ならば「野ら聲あげて」とでもいふやうに、鶯が、ふいと、ぶきようにに、オド〳〵した聲で啼きました。それは、やッと籠に馴れて來た、先頃捕へた鶯の聲でした――何んとはなしに、勢のない、晒嘎れたやうな聲でした。

それから、間もなく、表座敷の椽側の隅で、主税と吉千代とは、頭と頭とを突合はせるやうにして、鶯に、「最後の餌」をたべさせてゐました。

舊い塒に歸される鶯と、これから、新らしい塒を探さなければならない鶯と――逃がされる鶯は、何んにも知らずに、「晩の餌」をつゝいては、せはしく、活潑に、籠のなかを、あッちへこッちへ、飛移ッてゐました。

主税は、それを、じッと見つめてゐました。そこらには、「引掃」の荷物が、積まれたり、抛出されたりして、散らかッてゐました。

『もう、可いでしよう』

さう云ッて、吉千代は、古い鳥籠の方に手をかけました。

『うん……』

――主税は、『まだ』と云ひたいところを、無理に、

あいまいに、さう云ッて了ひました。

吉千代は、戸口をあけました。捕へられた鶯は、パッと、羽音を立てゝ、勢好く籠から飛出しました。そして、見る〳〵うちに、庭木の間を飛びぬけて、どこへか、飛んで行ッて了ひました。

今度は、「籠の鶯」――それは、もう、三年も飼馴れた鶯でしたが、主税は、しばらく、ぐづついてゐて、やがて、思切ッて、自分に籠の戸をあけましたが、鶯の方では、のんきに、マゴ〳〵してゐて、急に、外へ飛出さうとしませんでした。一度、戸口まで來ましたが、また、引返して、ちよこ〳〵、飛廻ッてゐました。

『馬鹿だな』

さう云ッて、吉千代は、かろく、籠をうごかさうとしました。

主税は、慌てゝ、それを止めて、じッと、籠のなかを見つめてゐました。

しばらくすると、その鶯も、籠を飛出して、まづ、庭さきの松の樹にとまりました。そして、やゝしばらく、枝から枝に飛移ッてゐましたが、やがて、ふいと、飛立ッて、向ふの籔の方へ見えなくなッて了ひました。二ッの鳥籠は、淋しく空になッて了ひました。

あくる日、内藏助の一家は、殘らず、遠林寺に引移りました。

そこに、半月ほどゐて、それから、今度は、赤穗から半里ほど離れてゐる尾崎村といふところの百姓家に引ッこしました。

そして、そこに、五十日ほどを暮らして、今度は、いよ〳〵、故郷の地をはなれて、京都の近在、山科といふところへ轉住ることになりました。むろん、一家族、のこらず一緒でした。

（つゞく）

童心句

野口雨情選

山口　永峰治一

◎川ばたで牛がつゆくさたべてゐる

（評）靜な情景が目に見ゆるやうだ。

山梨　清水濱雄

霜ねぎをつかんでつめたい冬の朝

山口　原田武夫

雨上り垣根を通すらつばの音

埼玉　柳川幸平

菜畠をボチが蝶々追つてつた

○一二三蛙そろつて飛び込んだ

（評）蛙の飛びくら一二の三。

山梨　長田幸雄

○春を待つ鯖の親が凍り死

（評）可哀想なことだ。

神奈川　原田力太郎

○虹の橋隣村まで續いてる

（評）森を越して川越して。

柿の實に夕日笑つて日が暮れた

秋田　岩谷みよの子

○藏たてだわらくづくわへて雀さん

（評）金持ち雀ヤーイ。

鯉幟青いお空を泳いでる

蜜蜂さん花から花へ蜜買ひに

埼玉　加藤正雄

春になつたよ木のめがふくらんだ

正月になつたたこあげに來い

雪が降るかな空が白くなつてきた

山口　萬代三郎

さらさらとながるゝ小川のどきみた

神奈川　指旗昇

○春びより牛がねむそに歩るつてる

（評）時折ゐねむりもしながら。

神奈川　河邊すみ子

あたゝかさのびたなのびたなつくしんぼ

お日さんをまぶしがつてるすみれかな

秋田　岩谷貞三

ポツタリと雨だれお池にわをかいた

お月さん毎晩お旅でごくろうさん

高知　植田良實

この月よ影をふみふみお使ひに

東京　川島秀雄

○くんくんと知らない犬がついてくる

（評）犬曰く『坊っちやんのお家は何處』

埼玉　川島康之助

犬の子早く出てみな雪がふる

熊本　山村加枝子

ゆきだるまゐばつてゐても消えてゆく

長野　淺輪節子

冬の空星が寒さうにふるえてる

東京　小池秀詩路

○お月様今夜もせんこ花火かな

（評）お月様曰く『どれ、眺めてやらうかナ』

おそろいの帶ときれいだ二重虹

長野　小田多井しな子

日が沈む西のお空は夕やけだ

長野　梶井千代子

ぬかるみをとぼとぼとゆく馬の影

長野　小西常幸

寒むさうにあひるが鳴いた川の水

東京　藤澤一郎

田舍道馬車屋のラッパ聞え來る

東京　青木義一

杉の木に春の夕日があたつてる

新潟　長谷川賢三

○子の牛が母さん牛の夢見てる

（評）角の生えてる母さん牛の夢。

和歌山　森本みさを

○みのむしがぶらんこしてるうごいてる

（評）みの虫氣をつけなあぶないぞ。

埼玉　高山あきら

木の葉とぶ野原に大ぜい麥をふむ

かれすゝき見ゆる野原の一軒家

岐阜　岩月繁雄

若草を小さい馬が食べてゐる

○神鳴りだ子供等お臍かくしてる

（評）神鳴り曰く『隠してゐるな』

險呑な宿屋

川崎春二

岩岡とも枝畫

一

人間も、いろ〳〵な動物たちも、まだ、おなじ言葉を使つてゐた頃の話です。

仕事の都合で、しばらく川べりで暮してゐたお父さんとお母さんとが、三人の子供を連れて、山の向ふのもとの部落へ歸つて行く時のことでした。

途中の山の中で日が暮れてしまひました。

勿論、道なぞといふものは何處にも見ることが出來ない時分ですから、夜の暗さに山を越えて故郷の部落に行くといふことは難かしく、とりわけ小さい子供を三人も連れては、どうにも夜道する譯にはいきませんでした。

と言つて、そこでごろ寢してしまつたのでは、獅子や虎や狼なぞに食べられる心配があります。——かう言ふ時には、皆、木の上にのぼつて一夜を明かすのが、その頃の習慣でした。

で、親子の者は、泊るのに便利な木を探しまはりました。

ふと、お父さんは斷崖のところで、恰度いゝあんばいに宿れさうな洞穴を見つけました。

『これはうまい！　俺達が今まで住んでゐたところなぞよりもずつといゝ洞穴だ。今夜はこゝで寢ることにしよう……』

かう言つて、大喜びで親子五人がそこに這入りました。

ところが、それは、たゞの洞穴ではなかつたのです。

『お父さん、こゝは虎臭くてたまりません。』

『虎の巣ですよ。こんな所へ宿つたら大變です！』

『早く、逃げ出しませう！』

子供だちは、びつくりして騒ぎ出しました。

しかしお父さんは、それほどあわてゝはゐませんでした。

『なる程、こりや虎の棲家だ！　どうも、あんまり具合がよすぎると思つた。ほんたうに枯草や毛なぞがあつて氣持がいゝ。何とかして、今夜はこゝに宿りたいものだ……』

『何を考へ込んでゐるのです。そんな呑氣な場合ではありますまい。いまに、虎が歸つて來たら私達は喰ひ殺されてしまひます！』

お母さんはもう、一番小さな子を抱きあげてゐました。

『いや、そんなに慌てることはない。いゝ工夫を思ひついた——』

『だつて、夜は、あなたが幾ら強くとも虎には勝てませんよ。』

『そこが工夫の要るところだ。心配するな。』

『どんな工夫か知れませんが、隨分險呑なことではありませんか。』

お母さんは、抱きあげた子供を下ろさうとはしませんでした。

『お父さん、私たちは心配でとても眠れやしませんよ。』

『早く、お父さんの工夫といふのを聞かせて下さい。』

子供達は、もうふるへてゐる有樣です。

『まあ〳〵、俺を信用しろ！　何でも俺のいふ通り

にしてゐれば心配はない！』

お母さんや子供達は、お父さんを信頼じてゐましたから、この一言で十分に落着くことが出來ました。

お父さんは一つの計略を話して聞かせ、お母さんや子供達を洞穴の奥の方に居らせ、自分は萬一の場合のために石の斧を持つて入口に立ち、虎の歸つて來るのを待ちました。

二

その時は恰度、虎だちは家族全體で谷川の流に水を飲みに行つてゐたのでした。

やがて虎のお父さんが先頭に立つて、自分だちの棲家に歸つて來ました。

それと知ると、人間のお父さんは、

『さあ、子供だち、さつき言つた通りにはじめろよ！虎たちが歸つて來たから——』と、奥の方へ小聲で言ひました。

すると、洞穴の中では急に、ドタンバタン……暴れ出しました。

『お父さん、お腹が空つて仕樣がありません！　はやく虎を食べさせて下さい。』

『お父さん、虎は歸つてなぜ來ないぢやありませんか。何時になつて虎が食べられるんです？』

『そんなに待つてゐるのはいやですよ。お父さん！私だちはもう、とても我慢なんぞ出來やしません。』

かう口々に喚き散すのでした。

『おい〳〵、靜かにしないか。間もなく虎達は歸つて來るに違ひない。そんなに騷ぐと遁げられてしまふぞ！』

お父さんは、いかめしい聲で、子供達を制しました。

『だつてお腹がぺこ〳〵なんですもの——』

『だからおとなしくしてゐろと言ふのだ。今においしい虎の肉を腹いつぱい食べさせてやる——』

虎のお父さんは、びつくりしてしまひました。これまで、自分達の巣の中になぞ、人間であらうと他の動物であらうと這入り込んだ例もなければ、また自分達をとつて食べるなぞといふ大それた者があつた例もありません。

『おい〳〵、俺達の巣に大變な奴らが這入り込んでゐるぞ！　うつかり近寄つたら、捕へて食べられてしまふ。早くお前達は谷の方へ遁げてゐろ！　俺はもう少し樣子を見て行くから——』

何せ、これまで怖ろしい者に出會つたなぞといふことを、その口から一度でも言つた例のないお父さんの虎が、かう言ふのですから、お母さんも子供達も一目散に谷の方へ遁げて行きました。

洞穴からは、——お腹が空つてたまらない——はやく虎を食べたい——もう間もなく歸つて來るだらう——待つてゐるのはいやだ——もう一寸の我慢だ靜かにしてゐろ——なぞといふ、人間達の聲がます

ます激しく聞えて來ます。

流石の虎も、どうも氣味が惡くなつてしまひ、とう〳〵自分も谷の方へ走り出してしまひました。

『ははあ、虎たちは皆逃げてしまつたよ。もうお前だちは安心して寢てよい。俺はまだ〳〵油斷は出來ないけれど——』

人間のお父さんは、かう言つて子供だちを寢かしましたが、自分は前のやうに入口に立つて用心を怠りませんでした。

三

虎のお父さんが、あわてゝ谷間の方へ走つて行くと、悧巧つぷりやの猿が木の上から、

『虎王閣下、あなたはどうなさつたのです！　そんなにせか〳〵しながら、何處へ、何をしに行くのです？　今日は閣下も、何か怖ろしい目に逢ひましたな！』と、聲をかけました。

『おゝ、猿公や、その通りだよ。今夜ぐらゐ、ひどい目に逢つたことはない。家内中して水飲みに行つてゐた間に、俺達の巣にはとても強い亂暴な人間どもが這入り込んでゐて、俺達を捕つて喰はうと待構へてゐるんだ！』

『人間が？　ほう、それはまた亂暴な生命知らずだ！　あなたは却つて、そいつ等を食べてしまつたらいゝではありませんか！』

『それどころではないんだ！　人間どもが俺達を喰はうとしてゐるんだよ……』

『聞き違ひではないでせうね。』

『そんなことはない！　俺のこの立派な耳で、五遍も六遍も聞いたのだから——』

『はゝあん、わかりましたよ！』——猿はその時分でも、虎なぞとは違つて猿智惠があつたものですから、それは人間の威かしだらうと大抵悟つたのでした。

『虎王閣下、それは人間が智惠であなた達を追拂つたのですよ。あなた達を威嚇して、今夜、あなた達の巣でゆつくり眠らうといふのですよ。』

『どうも俺にはさうとは思はれない——』

『いや、それに違ひありません。人間が吾々動物仲間を、ほんたうにひどい目に逢はせる時には、聲なぞ立てるものではありません。默つて隱れてゐて、いろんな計略にはめてしまふのです。聞えよがしに呶鳴り散してゐる時なぞに限つて、決して怖ろしいことはありません。たゞの威かしですともよ。それが證據に、行つて飛びかゝつて御覽なさい。一噛みに噛み殺せるでせう。』

『なる程、さう聞けば、さうらしくもある！』

『さうらしいぢやありません。たしかにさうに違ひありません。さあ、私がついて行きます！　勢よくお出かけなさい！』

『よし！　それぢや押しかけよう！　久しぶりで人間の肉が食べられるといふものだ！』

虎は、もと〳〵人間に負けたり、喰はれたりする程意氣地なしではないつもりなので、猿に智惠をつけられると大にその氣になり、勇氣を取り戻して引きかへしました。

しかし、力は弱くとも時々上手な勝ち方をする人間を相手にすることですから、虎の心の何處かには臆病神がもぐり込んでゐたに相違ありません。

四

『虎王閣下、こゝの邊りで一つ、威勢をつけなくちやいけません。』

猿にかう言はれると、虎は尤もなことだと思ひ、『ウオウ！』とばかり、一呻りうなつて遠くから威嚴を示しました。

人間のお父さんは——こんどは仲間でも連れて來はしないかな。いよ〳〵油斷がならない！　さあ、

こんどは何ういふ風にして追ひ拂つたものか――と、氣が氣ではありませんでした。

しかし、いよいよとなれば石の斧を振つて、虎の眉見を打ち碎き、生命かぎり戰つたなら、たとひ幾匹やつて來ても、狹い洞穴の口から一足でも踏み込ませはしないと、勇氣をふるひ起してゐました。

ところが、虎はたゞの一匹で、今度は小生意氣な猿を連れて來たのです。

『猿めが悧巧ぶつて、虎を煽てゝやつて來たのだな！』

人間は、忽ちかう悟つてしまひました。

で、向ふから飛びかゝつて來ない前に、こちらから向ふの勢を挫いてやらなくてはならないと考へ、

『おゝ、猿さん、ご苦勞さま〳〵。お前さんがうまく連れて來て呉れなかつたつたら、俺の子供だちは今夜一晩中、――お腹が空いた〳〵と泣き通さなくちやならなかつた！』と、嬉しさうに聲をかけました。

虎は、『これは猿にだまされたのかしら――』と、また、びつくりして逃げ出さうとしました。

猿は『人間といふ奴は、何處まで狡猾なのだらう！』と思ひながら、

『虎王閣下、あれか何時も人間が用ゐるずるい術で

すよ。こんな術にのつては駄目ですよ。早く、飛びかかつてやりなさい！』と、勵ましました。

虎の尻尾を兩手でしつかり摑まへて一生懸命に逃げようとするのを引き戻さうとしました。

この時、人間はまたしても、

『さうだ猿さん！しつかり〳〵！うんと引つ張つてゐてお呉れよ！

お前さんにも、存分にご馳走してやるからな！』とすかさず呶鳴りました。

『チエ！　忌々しい！　またあんなことを言つてゐやがる！』　猿は、口惜しまぎれにかう言ひましたが、虎は、たゞ〳〵猿に騙されたのだと信じて大そう腹を立て

『この嘘吐きめ！』と叫びながら、鋼鐵のばねのやうなその後脚で、『うん！』とばかり蹶り飛ばしましたからたまりません。猿は、三四間宙にはねあげられ、どつと地上に落ちた時には、體中の骨が粉々になつて死んでゐました。

虎は、一散に逃げ走つて行きました。

『まづ、今夜はこれで難を免れた！』人間のお父さんはほつとしましたが、それでも尙安心し切つてしまふ譯にはいきませんから、やつぱり前の姿勢で翌る朝まで、子供だちの安らかな寢息を聞き乍ら洞穴の口に斧を立てゝ番をしてゐたのでした。（をはり）

春祭り（推薦）

静岡　小堀義夫

月夜の櫻は夢のくに
はな笠かむつて
えんやらさ
赤い山車ひく
笛の音
櫻ふゞきの散るかげに
ほんのりゆめいろ
御神燈
大鼓たゝくは
紅だすき

ふけて空には二日月
ほそくかゝつて
おやしろの
ほろほろお鳩は
夢みてる

佐渡の子供（推薦）

新潟　渡邊　直

佐渡の子供は
海ばたで
春になるのを
待つてゐる
越後の山の

雪を見て
少なくなつたと
喜んだ
佐渡の子供に
夜が來て

燕來たのを
夢に見た

お月さん（推薦）

甲府　五味くに三

おぼろ
お月さん
花笠背負つて
ひとりで
花見にゆきました
おぼろ
お月さん
歸りは雨で

背なの
花笠濡れました

土筆摘み（推薦）

横濱　小山えうじ

土筆
摘んだ　摘んだ
おせゝのせ
せつせ
脊高坊で
袴が
つんつるてん
土筆

摘んだ　摘んだ
おちゝのち
ちつち
禿助で
袴が
ずんずるずう

狐の嫁入り（推薦）

茨城　内田みわ路

狐の嫁入すたこらさ
廿日鼠が樽下げて
鼬が風呂敷脊負てゆく
道に彼岸花眞赤に咲いて

お山は日暮の夕あかり
狐の嫁入すたこらさ

雀の夢（推薦）

大阪　名方和郎

おぼろ

お月さん
籔の上

雀は
お宿で
夢みてる

さらさら
春風
籔の中

月夜に
雀は
夢みてる

猿小父さん

田中宇一郎
岩岡とも枝畫

一

猿小父さんは猿のやうな顏つきでもなければ、動作も猿のやうにすばしこいわけでもありませんでした。却つて、大きな身體で、のそりのそりと歩くところは、どう見ても、象か豚を思ひ出させました。

では、なぜ、猿小父さんと呼ばれたかと云ふと、猿まはしをして暮してゐたからです。猿小父さんのお父さんも、やはり、猿まはしだつたが、猿小父さんの方がお父さんよりも猿をかあいがり、猿まはしも上手と云ふので、町や村の子供達に、たいへんな人氣を得ました。

二

ドンドコドン、ドコドコドンと猿小父さんの小さな太鼓の音を聞きつけると、子供達は四方八方から蛛蜘の子のやうに集まつて來て

『猿小父さん、まはしてよう、まはしてよう。』と、せがむのでした。

そのうち、誰かが、お金をチャラリと猿の前になげてやると、猿小父さんは、節面白く唄つて、上手に手綱をあやつり自由自在に猿を踊らせました。子供達は猿のやうに、キャツキャツと聲を立てて笑ひこけるのでした。

やつと、猿の踊りも終へたと思ふと、また、『もう一つまはしてやう。まはしてやう。』と、せがんできかない子供もありました。

猿小父さんとても、子供が好きでないわけではありません。いやどうして、子供がたまらなくかあいかつたのです。で『よし來た、まはしてやるよ』と云ふなり、お金をなげられなくとも、また、節面白く猿をまはして、時間のたつのも忘れ、自分も子供といつしよに遊んでゐるやうな氣持になりました。

『また、猿小父の馬鹿奴が子供相手に有頂天になつてらあ』

と、通りがかりの人が嘲り笑つても平氣でした。

そんなことは耳にもはいらないのです。

こんな、つまらない猿まはしなどしないで、何かもつとていさいのいゝ仕事で暮して行けないものかと人々は話し合ひましたが、やはり、あの猿小父は馬鹿だからしかたがないと、殆んど、相手にしない有樣でした。

猿小父さんの家は、淋しい田圃の中に建つてゐました。しかし、これが人の住む家であらうかと驚く

ほど粗末で小さなものでした。屋根は萱ぶき、柱は丸太、疊は呉座、其處に圍爐裏が一つチョンボリと切つてあります。どう見ても、何かの物置小屋としか思はれない。猿小父さんはこの家を何もかも自分獨りでたてたのでした。親もなく子供もなく、ただ猿と二人きりの暮しだから、家が狹くても間に合ひました。どちらへ向ひても、村までは半里ばかりもあつたが、猿小父さんは淋しいとも思ひません。それも、その筈、家の中では猿が一番の樂しい遊び友達でしたから。

三

家の前には、高い土堤の大きな川が流れ、後にはこんもり繁つた林がありました。春にはその川の土堤や、林の中に美しい草花が咲きました。夏は廣い野原から、涼しい風が吹いて來ました。秋は紅葉で赤くなつた山が、手にとるやうに眺められました。

猿小父さんは貧しいけれども、そんな美しい景色を見て暮されるだけでも、金持の別莊と變りはありませんでした。

ある日のこと、猿小父さんは、いつものやうに猿まはしに出かけたが、町へはいると、

『おいおい、猿小父さん、どうだい、そんな猿まはしなんかしないで、俺の處へかせぎに來ないかな』と云ふ人がありました。

『うん、あんたの家なら行つてもいい』と、猿小父さんは二つ返事で、すぐ翌日から働きにまゐりました。

その家は、お米屋さんでしたから、朝から晩まで、猿小父さんはギートンギートンと米搗杵で米を搗きました。唄もうたはなければ、休みもせず、ただ、默つて搗いて行くばかりでした。そして、力があるから、早く搗けました。御飯も二人前ぐらひは平氣で食べたが、仕事が、はかどるので、お米屋さんは

たいへん喜びました。

でも、これは、三日と續きませんでした。また、猿まはしにまはり歩いて、子供を樂しく笑はせたくてたまりません。米搗の方がお金はどつさりもらへるが、やはり猿まはしの面白さにかなはないと見えました。

『猿小父は、やつぱり、馬鹿だな。あんなにお金をくれても逃げて行くんだからなあ』と、お米屋さんは云つて笑ひました。

猿小父さんは、そんなことに頓着なく、また、猿といつしよに町や村をまはり歩きました。

『猿小父さん、このごろ、ちつとも、來なかつたのね。どうしたの。僕、ずいぶんと待つてゐたよ』なぞと子供はさはぎながら、猿小父さんのまはりに集まつて來るのでした。それに猿小父さんは何にも答へずに、ただ、ニコニコ笑ひながら、猿まはしの唄を節面白く唄ひ出します。

さて、ある日の正午すぎから、空が急に曇つて來ました。猿小父さんは、その日は出かけずに、ちやうど家の中に居りました。ひよいと、家の窓から遠くの山の方を見ると、まつ黑い雲がムクムクと海坊主のやうに物凄く現はれてゐます。

『おや、大雨が降つて來るぞ』と、猿小父さんは獨り言を言ひながら、暫く空を眺めてゐました。そのうちに、黑雲がだんだん空一面にひろがつて、やがて、雨がボツリボツリ落ちて來ました。夕方になると、盆をひつくりかへすやうな、土砂ぶりになりました。

猿小父さんの家は、小さいから、まるで、この大雨にさらはれてしまうやうに思はれました。時々、ピカリと光つたかと思ふと、ゴロゴロドーンと雷が鳴り狂ひました。

『おや、こいつは、たいへんな天氣になつたもんだな』と、さすがの猿小父さんも家の中にちぢこまつてゐました。猿も恐いと見へて、眼をキョロつかせキャンキャン啼きよつました。

猿小父さんの家の前を流れてゐる川も、水がぐんぐんふへて來ました。川上からいろいろの物も濁つた流れに押し流されてまゐりました。一時は一時よりも水かさが增して行きます。そして、夜が遲くなるにつれて、高い土堤にもだんだん水がはいのぼつて來ました。

『ゴーゴーゴー』と、こんな音も時々猿小父さんの耳に聞へました。それは、瀧のやうに流れ下る川水が土堤にぶつかる音でした。

『どうも、めつたにない大雨だから、これでは、川水もたいへんだな』と、猿小父さんは思つたので、少し小降りになつたのを幸に、古ぼけた提灯をさげて、ノツリノツリと川の土堤へあがつて行きました。なる程、見るからに凄いほど川水が增して、やがて土堤から溢れ出ようとしてゐるではありませんか。

『おやおや、これはたいへんなことにならなければいいが』と思ひながら、土堤の上を少し歩いて見ました。と、驚いたことには、土堤に大きな穴があいてゐるではないか。そしてそのあたりに大きなヒビも出來てゐました。猿小父さんはハツと胸を突かれたやうな氣持がしました。

『このままにして置けば、この土堤は切れてしまふかもしれぬ。田は一面の泥海となる。村も流されてしまふかもしれぬ。あの村のかわいゝ子供の生命もあぶない』と、とつさの間に考へつきました。しかし、今、自分獨りでどうすることも出來ない。村へ飛んで行つて救けを求めやうか。かう思つてゐるうちに、だんだん土堤のヒビが大きくなつて、その間から川水が下の田の方へチヨロチヨロ流れ込むではありませんか。猿小父さんは、もう一刻もまごまごしてゐる時ではないと思ひましたが、なにしろどつちの村にも半里もあるから、どんなに走つて行つても間に合はない。

猿小父さんは途方に暮れたが、やがて、
『あッ、さうだ』と、獨り言を云ふと、いつさんに自分の家へ走つて行きました。と、十分とたたないうちに、猿小父さんの小さな家から赤い火が燃へあがりました。そして、それが、だんだん、ひろがつて暗い空をまつかに染めました。
これを見た村人達は『そらッ、火事だ、火事だ』と叫びながら、雨の中をどんどん猿小父さんの家の方へかけつけて來ました。忽ち、大勢の人がドッと集まつたわけです。もう、その時分には猿小父さんの家はすつかり燒け落ちてしまひました。
『俺は、間に合はないから家に火をつけて、あんた達を呼び集めたんだ。火事なんかどうでもいい。土堤があぶないのだ。水で切れるんだ切れるんだ。さあ、早くみんなで喰ひとめよう』と、猿小父さんは叫びました。と、百人程の人達が手に持つたいろいろの道具で、切れさうになつた土堤へ土をもり上げたり、石を積み上げたりして應急手當を施しました。そのうち、また村へ飛んで行つて、水どめに必要なものをどつさり持つて來た者もありました。
かうして、大洪水もまぬかれ、田や畑の稻や野菜も安全に、村も押し流されずにすみました。
『いや、まつたく、猿小父さんのおかげだ。猿小父さんが自分の家を燒かなければ、俺等の生命もあぶなかつたのだ。もう少し遲かつたら、土堤は切れてしまつたのに』
と、人々は誰でも猿小父さんに感謝しない者とてはなかつたのです。そして、それからと云ふもの、猿小父さんを馬鹿なぞと呼ぶ者が一人だつてないどころか、まるで生き神樣のやうに尊びました。
やがて、村の人達は立派な家を猿小父さんに造つてくれました。しかし、やはり、猿小父さんは、毎日猿を伴れて村から町へと歩きまはりました。子供は嬉しがつてゾロゾロと集まつて來るのでした。（終）

武惡の幽靈

西川喜平
水島爾保布畫

これは足利時代のお話です。年久しく續いた南北朝の爭もおさまり、世も泰平になりました頃、田舍の武士が戰の手柄により又は親や先祖の殘した功によつて大名に取り立てられた者が少くはありませんでしたそれなら世間では俄大名と云つて嘲りました。この話にある大名もこの仲間で、親譲りの俄大名の主人とその家來の心もちを書いたものです。
都に住む、ある大名に二人の家來がありました。
年上の一人は名を太郎と云ひ、年下の者は次郎と云ひました。
太郎は弓矢は元より、太刀、薙刀の術にも長けてゐますので、主人の大名は、己れの片腕ともなる者と、何につけても太郎〳〵と云つて、重く用ゐました。
次郎は武藝の出來るばかりでなく、力の強いことは十人力と呼ばれて、何所の角力にもおくれを取つたことはありませんでした。
それで次郎は、力の強いのを自慢して、自分から「武惡」と云ふ名を名のり、都の中に、我が手に立つ者はあるまいと、威張つて歩行き廻りました。
次郎が武惡と云ふ名をつけたのは、昔は強い者に、よく惡と云ふ名をつけたからでした。
源義朝の子の義平は、惡源太

と云ひ、平家の侍景清は、惡七兵衛などと呼ぶ例でありました。

そこで太郎の智慧があつて、主人の氣に入るやうにと仕へるのに引かへ、次郎はわる賢い横着者で中々主人の云ふ言葉を聞きませんばかりでなく、時々主人に言葉を返し、意に逆らふ事が度々ありますので、主人も腹の立つまゝに、太郎を呼んで、次郎を斬つてしまへと云ひつけました。

太郎は主人の云ひつけとはいへ永年朋輩として、一所にゐる次郎を、斬ることは出來ませんので、いろ〳〵主人を諫めましたが、どうしても聞き入れず、はては次郎を斬つて捨てれば、褒美として、秘藏の太刀を遣るぞと云はれました。

太郎は日頃から望んでゐる、太刀が貰ひたいので、どうか次郎も斬らず、太刀も貰へるいゝ工風はないかと、いろ〳〵考へましたがいゝ思案も出ないので、とう〳〵次郎にこの事を打ち明けて話ました。

次郎は始めて、自分の命の危いことを聞いてビックリしましたが

『太郎よく云つてくれた、一生恩にきるぞ。お身の利德になること、己は打たれたことにして影をかくさうよ。』と云ひました。

太郎は喜んで、

『有がたい〳〵、それで御前の首尾もよく、己の望みもかなふと云ふものだ。』

次郎は太郎の喜ぶのを見て、

『ア、お身はよいが、己は御褒美も貰へずつまらぬことだ。』

『斬られて死ぬ者に御褒美が出るか、イヤマテ〳〵、餘り氣の毒だ己が褒美をやるぞ。』

『ナニお身が褒美を出すとは、マサカいただいた太刀をよこすのでもなからう。』

『馬鹿を云ふな、己がいゝことを考へた、よく聞け、殿には日頃短氣の御氣質だが、また氣の弱い、情深い方であらう。』

『そうだ〳〵。』

『それにまた孝心の深い方だ。』

『そうだ〳〵。』

『それについて考へた、次郎耳をかせ。』と、太郎は次郎の耳に口を

寄せ、何かクド、クド囁きました。

『ム、、、、。』と次郎は聽く中にだん〳〵ニコ〳〵した顏になりました。

『サスがは太郎だ、かたじけない、この狂言は首尾よくやつて見せやう。』

『充分に支度をして、覺られぬやうに、よいか、サラバだ。』と、太郎と次郎は、右と左に別れました。

太郎は邸へ歸り、主人の前へ出て、

『仰の通り、首尾よく武惡奴を打ちはたしました。』と云ひました。

主人は武術に長けた太郎とは云ひながら、手強い次郎を打ちはたせるか、と案じてゐた所なので、

スッカリ喜びました。
『オ、大儀〳〵、よく仕終せた、約束の通り褒美を取らせるぞ。』と秘藏の太刀を、太郎に與へました。
『コリヤ太郎、次郎は中々手强い奴、サゾ骨の折れた事であらう。』と訊ねますと、太郎は聲を沈ませて、
『イヤ易々と打ちはたしました。』
主人は、太郎の案外な答に、
『ナンと云ふ、やす〳〵と打つたとは、謀で騙して打ち取つたか。』
『イエ〳〵殿の仰を懇に云ひ含め覺悟をさせて打ちました。』
『ナニ予の言葉の通りを申聞けたと。』
『イカニモ、その時の有さまを申上げます。今日次郎を人無き所へ誘き出し、隙を見て後から斬りかけますと、サスがは次郎、太刀風に身をかはし、コレ太郎何んとする、何んの怨みか、氣が狂つたかと申ました。イヤ狂氣はせぬ、主命だ覺悟をせいとまた斬りかけますと飛び退いて、主命とはその譯聞かう、その上で尋常に打たれやうと申ます故、それよりこれまでの彼奴の行ひ、殿の御不興をかうむりました事々を申ました。』
『ナルホド〳〵、シテ彼奴は何んとした。』
『ヂット聽き入つて居りましたが次郎の眼から涙がボロ〳〵とこぼれました。』
『フム——。』
『殿の御心に背いた罪、是非もない事、サア尋常に打たれやう、サア早く斬れ〳〵と申ました。あまりの健氣さに私も哀を催しまして最期に云ひ殘すことはないか、と訊ねますと、頭を振りまして、親も兄弟もない身、心にかゝることもないが、殿に一と目お目にかゝらぬが殘り惜しい、殿の御壽命未永く、お家の榮を祈ると申て、尋常に打たれました。』と語つて太郎は額の汗を拭きました。
『オゝ左樣のことを申たか、ア、不憫の奴、それほどまでに予のことを思ふてをつたか、今となつて悔ても返らぬ事じやが、予の短慮によつて可哀想な事をいたした。』
と主人は聲を上げて泣き出しました。

太郎はわざと鼻をすゝりながら
『その有がたいお言葉、次郎もさだめて草葉の蔭で喜んで居りませう。お歎きはお道理ながら、この上は僧に經を讀ませ、回向さしておやりなされませ。』
主人は涙を拂つて、
『オ、そうじや、これより寺へ參り懇に弔ふてやらう。』と太郎をつれて寺へ行き、手厚く弔ひました。
やがて寺を出て歸り路につきましたのは、もう日も暮れ方になり淺くの森は夕靄の立てこめて、塒に歸る鳥の聲も、淋しく聞えました。
スルト太郎は何を見たか、
『アッ』ト聲を上げて立ち止りました。
主人は驚いて、
主『太郎、何事じや。』
太郎は慄へ聲で、
太『殿、私の心の迷ひか、今チラと次郎の姿が幻のやうに見えました。』
主『ナニ次郎が出たと、サテは予を怨んで迷ふてをるのか。』と云ふ時、次郎の悲し氣な聲が聞えました。
『殿をお怨みはいたしませぬ、チト申上げたいことがあつて參りました。』
聲のする方を見ると、五六間向ふのうす暗い木の下蔭に、髪を振り亂した次郎の姿が見えました。
主『太郎〳〵、次郎が出て參つたぞ、南無阿彌陀佛〳〵。』
太郎は、ツカ〳〵と次郎の前へ進み、
太『次郎申上げたいとは何事だ、取り次いでやるぞ。』
次『冥途から大殿のお使に參りました。』
主人はビックリして、
主『ナニ大殿のお使とは。』
次『冥途へ參り、はからず大殿にお目にかゝりました。』
主『オ、父上にお出逢ひいたしたか、父上にはおかはりもないかどうじや。』
次『大殿には御機嫌よろしうおいでになります。』
主『御無事と聞いて安心いたしたおなつかしい事じや。』
次『大殿の仰を承りましてお使

に參りました。』

主『父上は何んと仰られたぞ。』

次『もう春になり、お召物も垢つき見苦しくなつた、着替がほしいとの仰。』

主『オ、おいたはしい、お着替のないはお道理じや、途中の事とて心にまかせぬ、着古しなれどこれを上げてくれ。』と主人は上着を脱ぎますのを、太郎は受け取つて次郎の肩へかけてやりました。

次『まだ大殿の仰がございます。』

太『大殿の仰ださうにございます。』と一々太郎は取り次ぎます。

主『オ、何んなりと申せ〳〵。』

次『大殿には、苧からの杖一本では物足りぬ、お腰の物がほしいとの仰。』

主『ア、おいたはしい、この世では何不自由もないお身が、お腰の物もないとは情ない、サア〳〵これを上げてくれい。』と腰の刀を出すと、太郎は受け取つて次郎に渡しました。

太『サア〳〵これを持つて、早く冥途の大殿へお上げ申せ。』

次『大殿にはまだ〳〵いろ〳〵。』と次郎が云ひ出すので、太郎はたまらず、

太『コレ〳〵もういゝ〳〵、早く歸れ〳〵。』と云ひますと、主人は太郎を制して、

主『太郎、父上の仰がまだあると云ふに、退け〳〵。』と云つて出てくるので、太郎は主人の前に立ち塞り、次郎に向ひ、

太『次郎の亡者奴ッ、早く歸らぬか。』

叱りつけると、主人は太郎を押し退け、

主『次郎遠慮なく云へ。』

太『コレいゝかげんにせぬか。』

次『いゝかげんには出來ぬ、大殿にはおさびしい。殿をおつれ申せお供をして參れとの仰。』

と云つて、フラ〳〵と歩行き出しました。

主人は『アッ』と驚いて、

主『コレ〳〵予はまだ冥途へ參るのは早いぞ、父上に宜敷申上げてくれい。』

次『イヤ〳〵おつれ申ます。』

太『申さぬ事ではございませぬ、ソレ〳〵次郎が參ります。』

次『どうでもお供をいたしませう。』

主『ア、免せ〳〵、太郎助けてくれ〳〵。』

と、主人はドン〳〵逃げ出しました。

太郎も後から、

太『ソレ〳〵次郎が追つて參ります。』

と、云ひながら、駆け出しますと、主從二人の後姿を見送つてゐた次郎はやがて、

『アハ、、、、、』

と高笑ひの聲を殘して、宵闇の中に消えるやうに見えなくなりました。

（をはり）

童謠

野口雨情選

（大人篇）

うそどり

近藤恭太郎（秋田）

うそどりや
群がつて　とんで來た
とんできた
雪が　日に日に
うすくなつた

うそどりや
だん〳〵
來なくなつた

明のお星さん

林　宵雨（東京）

明のお星　どこへゆく
歸るにや　まだ〳〵
夜が明けぬ
草かりお馬は　もやの中
明のお星　どこへゆく
明のお星さんは馬にのり
ねながらお山の家へゆく

ウグヒス

高橋德三郎（茨城）

ホーホー

ウグヒス
梅の木に
とまりや
梅の蕾も
ちらほら
さいた
ホーホー
ウグヒス
初音をないたりや
すぐに
來るだろ
花ざかり

あしの芽

南　柑子（千葉）

河邊のあしの芽
かわいゝな

赤くちいちやく
かわいゝな
目高が三匹
話してる
『おとひめ樣の
おさがしに
なつてるルビーは
あれでせう』
赤くちいちやく
光つてる
あしの芽　あしの芽
かわいゝな。

お月さま

松本　秀穂（東京）

十五夜お月さんは
なぜまるい

おだんご食べたから
まるいのよ
三日月お月さんは
なぜ細い
芒に切られて
細いのよ
雨降りお月さんは
なぜ出ない
雨が降るから
出ないのよ

からかさ

櫻井　珊樹（東京）

蛇の目傘
傘さした
さした傘
破れ傘だ

やれやれ
お使ひつらいもの
傘のかげから
尻尾が見える
ざんざ横ぶり
びしよ濡れる
狸の酒買ほゝかむり

鯉のぼり

本多　鐵鷹（東京）

青い大空
鯉のぼり
早いな、早いな
ちぎれ雲
ふつと、ふくれろ
鯉のぼり
カラカラ矢車

よく廻れ
菖蒲の笛は
よくなるぞ
きいてろ、きいてろ

鯉のぼり

雲雀と麥

笠原　信雄（東京）

お空高々
雲間に消えた
雲雀よ——
麥は青々
まだ穂は細い
細いよ——
雲雀の唄聲
雲から洩れりや
雲雀よ——
麥は聞ことて
つんつん伸びる
伸るよう——

川邊の牛

名和　暢一（福岡）

雨が降つても
川邊の牛は
しつぽもふらずに
立つてゐる。
ぽとぽといふ音
川邊の牛は
しつぽもふらずに
聞いてゐる。

だん畑

伊藤　益平（岐阜）

チロリ
お花が
咲きました

おせどの
おせどの
だん畑
ほうづき
チロリコ
咲きました
だんだん
ばたけ
だん畑

麥畑

萩原　紫泉（東京）

麥の葉五寸
麥畑
見渡す限り
青綠
風そよ吹けば
波立つて
積んだ葉束
舟のやう
麥の葉五寸
麥畑
鳴らす麥笛
誰かいな
麥さくそつと
覗き見りや
雲雀がひとり
啼いてゐた。

鳩

且原　浩爾（山口）

鳩が啼きます
ホロホロとな
二羽の子鳩は
生れたばかり
着物縫ふのが
間に合は無いか
今日も裸身で
寒さうな
鳩が啼きます
ホロホロとな

ごぶの鼠

吉垣　克巳（熊本）

どぶの鼠は
ちよろちよろ走つた
子供の鼠も
あとから走つた
どぶの鼠は
ちよろちよろかくれた

警察へ行つた

ピー（推薦）

大島知惠子

岩岡とも枝畫

良太郎は、それは犬の好きな子供でした。朝起きるとすぐお緣側へ出て『ピーよ。ピーよ』と、云ひます。ピーとは良太郎がお菓子よりも繪本よりも好きな犬なのです。

今日も、ネルの腰卷のまゝ、緣側へ出て呼んで見ました。ところが遊びに行つたのか、一度呼んだ時は出て來ませんでした。もう一度良太郎は『ピーよつ』と呼んで見ました。今度こそはあの山茶花のしげみから、茶色の體をのつそり出して、あのきたない鼻面を足へ擦付けるのだらうと手を出して待つてゐましたが、一向出て來る樣子もありません。

『お母さん、ピーは何處へ行つたの』

と、少し鼻聲を出して聞いて見ましたが、お母さんは裁縫箱から糸を出し乍ら、

『さあ、又何時もの芥溜でせう』

と、笑つて仰有いました。

本當にピーは芥溜をよくあさる犬でした。良太郎もさうだらうと思つて、朝飯を食べて何時もの樣に繪本を見たり、積木をして見たりして居ました。そのうちにピーの事は忘れてしまつてました。お晝過、良太郎は又ピーの事を思ひ出しました。そして急いで今朝の樣に呼んで見ましたが、ピーはその時も何處へ行つたのか出て來ませんでした。

ふと良太郎は、犬捕りの事を思ひ出しました。この邊によく犬捕りがうろついてゐます。この間は、一丁ばかり離れた谷さんとこのエスがとられました。

『若しや』

さう愚ふと良太郎はぢつとして居られませんでした。今迄にこんな事は無いからです。お母様は、

『もうぢき歸るでせうよ』

とおつしやいました。でも良太郎は心配でならないので、咽喉が詰る程ビーの名を呼び續けて見ました。庭のしげみはがさとも云ひません。横の枝折戸も開いたまゝで、薄い扉がゆら〳〵と搖れてます。呼び疲れた良太郎は、お母様の側へ行くと、ごろんと仰向けにころがつて、

『お母さん、ビーは。れ、ビーは何處へ行つたのよう』

と云つてゐましたが、何時の間にか眠つてしまひました。

夢で良太郎は、大きな山を見ました。山の上にビーがあの大きな體をのつそりとさせてゐてべつてます。良太郎がれえやに背はれて上つて行きます。幾らビーよと呼んでもビーはじつと彼方の白い雲を眺めてゐました。その雲の形は、昨日ビーがお庭で追ひかけてた蝶々の影にそつくりでした。れえやの下駄が脱げて、伸々上へ上れません。『早くよう。早く行かうつてば』とせいて居る所で目が覺めました。

室にはもう電燈がついてました。おめざのお蜜柑を食べ終つた時、

『さあ御飯にしませう』

と、お母様が白い前掛をはづしながら仰有いました。

『いやん』

良太郎は少しも御飯か食べたく無かつたのです。

『何故さ、今夜はお美味いお肉なのよ』

『だつて、いや、僕食べるのいや』

『どうして?』

『いやだもん』

『ビーが居ないからでございますか』

と、れえやがお皿を運びながら云ひました。良太郎は急に悲しくなつて來て、ワアツと聲をあげて泣き出しました。

『まあ一體どうしたの。ビーは、あした警察へ見に行きませうれ』

とお母さんに抱きあげられると、良太郎は尚悲しくなりました。

『さあ〳〵御飯でございますよ。こんなお美味いお洋食が――、もうおだまりなさいませ。來年からお學校ぢやございませんか』

と、れえやがびつくりした樣に側へ來ても

『ビーが居ない。いやだい、いやだい』

と、良太郎は泣き續けました。

『お利口だかられ。本當に犬捕りはいけないのれ。明日は早くから行きませう』

とお母さんにあやされて居るうち、良太郎は赤ちやんの樣な氣持がして來て嬉しい樣な悲しい樣な氣持でお母さんの胸にもたれて居ると、何時の間にか又眠つてしまひました。

翌朝ふと目を覺した良太郎は、先づ第一にビーの事を思ひ出しました。そして、寢床から大きな聲で、

『お母さん　ビーは歸つた?』

と云つて見ました。すると次の間から、

『おや起きたの。あなた昨夜を覺えてるの。お母さんはあなたがむづかるもんだから、寢られやしなかつたのよ』

と云ふ聲がして、お母様が間の襖をお開けになりました。

『ビーは?』

『まだだけど、今日警察へ行つて見ませう』

『警察に居る?』

『さあ、居ればいゝが。まあ、行つて見ませうれ、早くお起きなさい』

御飯を食べて、良太郎はれえやと一緒に警察へ行つて見ました。白い石の門を入つて重い扉をギーツと押すと、丁度銀行の樣に一つの窓口へ巡査が一人づつ坐つてます。ふだん交番に立つてる巡りさんばかりを見馴れた良太郎は、少しびつくりしました。

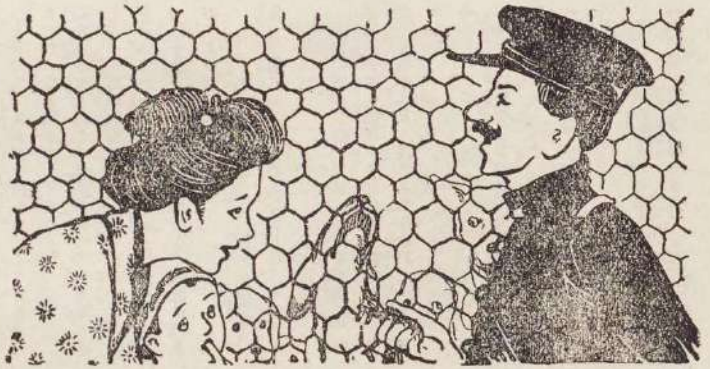
『受付はこちらですれ』

と、れえやが一つの窓口へ行つて聞くと、

『はあ、何の御用です』

と、北處の巡査が云ひました。

『あの、犬が居なくなつたのですが、居りませうか』



と、云ふと、

『それでは御生係の方へ行つて下さい』

と、巡査は向ふの方を指しました。

れえやは今度は一番向ふのはしへ行つて

『あの、犬が居なくなりましたのですが』

と同じ事を繰返しました。ちよつぴり髭の生えた其處の巡査は、

『何時?』

と、聞きました。

『昨日』

と、良太郎は小さな聲で云ひました。

『何? 昨日? そいぢや、こゝの樣をすつと行くと犬小屋がある。そこに居るか見て御覽』

『こちらでございますか』

とれえやが後ろを指すと、

『あゝ』

と答へて、巡査は又元の姿勢に戻つて何か書き始めました。初め來た受付の横を曲り乍ら、

『警察はこはうございますれ』

と、小さな聲でれえやが云ひました。

『うん』

と良太郎も答へて、

『こつちなの』

と、足早に歩き出しました。良太郎は若しビーがその犬小屋に居なかつたらどうしやうかと思ふと、早く行き度い樣な、恐ろしい樣な氣がして、れえやの顏を見返しました。

『何處でせうね』

とれえやはそこいらを見廻して、折から戸口に立つて居た一人の巡査に、

『犬はどこでございますか』

と、聞きました。

『犬？動物園ぢや無いからそんなものは居らん』

『いえ、犬捕りにとられたんです』

『さうか、そんなら判る。此處を眞直ぐ行つて、突當りを右向け右して、又突當り向け左してどんと突當つた處ぢや』

れえやは、

『はい』

と云つて、良太郎の顏を見てゝゝと笑ひました。良太郎も少し可笑しくなつて、うふふと笑ひ乍られえやの袂を持つて歩き出しました。先刻の巡査が云つた通りに歩いて行くと、何だか急に臭くなつて來ました。

『おゝ臭……あゝ居りましたよ、此處に。まあビーや』

と、一足先きに歩いて居たれえやの聲で、良太郎は胴がどきつとしました。そして

『何處に』

と袖の下から覗いて見ると、丁度動物園の穴熊の檻の樣な小さな處に、澤山の犬が居て、その中にビーはこちらを向いて坐つて居ました。

『ビーよ。ビーよ』

良太郎は夢中でかけて行つて、手を出さうとすると、

『あれ、危うございますよ。他の犬が噛んだらどうなさいます』

と、れえやが抱き止めました。

『れ、早く連れて歸らうよ』

良太郎は何時もする樣に鼻聲を出しました。

『はい』

そして、二人は元の衞生係の窓口へ來て

『居りました』

と、れえやが云ひました。

『居たかれ。どれ』

と巡査は机を立つてさつきの檻の所に來て

『どれだれ犬は』

と、云ひました。

『あの紫色の、それ今こちらを向いた犬です』

と、れえやが云ふと巡査は、

『一人で出せるかれ』

とポケットから小さな鍵を出して戸へさすと、ガチャリと音がして、牢屋の樣な鐵の戸がギーッと廻りかけた格子から離れました。れえやはその間から手を入れて、ビーの首玉を攫むと、ぐつと引きました。

『大力だれ』

巡査は笑ひ乍ら覗き込みました。

『ビーよ、早く出でお出で』

良太郎が手を叩き乍ら呼ぶと、ビーはのつそり大きな體を出して來ました。

『お坊ちやま、ビーはきたなうございますよ。おいぢりになつちやいけません』

と、れえやが云ふので、良太郎は思はず後すざりをしました。れえやは手早く鎖で繋ぐと、

『これで連れて歸つても宜しうございますか』

と、巡査の方を向いて聞きました。

『これから繋がずに置くと又捕るよ。さう、飯代を十四錢納めて』

『あゝ御飯』

『うん、そこに――』

と巡査が手を出した所には、きたない鎖がぶら下げてあつて、中に御飯の樣なものが入つてました。窓さうな、臭い鐵の板の上に坐つた他の犬達は、御飯を食べ樣ともせず、ぢつとこちらをながめてゐました。良太郎は急にそれ等が可哀さうになつて來て、ビーだけをつれて歸るのが惡い樣な氣がして、

『ほかの犬は』

と、れえやの顏を見ました。

『そんなに連れて歸つては大變でございますよ。又今にこんなのもお迎へが參りませうれまあビーはこんなによごれてますよ。さあ、お先きにお歩きなさいませ』

と云つて、れえやは歩き始めました。

『早くお迎へが來ればいゝのに』

と良太郎は、先刻來た時い石壁の上を、とつとゝ歩き出しました。警察を出て廣い國道を先きに立つて歩き乍ら、良太郎はビーの方をふり向いて

『ビーもゆうべ夢を見た？』

と、そのよごれた首の邊を見ました。

『えゝ見たでせう。さあ早くお歩きにならないと、きたないものが着きますよ』

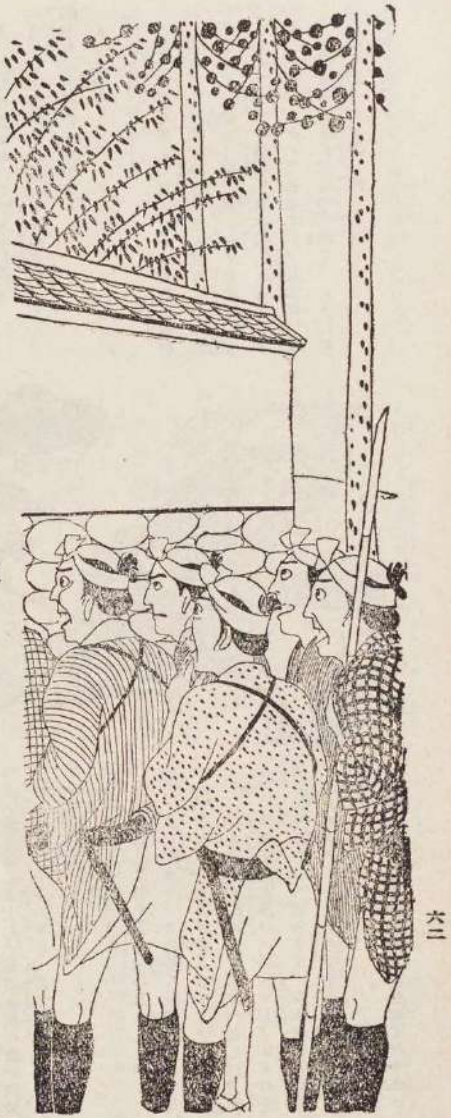
と、ビーの變りにれえやが答へました。軟らかい春風が良太郎のエプロンと、ビーの房房した毛を吹いて行きます。良太郎はなめらかなアスファルトの上を手をあげ乍ら、走り出しました。

（なはり）

（作者住所　兵庫縣西の宮市松原町三十九）

ぶつこはし除け

大木雄三
水島爾保布畫



前がき

『いい人間になるだよ。ひと様に迷惑をかけるやうなことはするぢやないよ、決してな。』

七郎右衛門は口癖のやうにかう言ひました。それから、飴玉だの金米糖だのを呉れて、私の頭を撫でるのでした。その頃、まだ小さかつた私の掌は、たしか金米糖を十と摑むことができなかつたやうに覺えてゐます。いちど、こんなことがありました。

七郎右衛門が寢てゐました。もう八十幾つでしたから、老衰病といふやうなもので、これといふ病氣ではなかつたのでせう。

晝の御飯、といつても粥です。私がそれを七郎右衛門の寢てゐる離れへ運んで行つたのでした。

『お爺さん。』

と、私は椽側から聲をかけました。

『おい。』

『お粥！』

言ひながら、枕許へ置かうとした時、膳がすべり茶椀や箸が、がちやがちやと落ちました。それだけならまだよかつたのですが、粥を入れた土鍋が引くり返つて、七郎右衛門の頭から顏をべたべたにしてしまつたのです。

私はよく覺えてゐます、七郎右衛門の頭は、すべすべの禿頭でした。確にそれに違ひありません。

人はちよつとしたことから、いろいろなことを思ひ出すものです。七郎右衛門の禿頭を考へると、それからそれへと私は思ひ出すことが蜘蛛の糸のやうに盡きないのです。

『いい人間になるんだよ。』

と、それから七郎右衛門が話してくれた話を書いてみませう。その前に斷つておきますが、七郎右衛門といふのは、かう書いてゐる私に血のつながつた祖父さんだといふことであります。何でも庄屋だつたともいはれてゐますし、十手捕縄を預つた役人だつたともきいてゐます。どちらがほんとかわかりませんが、十手といふものは、私の家にちやんとありました。きらきら光る鐵の棒で、柄のところに朱房が飾つてありました。

一

七郎右衛門には、心配でたまらないことがたつた一つだけありました。それは、弟の勘太が怠者で、その上惡い遊びが好きだつたからです。

『惡い遊び』について、詳しく書くのは私も嫌です し、みなさんの爲にもならないからよしますが、御存知ですか？　國定忠次といふ名前を。芝居や活動で見ると、大へん善いことばかりしてゐたやうですが、あの人たちのしてゐたことは、決して眞似てはならないしやうばいだつたのです。

それなのに、勘太はその仲間へ入つてしまつたのです。仕事をしないばかりか、家の金を持ち出しては、ばつばつと使ひます。

『困つたことだ。』

七郎右衛門が、かう呟いて眉をひそめた時、もつとひどい騒動が起つたのです。

國定忠次は役人に追はれて、五里ばかり離れた赤城山へ逃げ込んだのです。大勢の仲間も一緒だ、といふ噂が、七郎右衛門の耳へも入りました。

七郎右衛門は、明暮れ弟の身の上を案じてをりました。一緒に山へ行つて、食物にも不自由してゐるのかと思つて、可哀想でならなかつたのです。

七郎右衛門は、だんだん無口になつて行きました。考へることが胸いつぱいになると、口を開くのが面倒になるのでせうか。

ある夜更け。

とんとん……。

誰か門の扉を叩く者がありました。七郎右衛門は猫のやうにくわつと目を開いてみましたが、家中の者は晝の疲れでよく眠つてゐるらしく、誰も氣のついた者はないやうです。

七郎右衛門ははね起きました。左手に刀、いざといへばすぐに鞘を拂へるやうに。音を忍ばせて、わざと素足で門に近づきました。

そして小聲で咎めたのです。

『誰だ。』

『俺だ。』

『俺とは誰だ。』

『勘太だよ。』

思はず七郎右衛門はあたりを見廻したのでした。

『開けてくれ。』と、外では勘太の聲です。

七郎右衛門は、暫くぢつと考へてゐましたが、

『開けられない。お前を入れることは出來ないぞ。』
かうきつぱり言ひました。
『何故だ。そんなこと言はないで……』
『駄目だ。勘太、お前はどこへ行つてゐた。仲間の者と一緒に赤城へ行つたのなら、死ぬまで一緒にゐろ、お前のやうなやくざ者が、この家へ入れると思つて歸つて來たのか。』
ごくりと唾を呑んでからまたつゞけました。
『入るなら入つて見ろ。俺はこの家の名譽の爲に、お前を叩つ斬るまでだ。』
『わからぬ兄貴だなあ。』
チョッ、と勘太が舌打ちをしたやうでしたが、間もなく七郎右衞門が、そつと門の扉を細目にあけて見た時には、姿は消えてをりました。
闇をすかして眺めましたが、生憎の夜ですから、足跡すら見ることができなかつたといふことです。

二

勘太には、小さい時からの仲善しで重吉といふ人がありました。
『重吉さん、今晩だけ厄介にならせてくれ。』
生れた家へ入れられなかつた勘太は、重吉の家を訪ねて頼み込みました。
『いいとも。だがなあ……。』
『わかつてゐるよ。明日の朝になれば、星の光つてる内に出かける俺だ。お前に迷惑はかけねえよ。』
暖い布團の中へ、久しぶりで勘太は寢ることができました。
『勘太さん、惡いことは言はない。七郎右衞門さんに安心させる方がいいな。』
並んで寢た重吉は、遠慮しながら、こんな風に勘太を諫めるのでした。
『この間も會つたが、顏色も惡かつたぜ、みんなお

前を心配してゐるからだ。』
『さうだらう。俺も濟まねえと思つてゐるのだ。いつか兄貴に恩返しをするつもりぢやゐるが、こんなやくざ者になると、なかなか世間も相手にしてくれぬ。』
勘太は寂しげに言つたさうです。
翌朝、勘太は早く重吉の家を出て行きました。
『どこへ行くのだね。』と、訊くと、
『そんなことがわかるものか。爪先の向いた方へ。』
笑ひながら答へて、づつしりと重い長脇差を落し差しにして、後も見ずに、鎭守の森へ入つて行つたのでありました。

三

それから何年か後のことです。
私の生れた上野の國の隣國下野に、天狗黨と名乘る一味の人たちが集つて、幕府に反抗しました。
德川幕府の政治がよくないから改める、といふわけだつたさうですが、どちらに正しい理屈があつたのか、よほど調べてみなければわからないことでせう。
が、それはともかく、これを知つた幕府方では大軍を繰り出したのです。天狗黨はよく戰ひましたけれども、とても敵ふ道理はなく、たちまちのうちに敗かされてしまひました。
敗戰さの哀れさ。天狗黨の人々は、ちりぢりに、氣の合つた者だけで逃げ出したのでありました。けれども金はありません。行く先々には、幕府方の役人の目が光つてをります。これでは身の落ちつき所さへ見つかりません。
たうとう、この人たちは暴徒に變つてしまひました。はじめはそんな心は無かつたのが、きつと自棄になつた結果でせう。
逃げて行く道々に、すこし金のありさうな立派な

家と見ると、強盗のやうに押し込んで金を奪つたり酒を飲んだりして、人々を怖ろしがらせるのでした。

すると、平生からぶらぶら遊んでゐる無頼漢などまでが、その仲間に加はつて一緒になつて金持ちの家を荒し廻りました。

塀は叩きこはしました。家へは石を投げつけました。人たちは、これを「ぶつこはし」と呼んで、それはそれは怖れたものです。

七郎右衛門の村へも「ぶつこはし」が近づいてまゐりました。

『何ッ。あんなもの。』

口では言つても、僅か一人の七郎右衛門が、いくら朱房の十手を握つたところで仕方がありません。心の中では弱つたことになつたと思はないではゐられませんでした。

七郎右衛門の家には、ぐるりと塀がありました。

表門の觀音開きの大きい扉には、鐵で作りつけた女のお乳のやうな金具もついてをりました。おまけに町から町への街道です。「ぶつこはし」が、これを見逃すわけはありません。

七郎右衛門は、家中の者が脅えてゐるのを可哀想に思ひながら、何とかして、災難を遁れたいと考へました。大きな溜息をついては、屋敷にある蓮池をのんきに泳いでゐる鯉を眺めてをりました。

その時、いつかの晩、門の外へ來たきり行衛の知れなかつた弟の勘太が、ひよつこりと姿を現はしたのです。

『おう。』と、七郎右衛門は、すがりつきたいほど懐しかつたといふことです。

『心配だらうな。「ぶつこはし」は隣村まで來てゐるのだよ。』

勘太はこんなことを言ひました。

『でもこの家は大丈夫だ、俺がついてる、勘太がゐ

るんだ。指一本さゝせるものか。』

『ぢや、お前も仲間か。』

鋭く問ひつめても、勘太はたゞ笑つてゐたさうです。そして、七郎右衛門の耳へ何か囁くと、そのまま、また表へ飛出してしまつたのでした。

「ぶつこはし」の連中は、砂を蹴立てて突進して來ました。七郎右衛門が庭に立つて遠くを眺めると、煙の上つてゐるところさへあります。

『火をつけられたかな。』

思つてゐる耳へ、何とも言へない騒々しい音が飛び込んで来ました。

「ぶつこはし」は、七郎右衛門の家の門の前にも押し寄せたのです。が、石を投げる者もなければ、悪口さへ言ふ者がありません。

七郎右衛門は、安心して、ほつと胸を大きく開けました。

何故でせう？

門の扉には、大きく大きく墨黒々と次のやうに書いてあつたといふことです。

降参、降参

「ぶつこはし」はそのまゝどこかへ引上げて行きました。ですから、その邊の物持でひどい目に會はなかつたのはこの家だけだ、と、七郎右衛門はみんなに羨まれたといふことであります。勘太のしたことと誰が知りませう。

私が物のわかるやうになつたとき、もう門の扉には「降参　降参」とは書いてありませんでした。母にきいたところに依ると、その門はよそへ賣つてしまつたのだといふことでした。門ばかりかその時の家も賣つたのだといふ話で、殘つてゐたのは蓮池と朱房の十手や、それから籠や槍や刀や、いろいろ昔の捕物の道具類でしたけれど、それすらいまは何一つありません。家は燒けてしまひましたから。

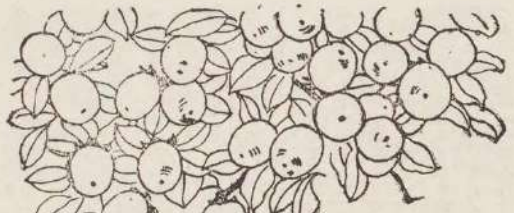
蓮池は埋めて桑畑にしてしまひました……が、何の草か葦のやうなものが、桑の間へにゆうと伸びることがいまでもあるさうです。

かうして、七郎右衛門が、私に殘してくれたものは、あの言葉だけです。

『いい人間になるだよ。ひと樣に迷惑かけるやうなことはするぢやないよ、決してな。』

も一つ、私にとつて、なつかしいあの禿頭の思ひ出です。

（をはり）



（少年少女自作童話）

お寺の百目柿（入選）

東京市下谷區谷中初音町四ノ一七六

中岡康男

或る村に、桶屋の倅で、兵太と言ふ子供がゐました。兵太は、それは〳〵手の付けやうの無い程惡戯な子供でした。

毎日〳〵村端れの鎭守の境内で子供達の戰ごつこが開かれます。

その時、兵太はきまつて一方の大將となつてをります。そして、きまつて又、兵太の馬の役を勸める一人の子供がゐました。

村の人々は、その子供の事を、『拔け松〳〵』と呼んでゐました。

拔け松には、お父さんもお母さんもありませんでした。まだ小さい時、お寺の門前に棄てられてゐたのを、和尙さんが拾ひあげて育てたのださうです。和尙さんは、この子供に『松三』と云ふ名前をつけました。ところが何時の間にかこの名前が『拔け松』と變つてしまつたのです。

臆病で居眞で、何かされても唯にや〳〵笑つてゐる松三にとつて

は、まつたく、よく似合つた名前でした。

松三の事を一番よく背めるのは桶屋の兵太でした。馬にまでさせて働きながら、動くのが遅いと言つては、頭を撲つたり足で横腹を蹴とばしたり、少し氣の優しい子供は見てゐられない程亂暴な事をしました。

けれど、ほかの子供達は、その亂暴を止めませんでした。止めればきつと背められるからでしだ。

いくら馬鹿でも口惜しいのでせう。そんな亂暴をされた時などは松三は眼に一杯涙をためて、じつと兵太を睨みつけるのでした。

暑い夏は去つて、秋は來ました。方々の柿の實は赤く色づきました。

御寺の百目柿もやはり赤く色つきました。それは和尚さんの御自慢の柿でした。

廣い庭の隅の高い崖の上に、其の柿の木がぬつと高く空に聳えてゐます。流石の惡戯小僧達も、此の柿の木ばかりはどうする事も出來ませんでした。それは、怒ろしい和尚さんの眼が絕えず光つてゐるからです。

松三は、よく其の柿の木の見張をさせられました。松三は、和尚さんの言葉には、それは〳〵素直に從がつてゐました。

桶屋の兵太は、年都年中その柿を狙つてゐます。

或る日の事、和尚さんは、檀家の法事に行く事になりました。そこで松三に向つて、『お前はよくあの柿の番をしなければなりません私は檀家の法事に行つて來るからよく番をしなさい』と言ひのこして、寺男を連れて夕方から出掛けました。

桶屋の兵太にとつては、願つたり叶つたりの好機會でした。兵太はさつそく御寺の庭へ忍び込んで來ました。そして松三を脅かして彼に柿を取らせようとしました。

併し松三は『いやだ』と云ひました。松三は、和尚さんの言葉をよく守る善良な子供でした。

兵太は腹を立てゝ、いきなり松三を突き飛ばして、自分で木の上に上つて行きました。

松三はどうする事も出來ませんでした。松三は、兵太のする事に口の出せない事をよく知つてゐました。

柿の木の南側には、とりわけ美味しさうなのが、枝をたわめてなつてゐました。兵太はそれに攀ぢ上りました。其の枝は、ぐつと崖の上に出てゐます。

數丈も下には、長い國道が通つてゐます。

けれども、兵太は大膽な奴でした。二つ……三つ……四つ……柿は次第にもがれてゆきました。松三はぢつとそれを眺めてゐました。

松三は、和尚さんに何だか惡い事をしてゐる樣な氣がして來ました。

不思議に松三は、今自分に兵太を懲らす丈の力が出て來た樣な感じがしました。思はずも松三が兵太を呼び掛けようとした時、反對に木の上から鋭い聲が響いて來ました。

『抜け怒。お前も欲しいか……馬鹿……欲しけりや、さあ呉れてやるぞ。』

突然空を切つて、小枝についてゐた腐れ柿が、はつ止と松三の右の眼に投げ付けられました。傷つけられた眼からは、黑い血がたらたらと流れ出しました。

恰も目疊めた獅子の樣な勢で、松三は無茶苦茶にその柿の木に攀ぢ上つて行きました。

兵太は少しも知りませんでした。尙も美味しい柿を食べてゐた時、急に自分の跨つてゐる枝がぎゝゝゝときしんでゆくのを感じました。

『危い〳〵……馬鹿……降りろ……馬鹿。』兵太は片足で力一杯、氣違ひの樣な松三を蹴とばしました。

『あつ』……松三が思はず後へそり返つた時、二人の重みに堪えかねて、大枝はぽつきり折れました。

そして二人は物凄い勢で崖下へ落ちてゆきました。柿の葉が二つ三つ、闇い崖下の呻き聲につられる樣にひら〳〵と散りました。

それから數年後、松三の墓は和尚さんの情で、その柿の木の下にこじんまりと建てられました。その柿の實はそれ以來、誰一人として取る者はありませんでした。

『あの柿の木は松三奴にやつたのじや』と、和尚さん自身でさう云つてゐます。

今頃はあの山國の片田舎で、松三の法事が行はれてゐる事でせう。そして松三の墓のまわりには、大きな百目柿が相變らずぽたり〳〵としめやかな音を立てゝ落ちてゐる事でせう。

（たはり）

白帆の唄

小城庄一

寺内萬治郎畫

（前號までの梗概）行衛知れぬ父を尋ねて旅に出た春之介少年は、母を失ひ姉と別れ、自分は暴風の爲に海を漂流した所を仙人に助けられて、又旅に出ましたが、ふとした事から役人を助けた爲に、海賊に襲はれ、遂に役人と共に捕はれの身となりました。そして海賊船の中で別れた姉に巡り合ひ、寄んだのも束の間、海賊の爲に殺され様とする時、突然不思議な青舟が海賊を攻めに來たので、船の中は大騒動となりました。

一

朧ろの舟！　朧ろの舟！　何となく名前そのものからして妙なひびきを與へるではありませんか。

海賊船の中は、この奇妙な舟がやつて來たので一時に上を下への騒ぎが始まりました。

『おい錨をまけ。船を出せ。皆種ケ島の準備をしろチエッ、忌々しい惣兵衛奴、いやな所で乘りこんで來たもんだ。』

九郎衛門は刀をつかんでたけり立つてゐます。春之介は、はたと思ひ當る事がありました。

『朧ろの舟――そして惣兵衛――まてよ、朧ろ惣兵衛なら姫路の城下外れで、自分達を助けたあの泥棒だ。それがどうして此海賊と戰爭するんだらう。』

疑ひの眉をひそめてゐると、二人の縄を握つてゐる乾分が、

『親分、此奴等はどうしませう。』

『馬鹿ッ、そんな所の騒ぎか。其處いらに放り出して、早くお前も働かぬか。』

九郎衛門は叱りつけました。

朧ろの舟は、いよ〳〵はつきり青い波の上に青い姿を現はして音もなくすうつと近づいて來ます。乾分は叱られて、あはてて二人を其處へ置き放しにして、走り去りました。

『向ふが撃たぬ前に早くこちらが撃つのだ。何を愚圖〳〵してゐる。火藥をつめろ。俺の鐵砲を持つて來い。』

九郎衛門は夢中です。

と果して近づいて來た五隻の青い舟からパッと白い煙りが立上り始めました。鐵砲を撃つたのです。

ドーンといふ音。バチ〳〵と船板を打貫く響き、舳では未だ錨を卷く音がが〳〵と聞えて、大變な騒ぎです。

其時傍に駈寄つて來た峯枝が、隠し持つた短刀でそつと春之介の繩を切りほどきましたが、青舟との戰爭で夢中になつてゐる海賊は誰もそれに氣がつきません。

『よし、斯うなればもうしめたものだ。どさくさ紛れに逃げてやらう。』

と、春之介は姉の短刀を受取ると、ぶすりと文之亟の縛めを切つて、

『逃げよう。』

と一聲かけると、二人の手をひいて船端に駈出しどぶんと海の中に飛込んで了ひました。

『アッ！』

九郎衛門が叫んだ時には後の祭りです。暫く波間に浮き沈みしてゐた三人は、今しがた春之介等を磔にする爲陸地へ送らうと、用意した小舟へ泳ぎついて飛乘つて了ひました。

『ええッ、殘念！』

思はぬ事が起つた爲、折角捕へた役人や春之介を逃がしたので九郎衛門は齒がみしましたが、追駈ける暇もありません。

五隻の青い舟は、怪しい者共とばかり、春之介達が乘つた小舟に迫つて來ましたが、水に濡れた三人が海賊ではない事を見ると、何思つたか呼止めもせず、盛んに又海賊船と戰を續けてゐます。

春之介が見ると、青い舟には不思議に一人の人影も見えません。三角の帆の下には十人位は樂に這入れ相な、鐵の屋形があつて、小さな窓が開いてゐます。鐵砲の煙りはその窓から立上るのです。

『これでは成程海賊は敵ふまい。どんなに擊つた所で鐵の屋根で彈丸ははね返されるし、その上青舟の方では、安心してあの小さな窓から狙ひ擊ちするの

だもの。面白いな。』

春之介は力一杯漕ぎ乍ら、愉快さうに言ひました。

『そんなのんきな事を言つてゐると外れ彈丸にあたりますよ。急いで陸へつけませう。』

文之亟は注意しました。峯枝は恐ろしさに舟底に打つ伏して頭もあげません。

漸く陸地へ上ると、三人は村里目がけて走り出しました。

次第に鐵砲の音や人の喚聲も後ろに遠ざかつて了ふと、三人は、ほつとしました。

『さあこれから何うしませう。』

春之介が言ふと、

『もう大丈夫。役所のある所まで言つて、私の名を言へばきつと力をつくしてくれますから、一應大阪へ歸る事にしませう。貴方の事は私がどんなにでもお世話します。又娘さんも私が力になつてあげるから一緒に來なさい。決して心配はいらない。』

未だ二人の事を知らぬ文之亟は、優しく峯枝に言ひました。

『これは私の姉ですよ。貴方にお話した、あの惡者に攫はれたといふ姉なんですよ。』

春之介の言葉に文之亟はびつくりして、
『さうか。ほう、さうだつたか。』と目を丸くしつつ
『それは又意外な幸せだつたな。どうして二人は會つたのです。』
『最初私のぶちこまれた所に、姉も入れられてゐたのです。そこで色々二人で相談して、態と姉は海賊の云ひつけを守つて働き、すきを見て逃げるつもりでした。併し思ひの外に油斷がないので、隨分苦勞したのです。』
三人は晴れ〳〵と語らひ乍ら歩いてゆきました。

二

一里程先の村に辿りついて代官所に行つて種々な事情を話すると、代官所の役人は大變同情して、着物や金を借してくれました。
そこで三人は、打連れて大阪へ歸ることになりました。

大阪に歸りつくと、文之亟の家では大變な喜びです。歸つて來た家來の者から聞いて、もう全く死んだものときめてゐたのですから、喜んだのは無理もない事で、殊に又文之亟から話を聞くと、春之介の前に皆手を合せて拜まんばかりに有難がりました。
『命の恩人だ。どんな事をしても恩返しをせねばならぬ。』
文之亟もさう言つて、下へもおかぬ丁寧な取扱ひをするのでした。
併し春之介と峯枝は大阪へ歸りついてすつかり元氣をなくして了ひました。それは父に巡り合ふ爲に餘りに色々の恐ろしい目や悲しい目に逢ひ、その上何時になつたら會へるかまるで判らないからです。といつて村へ歸つても母を失つた身上とて、もう樂しみもありません。
水澤家の人々から大切にされ乍らも、二人はともすると涙ぐみ勝ちでした。文之亟の妻のお安は、二人の姉弟の心を察して、一層厚くいたはつてやるのでしたが、或日の事、文之亟に向つて、
『あの姉弟は大變心も立派だし、品格も備はつて、武士の家には似合ひの子供です。幸ひ私達の間に子供が御座いませんから、二人を貰ふ事にしましたら如何で御座いませう。』
と、言出しました。
『うむ　實は私もそれを考へてゐた所だが、萬一家で貰つた後で、本當の父親に巡り合ふ事でもあつたら又妙な事になりはすまいかと心配して、言出さないでゐるのだ。』
『その時には其時で、姉弟の心に任せたらよいでは御座いませんか。』
『お前がそれ程に思つてくれれば、それにこした事はない。私の恩返しにもなり、一時に二人の立派な子供を持つ事にもなるからね。』
文之亟は妻と考への合つた事を喜び乍ら、早速姉弟にその話をしかけました。
父に會へるか會へないか判らないで、隨分淋しがつてゐた二人は、言はれる儘に水澤家の子供となる事を承知しました。
賑やかな祝ひがあつて、姉弟が梶原の名を捨て水澤の名を名乘つたのは、それから間もなくでした。
人間は幸せになると、不幸であつた時の色々な淋しい悲しい心も次第に忘れて了ふものです。峯枝と春之介がさうでした。
優しい文之亟やお安からは又ないものとして可愛がられ、召使や女中からは、若樣お嬢樣と崇られて一年前とは打つて變つた明るい幸福な生活に慣れて來ると、自分達も亦本當の父母に仕へる樣な氣持で兩親を大切にし召使達をいたはるので、水澤家は春の樣な暖いまどひとなり、そして二人の姉弟の心の中から、いつしか本當の父を求める氣持も消えうすらいでゆくのでした。

さうした美しい幸福さが續いてゆく中に、又一つの事件が起りました。

それは例の海賊赤格子の問題です。或日役所から歸つて來た養父の文之亟は春之介に向つて、

『容易ならぬ事が出來た。赤格子の奴いよいよ又大阪界隈に現はれ始めたわい。今度こそどうしても引つ捕へ、此前の仇を取り、手柄を立てねば、役人としての顔が立たぬ。ついては命を投げ出しても賊と戰ふつもりだから、お前はよく覺悟をして、たとひ不意に私が殺される樣な事があつても、決してびつくりしてまごつく樣な態をせぬ樣にしつかりしてゐてくれ。』

『はい、承知致しました。』

春之介はきつぱり答へました。

三

赤格子九郎衞門等の海賊隊が、たくみに大阪の街に姿を現はして、商人の家などに押入り金を奪つては何處となく舟で又去つて了ふ事が近頃大變多くなつて來ました。

『お役人は居眠りでもしてゐるのか。こんな大賊が二年も三年も捕らぬなんて、餘り馬鹿馬鹿しい。』

『全くお役人は能なしだ。これでは大阪の人間は夜もろく〳〵眠れやしない。』

そんな言葉が街の人々の間にかはされてゐるのを聞くと、文之亟を始め役人達の心配は一通りではありません。どんなにかして早く捕へたいものとあせり始めました。

文之亟は漁師に化けて海岸をいつも見張る事にしました。すると或夕暮、いやに眼の凄い二人の男が小舟でそつと海岸に乘りつけて來ました。

『怪しい奴だ、かまはぬから引つ捕へろ。』

文之亟がそつと合圖すると、隱れてゐた十人ばかりの手下がばら〳〵と飛出して、いや應なしにふん

縛り、役所へ連れて歸つて調べると、果して此奴等は九郎衞門の乾分で、今夜襲ふ所を下檢べに來たのでした。

『しめた！』

文之亟は躍り上つて喜びました。よし今度こそは大丈夫捕へてやらうとこつそり手配りして、赤格子等の來るのを待受けてゐました。それとは知らぬ海賊は目星をつけたその家に押入らうとばかりやつて來た所を、いきなり役人は取圍んで、烈しい爭ひの末二十人ばかり捕へて了ひました。

併し殘念乍らその中には、大將赤格子九郎衞門は居ません。今夜は乾分の中のいい奴をやつて、自分は船の中で待つてゐたのです。直ぐにその足で港の近くを檢べに行きましたが、足の早い奴が逃げ歸つて報せでもしたのか、もう船の形は見えません。それでもまあ多くの海賊を取押えたのだから成功だと文之亟は大變勇み立ちました。

そして家に歸つて何時になく上機嫌で酒を飲み、春之介にその手柄話をして聞かせるのでした。

春之介も大變喜んで、早く赤格子が捕まつて養父の名譽が上る樣に念じ乍ら、部屋に歸つて寢につきました。その夜が可成り更け渡つた頃です。

どーんといふ物音に春之介はびつくりして眼をさましました。續いてうーむといふ苦し氣な聲が座敷の方で聞えます。

『何事だらう。』

時が時ですから怪しみ乍ら飛起きた少年は、隣りの部屋に寢てゐる峯枝を起して灯りをつけ、座敷へ行つて見ると、椽側の所で養父が血まみれになつて倒れてゐるのです。

『あ、父上。どうなすつたのです。』

二人は驚いてすがりつきました。

俄かの出來事に母のお安も、召使や若黨等も馳せつけましたが、文之亟はもう息絶えてゐます。

かねがね養父が云つてゐたのは此處の事だ。あはててはならぬ、と春之介は氣を落ちつけて泣き崩れる母と姉をなだめ死骸を座敷に入れて檢べて見ますと、胸に一發鐵砲の彈丸がとほつてゐるのです。

『さては父が便所に行つて、洗水をとらうと雨戸を開けた所を、外から狙つて擊つたのだな。』

春介介は刀を掴んでそつと庭に下り立ち、未だ曲者が居はせぬかと四邊を見廻しますと、垣根の側の大木の蔭に何やら黑い物が動いてゐるのが見えました。

『大膽な奴だ。死んだか死なないかを見屆けてゐたのだな。よし、逃してなるか。』

胸に問ひ胸に答へて、春之介はそつと近づきました。と、すうつと人影は動きます。

星明りで透かして見ると、頭巾をま深にかぶり、袴を長くはいて兩手を懷に入れてゐるさま、凄いほどの落着き振りです。

ひらりと垣根を飛越えて、何事もなかつた樣に空を見上げすた〳〵と歩き始めました。どう見てもたしかにあの海賊赤格子九郎衞門の後姿に違ひありません。少年は尙も要心深く足音をひそめて後をつけました。

四

丁度邸の塀に沿ふて曲角まで來た時、少年は腰の刀に手をかけて氣合を入れました。そしてもう一瞬で

『えい』

と聲をかけ躍り掛らうとした時、先の男はぴたりと足を止めました。

少年もどきつとして立止りました。それは、意外にももう一つの黑影が塀の上から飛下りて來て前の男の前に立塞がつたからです。

『おい赤格子。うまくやつたな。』

その黑影はあざ笑ふ樣に言ひました。赤格子はパツと一歩退つて身構へました。

『あはてるな。俺だ。』

黑影は、あくまで、なぶる樣な調子です。

『貴樣は朧ろ惣兵衞だな。又俺の仕事を邪魔しに來たのか。』

怒りをふくんだ赤格子の聲。

『さうだよ。此前阿波の海で到々貴樣を逃がしたので、殘念に思つてつけまはしてゐたのだ。お前が居ては、俺は何時までもいい仕事が出來ぬから、俺が勝つかお前が勝つか男らしく爭はうではないか。』

『何を言ふのだ。貴樣の樣な奴に負ける赤格子ではないぞ。さあ來い。』

と云ふより早く赤格子は、刀を拔いでさつと斬りつけました。

春之介も後ろから刀を引拔いて、じり〳〵と迫つてゆきました。

（つゞく）

涙の池

大戸喜一郎
岩岡とも枝畫

はげしい風を避けた山の窪地には、四五人の少年たちが温かさうに燃えさかつてゐる焚火をかこんで、笑つてゐました。

太平はその笑聲をきゝながら、自分も早く仲間入りがしたいと思つて、せつせと枯枝を集めました。

けれども背中におんぶしてゐるお坊ちやんに怪我をさしてはいけないと思つて、せつかく見つけた枯枝を見逃すことがいくどあつたか知れません。それでもやつと一抱への枯枝を集めたので、みんなの側へ行きました。

『駄目だ、太平は！』

向山の清公が第一番に、かうどなりつけました。

『お前は、仲間に入れねえんだ。』

新宅の茂も言ひました。

太平は、また欺されたのを知ると、むつとして口を尖らした儘、言葉も出すにつゝ立つてゐました。

『そ、そんなことはねえ。清ちやんも、茂ちやんも、木を一抱へ持つてくれば、あたらしてやると言つたぢやないか。』

太平はやつとこれだけ言ひました。

『うむ。だが、もう入れねえことにしたんだ。捨子とは遊ばねえんだ。なあ茂ちやん。』

『さうだとも。おら捨子とは遊ばねえんだなあ。』

新宅の茂は、さう言つてみんなの方を見ました。

『うん、おれもいやだ。』

『俺だつて。』

『俺も遊ばねえや。』

みんなは口々にさうどなりました。

太平の眼からは、ポロ〳〵と涙が流れ落ちました。仲間に入れられないといふよりは、捨子と言はれたのが、ずつと口惜しかつたのです。

太平は泣きながら、

『お父ちやんは、迎へに來るつて言つたんだい。』と、言ひわけのやうにいひました。

『嘘だい。迎へになんか來るもんか。もう、お前のお父ちやんは、どうなつたか分りやしねえ。』と、茂がいひました。

この言葉に、太平はわつと泣き出しました。太平はお父さんは生きてゐて、いつの日にかきつと迎へに來ると信じきつてゐたのです。

少年たちは太平が泣き出したのを見ても、まだいぢめるのを止めませんでした。

『泣き虫は、涙の池へいつちまへ。』

『さうだとも。捨子はみんな涙の池へ行くんだ。』

『顔をうつすと、お父さんの顔がうつるんだ。』

『嘘だ。お父さんが生きてゐれば映るが、さうでなければ映らねえんだ。』

みんなは、口々にいひました。

もう太平はがまんができませんでした。はげしく泣き立てながらくるりとみんなに背を向けて歸りはじめました。

けれども、意地惡の清公は、ま

だ放しませんでした。

『やい捨子。その木を置いてけ、そりやあ茂ちやんの山んだぞ。』

さう言つたかと思ふと、いきなり、太平が抱へてゐた枯枝を引つたくりました。あんまりはげしくやつたものですから、太平のからだはよろ〳〵ところげて、どたりと地面に倒れました。とたんにおぶつてゐた坊ちやんが目をさまして、わつと泣き出しました。その聲を聞くと、太平は一層はげしく泣き叫びました。そして、やつと

『みんな、みんな覺えてゐろ。旦那さまに言ひつけてやるから。』

さう言つて、太平は咽喉もさけるかと思はれるほどの大聲で泣き叫びながら、山を下つて來ました。

けれども太平はまつすぐに家にはかへりませんでした。かうして意地惡の少年たちにいぢめられると、いつも山の出鼻にある窪地へ來るのでした。こゝは風もあたらないあつたかい所です。けふも太平はその窪地へ來て、たつた一人いつまでも〳〵泣きつゞけてゐました。

可哀さうな捨子の太平！　太平は家へかへつて、旦那樣にいひつけてやる勇氣もなかつたのです。旦那さまだとて、どうして捨子の太平を慰めてくれるでせう。いゝえ捨子の太平なんか、誰ひとり慰めてくれるものはないのです。

けれどもこゝに、たつた一つの例外がありました。作男の幸兵衛爺さんでした。幸兵衛爺さんは、太平がお父さんに捨てられたのをひろひ上げて、育てゝ、さうして自分と同じご主人のお守りになるやうにしてくれたのでした。お爺さんひとりは、みんながどんなにいぢめても、太平をそれは〳〵可愛がつてくれました。ところが、どうしたわけか、太平はいつかう幸兵衛爺さんになじむことができませんでした。それどころか、幸兵衛爺さんが可愛がれば可愛がるほど、太平は側へ寄りつかないやうにしたのです。ですから、意地惡な少年達にいぢめられたときでも、太平の心には決してやさしい幸兵衛爺さんの姿はうつゝて來なかつたのです。そして慰めてくれ

る者もない寂しさに、いつまでもひとりで泣きつゞけてゐるのでした。

太平がさうして飽きるだけ泣いて、涙もつきてしまつて顏を上げたときには、お日さまはもう西の山に落ちかゝつてゐました。山裾の村の冬の日は、取りわけ短いものです。日が落ちたかと思ふと、夕闇はどんどん村里をつゝんで行くのです。

太平はまつ暗になつて、家へかへつて來ました。そしていつものやうにお臺所に腰かけて、冷たいご飯を食べました。太平は夜は何にもする仕事とてありません。ですからご飯を食べると、いつも寢ることにしてゐる納屋へかへつて來ました。

そこは太平と幸兵衛爺さんとの部屋でした。納屋の一部が區切られて、板をはつた上に藁縁がしいてあります。

幸兵衛爺さんはもうさきに歸つてゐて、爐にいつぱい火を起してゐてくれました。

『おゝ、歸つたか。さあ、あたるがいゝ。』

お爺さんはいつものやうに、やさしく言つてくれました。太平はおとなしく兩手を火にかざしました。そして暫くあたつてゐましたが、とつぜん顏を上げて言ひました。

『お爺さん、城山に涙の池つてのがあるね。あの話は、ほんとの事なの？』

『うむ。そんな事を、誰が言つたんだ。』と幸兵衛爺さんは、驚いたやうにいひました。

『向山の清ちやんや新宅の茂ちやんが言つてたよ。』

『うむ。さうか。そんな事も言はれてゐる。朝お日さまの上りなさる前に、まだ星の出てゐる頃池の面を見ると、自分のお父さんやお母さんが映るつてな。だが、太平、お前はそんなにお父さんに會ひてえのか。』

『あゝ、おらあずゐぶん會ひてえや。』

太平はもう涙をうかべました。それを見るとお爺さんは、惡い事を言つたと思つてあわてゝつけ加

へました。

『だがな太平。お前のお父さんがゐるのなら、いつかはきつと會へるんだ。お父さんはお前に會ひに來らあ。それまでにお前は立派な若え衆になつてゐなくちやいけねえ。な分つたか。分つたら、泣かずに寢るんだ。ホラ、外はあんなにひどい風だ。あしたもきつと大霜だらう。』

お爺さんはさう言つて、ていねひに火に灰をかけて爐に金網をかけました。そして座敷の隅にあつた布團を、爐のはしにしきました。

かうして二人はいつも睡るのでした。やがて幸兵衛爺さんは、靜かな寢息を立てはじめました。けれども太平は頭が冴えて、どうしても睡れませんでした。

今日清ちやん茂ちやんにいぢめられたこと、涙の池のこと、お父さんのこと。そんなことがつぎつぎに現れては消えて行つたのです。そしていつの間にか、お父さんに捨てられた日のことを思ひ浮べてゐました。

……太平はもう幾十日となく、お父さんに手をひかれて歩いてゐました。その長い日の間に、一どだつて汽車に乘つたことも、馬車へ乘つたこともありません。いゝえ人の家へとまつたことさへ、一どもなかつたのです。さうしてある冬の寒い風の吹く夕方、この村につきました。そのときには二人は、いく日も殆んどご飯をろくに食べてをりませんでしたから、お腹がぺこ〳〵にすきゝつてゐました。それでも太平は、お父さんの何かあつたかい物を貰つてやるといふ言葉にはげまされて歩きつゞけました。お父さんはまた、今晩から家の中に寢られるかもしれない、ご飯だつてお腹一ぱい食べられるかもしれない、とも言ひました。その言葉に、太平はどんなに喜んだことでせう。

やがてその村もつきようとする村はづれに來たとき、お父さんは財布をはたいて、どら燒を一つ買つてくれました。それがお父さんの持つてゐる最後のお金だつたのです。けれども何にも知らない太平は、いく日もたべたことのないあつたかい物を手に握つて、どんなに喜んだかしれません。兩手をあたゝめたり、頰に押しつけたりして、ほんの少しづつ食べつゞけてゐました。

さうして二人が村のお宮まで來たときでした。お父さんは急に立ち止つて言ひました。

『太平、お父さんはな。ちよいとご用があるからこゝにおとなしく待つておいで。すぐ歸つて來るで』

もちろん太平は承知しました。そして食ひのこりのどら燒を少しづつ食べてをりました。

けれどもお父さんは、太平がそのどら燒を食べてしまつても、それから長い間おとなしく待つてゐ

ても、かへつて來ませんでした。太平は捨てられたのです。それと知つた太平はどんなに泣いたことでせう。どんなにさがしたことでせう。けれどそれつきり、お父さんは二どと太平の前に姿を現しませんでした。

太平はふつと眼を開きました。部屋の中はまつくらでした。

『お父さんは、きつと迎へに來るんだ。』

太平は泣きながら、さう呟きました。けれどもその時、今日茂ちやんの言つた、

『迎へに來るもんか。』といふ言葉がふつと想ひ出されました。この言葉は太平が今まで一ども思つても見なかつた、お父さんの死といふことを考へつかせたのです。

『もしお父さんが生きてゐなかつたら……』

おゝ、太平はさう考へるだけでも恐ろしさに身がふるふほどでした。

『生きてゐる！』

太平は思はずさう叫んだのですけれども、叫べば叫ぶほど、もしやといふ疑は大きくなつて行きました。

太平はその不安の中に、城山の中腹に靜かに水をたゝへて横つてゐる涙の池を思ひうかべました。幸兵衛爺さんのいつた言葉を思ひうかべました。

『生きてゐれば映るんだ。』

さう言つた清ちやんの言葉も思ひうかべました。いゝえ、そればかりか、太平は實際に涙の池の表にお父さんの姿がうつゝたやうにさへ思ひうかべたのです。そして嬉しさうに、

『映つたぞ！』と叫びました。

けれども太平は、安心ができませんでした。

『明日になつたら。』

太平はさう思つて、自分の信じきつてゐるお父さんが生きてゐるといふことを確かめに、山へ行かうと決心しました。

あくる日の朝、太平が目をさますと、いつも早おきの幸兵衛爺さんは、まだ睡つてをりました。それを見ると、太平はそつと起き上がつて家をぬけ出しました。

まだ夜は明けきらないで、空にはたくさんの星が閃いてゐました。太平は霜柱の立つた道を踏みながら、どん〳〵城山へのぼつて行きました。そして寂しいなぞとは考へもしないで、熊笹をわけて涙の池へ近づいて行つたのです。

ところが、池のまはりはいつぱい熊笹が茂つてゐて、池をのぞきこむことは少しもできないではありませんか。

太平は暫く立ちすくんで考へ込んでゐましたが、やがてそばに生えてゐる木にする〳〵とよぢ上つて行きました。そして木の葉の間から顔をつき出して、足もとの池にぢつと見入りました。

まだ四邊はまつくらでしたから池の面はよく見えませんでした。それでも太平は、一心に見つめてゐたのです。と、おゝ！ 映つたのです。かすかに、かすかに、白いものが池の面に浮び上つたではありませんか。

『お父さん！』太平はむちうでさう叫びました。そしてお父さんは確かに生きてゐると思ふと、嬉しくて〳〵ボロボロ涙をこぼしながら、木を下りました。

『生きてるんだ。迎へに來てくれるんだ。』

太平は呟きました。そしてむちうに道を駈けはじめました。けれどもそのとき、太平はふつと立ち止りました。昨夜幸兵衛爺さんの言つた『それまでに立派な若え衆になつてゐなければいけねえ』といふ言葉が思ひ出されたのです。

『さうだ立派な若え衆になるだ。』

太平は立ち止つたまゝ、眼に涙を浮べて言ひ放ちました。同時に幸兵衛爺さんの優しい姿をはじめて思ひ浮べたのでした。

『お爺さん、これからいろ〳〵の仕事を教へて下さい。』

太平はさう呟いて、自分の今までよそ〳〵しくしたことを、ほんとにすまないと思ひました。そして家へかへつたら、さつそくお爺さんにあやまらうと心にちかつて勢ひよく山を下りて行きました。

（をはり）

漂流二百三十日

久米舷一

岩岡とも枝畫

（前號までの梗概）

カザロンと云ふ人が、帆前船に乘つて、大西洋の眞中へ出ました。すると、突然船底から火事が起つて、危く沈沒しさうになりました。船長のカーチスは、落附いた人でしたから、色々と工夫をこらして、やつとの事で消し止める事が出來ました。すると今度は、暗礁に乘りあげたために、船底に大きな穴があいて、そこからどん〳〵水が流入つて來たのです。カーチスは、いよ〳〵本船を見棄てる決心をして、先づ、大きな筏を作らせ、それへ全員二十三人の者を乘り込ませました。その中には、二人の婦人が混つてゐました。一人は、キーヤー夫人と云つて、大金持の奥さんでしたが、ひどい病氣に罹つてゐて、明日をも知れぬ命でした。

一、筏に乘つて

船が沈沒する時には、大きな渦が卷き起ります。私共の乘つた筏は、この渦に卷き込まれないやうに、出來るだけ早く、遠くへ離れなければなりませんでした。

『オールをとれ！』

カーチスの命令によつて、水夫達は、めい〳〵自分の持場のオールを握りました。

筏は、次第に本船を離れて行きました。

恰度その時、雲間から顔を出した朝の太陽が、輝やかしい光りを大海原の一面に投げはじめました。筏の上に立つた人々は、皆んな啞のやうに默つて、次第に遠くなつて行くチャンセラー號の姿を見詰めてゐました。

チャンセラー號は、艫の方からだん〳〵と水に浸つて行きました先づ最初に、船尾樓が隱れ、つゞいて折れ曲つた中檣樓が見えなくなりました。そこでチャンセラー號は、暫くの間沈まずに、ぢいッとしてゐる樣子でしたが、次の瞬間には、突然船首を高く空に向けて逆立ちをするよと見る間に、ズル〳〵と引きこまれるやうに沈んで行つてしまひました。

私共は眼をこすつて、チャンセラー號の浮んでゐたあたりを眺めました。併し、跡には、たゞ轟々と白波が騷いでゐるばかり、あの懷かしいチャンセラー號の檣の先一ッさへ見えませんでした。

皆んなの顏には、云ひやうのない寂しさが現はれてゐました。殊に、船長のカーチスの顏は、見るのも可哀さうなくらゐでした。自分達二十三人の命を、二ケ月の間護つてくれたチャンセラー號は、かうして海の藻屑と消えてしまひました。

私は、今更のやうに、今私共が乘つてゐる筏の姿を見廻しました。幅が三間に、長さが十間の筏——これで果して、八百哩もの海上を乘り切つて、南米の海岸まで着く事が出來るでせうか。

筏の上には、飲料水が二樽と、ビスケットの鑵が二三箇、それに鹽漬けの肉が五樽ほどありました。まだ他に、パンの塊りや、羊肉などが澤山あつたのですが、それは皆んなあのジンクストロップ一味の者が逃げる時に、持つて行つてしまつたのです。

カーチスは、この食物の少ない事に就いては、非常に頭を惱ました樣子でした。なにしろ、二十三人もゐるのですから、普通どうり食べてゐたら、ホンノ五六日で無くなつてしまふでせう。そこでカーチスは、人一人について、一日にビスケット三枚、肉一切れ、飲み水は、大きいコップに一杯と云ふ事に決めました。

食物の少ないのは先づ我慢しても、日にコップ一杯の飲み水ではどうにも我慢のしようがありませんでした。頭の上からは、熱帶近

くの午後の太陽が、ヂリ〳〵と照りつけて來ます。海の上にはソヨとの風もなく、その熱さと云つたらありません。そこへもつて來て日に一杯の水では、まつたく泣き出したくなるほど辛かつたのです。

二、最初の犧牲

幸ひ、海の靜かな事が、何よりも有難い事でありました。筏は、水夫達の漕ぐオールによつて、極く僅かながらも、西へ西へと進んで行きました。

あの病氣のキーヤー夫人は、筏に乘り移つてから、又一段と容態が惡くなつたやうに見えました。熱が高いので、顏がバラ色になつて、始終何か譫言を云つてゐました。附き添ひのハーベー嬢は、甲斐〻しくその世話をしてゐました。私はまつたく、ハーベー嬢ほどよく氣の附く、やさしい心を持つた女を見た事がありません。ハーベー嬢は、カーチスから、帆木綿を一枚貸してもらつて、それで病人の顏の上へ日覆ひを作りました。そして、自分の貰つた飲み水と、キーヤー夫人の分とを合はせて、それにガーゼを浸し、たえまなく病人の唇を濡してゐました。病人は、熱が高いために、人一倍飲み水が欲しかつたのでありませう。

その晩は無事に濟みましたが、翌る日の晝過ぎから病人の容態が益々惡くなつて、もう誰れが見ても、到底、恢復は覺束ないやうに見受けられました。痰が喉にからまつて、息を吸ふたんびに、苦しさが歴々と顏に現はれてゐました。

その夜の七時頃、キーヤー夫人は、遂に最後の息を引きとりました。

ハーベー嬢は、遠がに泣きだしこそしませんでしたが、眼に一杯涙をためて打しほれてゐる有樣は他の眼にも痛々しいほどでありました。

可哀さうなキーヤー夫人！

夫人は、自分の夫のキーヤー氏が、二三日前に、自分を棄てゝ逃げだしてしまつた事を、死ぬ時まで知らなかつたのです。

夫人の死骸は、帆木綿で叮寧に包まれて、足には錐として大きな斧が結へつけられ、舷側から海の中へ抛りこまれました。

筏の上の人々は、皆んな冷やかな顏をして、この有樣を見詰めてゐました。私は白狀します。私は今でこそキーヤー夫人を可哀さうだと思ひますが、その當時は、少しも可哀さうだなどとは思はなかつたのです。

『なアに、自分も遲かれ早かれ、あゝ云ふ奏になるのだ……おもしを附けられ、海へ抛りこまれて、鮫や鱶の餌食になるのだ……』

かう思ふと、私は他人の事を可哀さうだなどと思ふ餘地はありませんでした。私は生きたい、どうしても生きたい——自分が生きるためならば、他人を蹴とばしても突き轉ばしても生きたい——なアに、死ぬ奴は死なして置け。俺は自分の生きる事さへ考へてゐればいゝのだ——私はその當時、かう考へてゐたのです。それは、ハーベー嬢のやさしい心に比べて、何んと云ふ相違でありましたらう！

三、恐ろしい言葉

キーヤー夫人の水葬を濟ました晩の事、主計長のホバートと云ふ男が私の所へやつて來てニヤ〳〵妙な笑ひを洩しながら、

『カザロンさん。貴方は、今の葬式を何んと思ひなさるね？』と、訊

ねました。

『何んと思ふとは？……』私は、訝かしさうに訊ねかへしました。

『つまり、その……惜しいとは思はないかと訊ねるのぢや。』

私は、益々譯が分らなくなりました。死んだ人を葬むつて、何が惜しいと云ふのでせう。

『惜しいッて、何が惜しいのさ…』

『はゝゝゝ、わからなけりやいゝよ。……なアに、お前さんにもその內、分る時が來るよ。……』

ホバートはかう云つて、そのまゝ向ふの方へ歩いて行つてしまひました。

なるほど、ホバートの云つた通り、私はその後一月ほどたつて、始めて『惜しい』の意味が分りました。ホバートは實に、恐ろしい事を考へてゐたのです。

私共が筏に乘り移つてから、早や五六日の日數が經ちました。その間中、私共は暇さへあれば西の方角を眺めて、ひよッとしたら陸の姿が見えはしないかと見渡してゐました。併し、陸の姿はおろか海の上には、帆かげ一ッ見えませんでした。

毎朝、カーチスは、私共を一つ所に集めて、そこでめい〳〵に、一日分の食糧を渡しました。もうこの頃では、又ずッと食物の量を減らされて、一日にタッタ肉一切れと、ビスケット一枚しか渡されませんでした。私は、その食物を貰ふやいなや、丁度蛙が蠅でも呑みこむやうに、ヒョイと一口に呑み込んでしまひました。水夫達も皆んなさうでした。身體の大きな水夫達は、とてもこれだけでは、我慢が出來なかつたに違ひありません。

水夫達は、たび〳〵カーチスに向つて、『俺たちの食物は、他の遊んでゐる奴よりも、もつと多くして貰ひたい。』

と、申出ました。

併し、カーチスは、どう云ふ考へからか、決して水夫達の云ふ事を聞き入れませんでした。それが水夫達にとつては不平で堪らなかつたのでありませう。水夫達は、時々、凄い眼をギョロリと光らせて、私共船客の方を睨みつけました。私はその眼の中に、

『彼奴ら、早く死ねばいゝのに……』

と云ふやうな意味が含まれてゐるやうに思はれました。併し、これは私の僻みだつたかも知れません。

筏の上の人々は、日に〳〵瘠せ衰へて行きました。誰一人として、生々とした顏色をしてゐる者はありません。皆んな、頰の肉がゲッソリと落ちて、頰骨だけが高く飛びだし、眼の色は、妙な光りを帶びて來ました。この骸骨のやうな人間が、筏の上をあつちへ行つたり、こつちへ來たりしてゐる光景は、實際、二タ眼とは見られなかつたでありませう。

四、鱶釣り

『今日でいよ〳〵最後の食物が無くなる。』と云ふ日の事でありました。

水夫の內の一人のオーエンと云ふ男が、何かしらカーチスに向つて、熱心に話しかけてゐました。

『大丈夫ですとも、餌なんか無くても、大丈夫捕れますよ……』

オーエンはかう云つて、切りに何か薦めてゐました。

『捕るッて、いつたい、何を捕るのかね。』

私は傍へ行つて、訊ねました。

『鱶です。鱶を釣るのです。』

『鱶を？　へえ……鱶が何處にゐるんです？』

『それ、そこに幾らでもゐるぢやありませんか。』

オーエンはかう云つて、顎で船

側を指し示しました。

私は、船側につかまつて、海の底を覗いて見ました。海の水は美しく透きとほつて、十尋のあたりまで、ハツキリと見通す事が出來ました。私が、瞳を凝して見るとなるほど海の底の方に、何かしら黒い大きな怪物が、えらい勢ひで泳ぎ廻つてゐるのが見えました。

『あれが鱶ですか？』

『さうです。』

オーエンはかう答へて、なほもカーチスに向つて、熱心に說きすゝめてゐました。カーチスも、到々、根負けがしたらしく、鱶釣りの企てを許す事になりました。

オーエンは先づ、船大工のドーラスから、先のまがつた大きな鑿を借りて來ました。オーエンは、これを釣り針にして、その根元に丈夫な太い麻繩をつけました。

これで道具は揃ひましたが、困つたのは、餌です。まだ幾らか肉が殘つてはゐましたが、この貴重な肉を、あやふやな釣りの餌になどする事は出來ません。

『何か、餌にするやうな物はないかな。』

オーエンはかう云つて、筏の隅から隅まで探して歩きましたがなんにも見當りません。

その時、主計長のホバートが、ニヤ〳〵笑ひながら私の傍へ出て來て、

『ね、カザロンさん。私がこの間申上げた事がお分りになつたでせう。』

と云ひました。

『この間の事とは？』

『ホラ、キーヤー夫人の死骸の事ですよ。あれを棄てさへしなかつたら、かう云ふ時、早速役に立つんですのにねえ……』

ホバートはかう云つて、『ヘッ、ヘッ、ヘッ』と妙な笑ひ聲を擧げました。

私は、ハッとして思ひ當りました。キーヤー夫人の死骸をとつて置くと云ふのは、魚釣りの餌にするつもりだつたのです。

この時には流石の私も、愕然として、暫くの間棒立ちになつてしまひました。

ホバートは、いかにも自分の冗談が氣に入つたやうに、暫くの間、私の青ざめた顏を見てゐましたが、やがてくるりと後ろを向いて、向ふへ行つてしまひました。

その時、オーエンはやッと餌の代りになるものを見つけました。それは、ハーベー孃が頸の所へ卷いてゐる、紅い絹の布でした。オーエンは、ハーベー孃からその布を貰つて、釣針の尖に結びつけました。

私が舷側から海の中を覗いて見ますと、鱶の群はいよいよその數を增したらしく、互ひに上になり下になりしながら、この筏に附き添つて泳いでゐました。中には、長さが二間もあるやうな大きな奴が、筏のつい傍まで浮び上つて來たかと思ふと、いきなり、くるりと身を飜がへして、銀色に光る横腹を見せたまゝ、又、海の底深く沈んでゆく奴もありました。鱶の群はかうして、筏のまわりを泳ぎながら、何かいゝ得物はないかと、つけねらつてゐたのでした。

その鱶の群の中へ、オーエンは例の釣針を投げこみました。と、その物音に驚いたかして、鱶の群は一度にパッと散つて、みんなその姿を消してしまひました。

筏の上の人々は、皆んな落膽してしまひました。もう二度と鱶の群は戻つて來ないのではないかと

思はれたからです。舷側から覗いてみると、例の紅い絹の布は、筏から二十尺ほど下の所に、ブランとぶら下つてゐました。海の水が透きとほつてゐるので、それが實によく見えました。

その時、私は、筏から二十尺ほど前方の海の中に、何か黒い影が現はれたのを見ました。黒い影はすばらしい勢ひで、紅い布を目がけて突き進んで來ました。

『鱶だ！』

と思つた瞬間、鱶は例の紅い布を、一呑みに呑みこんでしまひました。

釣針についた長い綱は、オーエンがたつた一人で握つてゐました。オーエンは忽ち、烈しい力で引かれたために、もう少しで海の中へ引きこまれさうになりました。

『早く、早く！　來てくれ！』

オーエンは氣狂ひのやうな聲をたてました。皆んなは一度に走りよつて、綱を握りました。カーチスは、その綱の先をしつかりと筏の檣に結びつけました。

なんと云ふひどい力でせう！この大きな筏は、たつた一匹の鱶に引かれて、ずる〳〵と引き摺られました。舷側には幾度か波が打ちあげて、私達は皆んな、づぶ濡れになつてしまひました。

鱶は、何んとかして針から逃れようとして、死物狂ひになつて暴れ廻りました。私達は暫くの間、鱶の勢ひを弱らすために、わざとその儘に放つて置きました。

暫くする内に、だん〳〵鱶の力が弱つて來ました。

『さア、皆んな引いてくれ。力を協せて……』

オーエンは、この場の指揮者と云つた格で、得意さうに、かう云ひました。まつたく、オーエンにして見れば、自分の發案でこの大鱶を捉へることが出來たのですから、得意になるのも無理はありませんでした。この鱶一匹を捉へることが出來たために、これから私共は少なくとも一月の間、餓死する心配はありませんでした。

『さア、しつかり、しつかり！』

オーエンは皆んなの間を走り廻つて、かう云つて勵ましました。

鱶は次第に、筏の近くへ引寄せられて來ました。私共は、ありありとその姿を見る事が出來ました長さが二間もあらうかと思はれる青黒い體。針は、その喉元深く突きさゝつてゐるらしく、鱶が暴れる度んびに、そこからおびたゞしい血潮が流れだして、海の水を染めました。

五、失敗

鱶は、もう直ぐ眼の先まで、引きよせられて來ました。綱も、餘すところ五六尺しかありません。オーエンは、手に捕鯨用の槍を握つて、もう少し近づいたなら、最後の止めをさしてやらうと身構えてゐました。

丁度その時、鱶はなんと思つたか、くわッと大きな口を開きました。私共筏の上にゐた者は皆んなその鱶の口の中に、ズラリと並んだ鋸のやうな齒を見ました。

『あッ』

と、一聲、誰れかゞ恐怖の叫びごゑを擧げました。その途端、鱶はガッキと口を結びました。その鋭どい齒に會つては、どんな丈夫な物でも堪りません。釣針の根元についてゐた木製の柄は、ポッキと食ひ切られてしまひました。

釣針を喉に含んだまゝ、鱶は大きく一跳ねして、瞬たく間にその姿を消してしまひました。皆は一度に海の底を覗きこみました。併し、もはや何處にも、その影さへ見當りませんでした。

暫くの間、一同は呆然として、海の上を見つめてゐました。

『誰れだ。今、聲を出した奴は……。今、聲をだした奴は、前へ出ろ！』

オーエンは眞赤になつて怒つて槍を構へたまゝ、皆んなの顏を見廻しました。その勢ひは、もし前へ出ようものなら、たゞの一突きに、突き殺されてしまひさうでした。

皆んなは互ひに顏を見合せました。併し、誰一人として進み出る者はありませんでした。

（つゞく）

暗闇城

小島政二郎
寺内萬治郎畫

七

しかし、僕はヂユロックのやうにたやすく狼狽してしまひはしなかつた。この鍵は、あの扉にこそ合はないが、何か役に立てることの出來るものなのであの娘が投げ込んで行つたのだらう。考へて見れば彼女は、ここの扉に合ふあの大きな鍵をどうして持つて來ることが出來よう。この鍵は屹度、あの憎い、人を殺すことなんか平氣な繼父のポケットの中に、大事にしまはれてゐもゐたものなのかも知れない。何の役にも立たないものなら、彼女が自分の生命の危險を承知で、僕達に渡しに來たその心が、全く分らなくなつてしまふ。何の役に立たない？　そんなことがあるものか。役に立てることが出來ないとすれば、この鍵の使ひ方に氣がつかなかつたとしたらそれは僕達の智慧がまだ不足だと云ふ證據なのだ。

僕は掌にのせた鍵を、見た儘ぢいつと考へてゐた。が、僕は勇氣づけられて來たので、永くぢつとしてはゐなかつた。僕は壁際に積まれた箱を、片つ端から動かし始めた。ヂユロックも僕の樣子を見て、元氣を取り返したらしく、一心に箱を動かす仕事を手傳ひ始めた。それはしかし、容易な業では無かつた。どれもこれも皆、大きな重い箱ばかりだつた。二人は夢中になつて、樽や、チーズの箱を轉がしては、部屋の眞中へ無茶苦茶に寄せ集めた。一番最後に、もう部屋の隅の火酒のはひつてゐるらしい非常に大きな箱を退ければ良いだけになつた。

僕達は、新らしい力を合せて、それをやつと押し動かした。すると、その後の腰羽目に、小さな木の扉のあるのが見附かつた。

『あつた。』

ヂユロックは汗の流れる額の下に、輝かしい瞳をチラリと見せた。

僕は、ポケットから急いで鍵を掴み出して、扉に合はした。嗚呼、鍵は合つた。

僕達はその扉が、目の前にポカリと開くのを見た時、思はず歡喜の叫びを上げずにはゐられなかつた。二人は手を握り合つて跳び上つた。

八

ラムプを片手に持つと、僕はその扉の口へ潜り込んだ。ヂユロックも後へつゞいた。

次の部屋は、この城の火藥庫だつた。荒ッぽい壁に圍れた穴藏のやうな所で、そこには四方にギッシリ樽が並んでゐた。その中の一つの樽の鏡に穴が明いてゐて、その穴からこぼれた火藥の粉が黑く床の上に積つてゐた。その向うに、もう一つ扉がある。しかし、その扉には錠がガッチリ下りてゐた。

『畜生。やつぱり駄目だ。』
かうヂュロックが舌打ちした。
『もう鍵がない。』
彼は情ない顔をして僕を見上げた。
『あるよ、いくらでもあるよ。』
僕は元氣よく叫び返した。
『どこに？』
彼は不思議らしく、僕の手を見た。僕は、默つてその火藥の樽を指して見せた。
『この扉を爆破するつもりなんですか。』
『さうさ。』
『しかし、この火藥庫が、一時に爆發してしまひはしませんか。さうしたら僕達は……』
それは全くだ。しかし、僕の智慧はまだ盡きはしない。
『さつきの物置の扉を爆破しよう。』僕はさう云ふより早く駈け戻つた。さうして、蠟燭のつまつてゐる錫の箱を探し出した。それは、丁度僕の帽子ぐらゐの大きさがあつた。二三斤の火藥を詰めるには、誂へ向の大きさである。口火用に僕が蠟燭の用意をしてゐる間に、一方ではヂュロックがせつせと箱の中へ火藥を詰めてゐた。やがてすべての用意が手落なく出來上つた。恐らく工兵大佐が見たつて、舌を卷いて感心しただらうと思へるぐらゐ上手に出來上つた。
『大丈夫だらうか。』
『大丈夫さ。』
僕は、自信を以つて彼に答へると、立ち上つて頃合のチーズの箱を三つ積み重ねた上に、今拵へた火藥箱を、錠前に倚り掛かるやうにして置いた。それから、蠟燭に點火すると、急いで火藥庫の中へ逃げ込んで、うしろの扉を堅く締めた。

九

諸君、その時の僕達の氣持を想像して見てくれ給へ。薄い扉一重を頼みにしてゐるのだ。若しも爆發した餘勢が、僕達の部屋に洩れたが最後、幾百貫とも知れない火藥の山の中にゐる體は、黑く粉々になつて、城の塔より尙高く、吹き上げられて消えてしまふのだ。
さう思ひながら、今か今かと隣の部屋の樣子に、呼吸をひそめて聽耳を立ててゐた。
四五分の蠟燭があれ程永くかゝつて燃えようとは思はなかつた。餘り永くかゝつたので、ひよ

つと火でも消えてしまつてゐるのではないかと思つて、僕が扉を明けて確かめようとした時だつた。

ガツ！　と云ふ爆音と同時に、目の前の扉が粉々になつて吹き飛ばされ、その破片や、物置の中にあつた蕪や林檎が、夕立のやうに降つて來た。それッとばかりに飛び込んで見ると、その部屋に濛々とする煙に先は見えず、足は破片にさらはれて、よろよろしてしまつた。しかし向うに、あの暗い大きな扉のあつたあたりに、四角な明りが見えてゐた。

火藥は完全に效を奏したのである。事實、その火藥は効を奏し過ぎてゐたのだ。なぜならば、牢屋を破壞すると同時に、牢番まで倒してゐたのだつた。その破れ穴から用心しながら、僕達が出てすぐ目に附いたのは、牛殺しのやうな鉈を持つた大男が、額に傷を受けて仰向けざまに轉がつて、うん〳〵云つてゐる最中だつた。その次に目に映つたのは、大きな犬が前足二本を吹き飛ばされて、キャン〳〵啼いてゐた。

その時、突然、僕は悲鳴に驚いて、キッとうしろを振向いた。見ると、ヂュロックが壁際に、もう一匹の獵犬に喉笛を嚙みつかれて、必死となつて左手でその犬を押しのけながら、右手の劍でメチャ〳〵にその犬の胴體を差し貫いてゐた。が、彼の脊丈程ある犬は、血みどろになつても、ヂュロックの喉笛に立てた齒を離さうとしない。彼の劍を持つ手は、機械的に動いてゐるばかりだ。僕はあわてて駈け寄つて、犬の頭へピストルを打ち込むと、やつと力つきてドタリと倒れた。倒れてしまつても、暫くは、その血走つた目を見開いて、血の中にもがいてゐる樣子は、さすがに靜視することが出來なかつた。

ヂュロックは兩手で自分の傷口を押へながら、よろめいて立ち上つた。

もう愚圖〳〵してゐる時ではない。行く手からは女の悲鳴が手に取るやうに聞えて來た。もう間に合

ふか合はないか分らない。が、兎に角、聲のする方へ、駈け着けて見た。廣間には、二人の男がゐたが僕達の拔き放した劍と、恐い顏付を見ると、皆縮み上つて、隅の方へ後ずさりして行つた。

ヂュロックの首からは、血潮が點々と滴り、落ちて上衣の灰色の毛皮を赤々と染めてゐた。實際その時の青年の意氣の凄じさは、男獅子のそれのやうで、僕より素早く、あの最初僕達が、暗闇城の主に會つた大きな部屋の中へ流星のやうに飛び込んで行つた僕もすぐ後を追つた。その瞬間、彼の肩越しに、部屋の中の樣子がチラと見えた。

ストローベンタル男爵が、部屋の眞中に丁度獅子のやうに、あのこんがらかつた髮の毛を振り立てて突ッ立つてゐた。前にも云つたやうに、彼は大きな肩をした堂々たる男だつたが、その上に憤怒の色を漲らして、拔身の長劍を引きさげて突ッ立つたところは、彼程の惡人ながら、逞兵にも見まほしいと僕は思つた。

彼のうしろの椅子の上に、あの女の人が俯向いてゐた。そのちつとも動かない姿は、生きてゐるのか死んでゐるのか分らなかつた。ダラリと床に垂れた白い細い腕には、澤山の紫色の鞭痕があつた。二の腕あたりのうしろからは、血が白い着物を、椿の花のやうに染めて、ぽた〳〵床に落ちてゐた。僕は、僕達の來やうがもう遲かつたのではないかと思ふと思はずハッとした。

すぐ側の床の上には、犬を打つ皮の鞭が捨てられてあつた。あの男爵は、獵犬を打つのと同じやうにこのか弱い娘を打つて〳〵打ち据えたのであらう。

僕達が突入するのを見ると、ストローベンタルは狼のやうに吠え立てた。さうして咄嗟に、劍を取り直すと、雄叫びの聲を上げながら、斬り附けて來た。

（つゞく）

青い木の芽

達崎龍

川上四郎畫

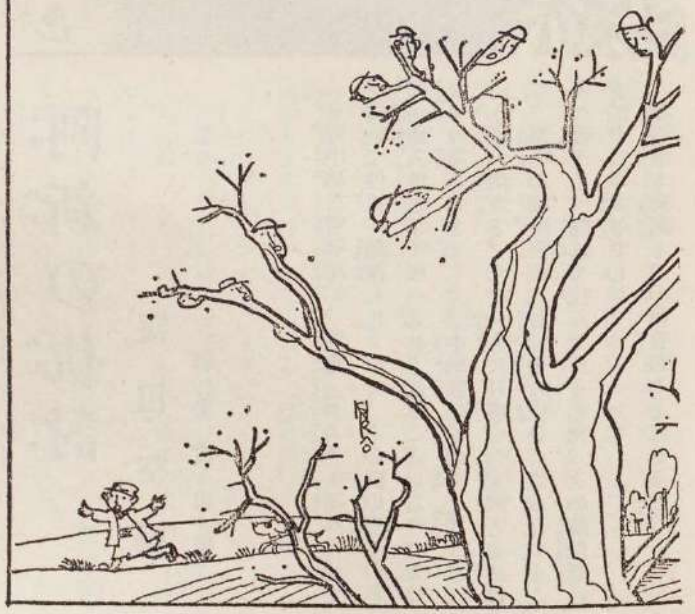
木の芽の子供が
一粒　二粒
ポチポチ生れた
生れたヨ

あれは何ンの芽
今年も日向で

ボカボカ生れた
生れたヨ

青い木の芽の
帽子をかぶつて
バラバラ生れた
生れたヨ

村も子供も
木の芽も日永だ
ホロホロ生れた
生れたヨ



阿新の仇討

窪田空穂
羽鳥古山畫

一

日野中納言資朝卿が、關東（北條高時）へ捕へられてつづいて佐渡へ島流しにされて、その國の守護の本間山城入道の手で牢へ入れられることになつたのは去年の夏のことでした。中納言の北の方（奥方）は、一人子の阿新と、ただ一人だけ殘つた家來とを連れて、京都の嵯峨野の、仁和寺に近い、さみしいところへ移つて、隱れて住んでゐました。その時阿新はまだ十二の少年でした。

北の方も阿新も、中納言のことばかり思ひとほしてゐました。何うされることであらうか。もう一度御無事なお顏を見られるであらうか、とばかり思つて、そして御無事なやうにと、神佛に祈願をしつづけてゐました。

中納言の御身については、何事も分りませんでした。ところが此頃になつて、たしかな噂を聞きました。それは關東の評定で、中納言は近いうちに殺されてしまふといふことです。

北の方は泣き伏してしまひました。だが、今年は十三になつた阿新の顏は、それを聞くと一しよに、急に引き締まつて來ました。そして、眼を据ゑてぢつと一方を見詰めて、しばらくは身動きもしずにゐました。

『お母樣、私はお父樣の最後の御樣子を見にまゐります。事に寄つたら、冥途のお供もしようと思ひます。』

阿新が思ひこんだ口調でさう云ひますと、北の方は涙に濡れた顏をあげて、我が子の、まだ幼な顏の殘つてゐる顏をしげしげと見ました。

『お前が、お父樣のところへなど行かれるものですか。佐渡とかいふところは、容易には行かれない、遠い遠い島ださうです。何うしてお前に行かれるものですか。それに、お前にまで若しものことがあるやうだと、私は生きてゐる氣などしません。それこそ思ひとまつて下さい。』

『いえいえ、何うあつても行きます。何うでもお父樣のところへ行かれないなら、私は川へでも何でも身を投げて死んでしまひます。』

阿新の樣子ははげしくて、ほんたうにそんなこともしかねないやうに見えました。北の方はあきらめました。

『それほどまでに思ふなら行らつしやい。あの家來を供につけてやりませう。』と、いひました。

阿新は、一人だけ殘つてゐた家來を供に連れ、草

鞋を穿き菅笠をかぶつて、遠い、遠いときく佐渡の島を當てに出懸けました。

二

京都から佐渡へ行くには、その頃は、先づ越前の敦賀まで行き、そこから船で日本海を渡るのでした。阿新は敦賀へ行くまでに、もう十日餘りも懸りました。敦賀からは、ちやうど商船の出るのがあつたので、それへ乘込みました。

この旅のうち、阿新の眼の前には、去年別れた時の父の中納言の顏が、ぞりをりあらはれて來ました。そして又、父の中納言が、佐渡へ流されるやうになつたまでの事情が、もう一度思ひ出されて來るのでした。

その事情はみんな母親から聞いて知つたのです。天皇（後醍醐天皇）は、北條氏が臣下の身分でありながら、天下を我がものにしてゐるのをお憎しみになり

北條氏を御征伐して亡ぼしてしまはうとなさいました。天皇の御相談相手になつたのは、朝廷に人は多いが、第一は父の中納言で、それにつづいて四人の公卿があつたばかりでした。

御征伐には武士がいるが、天皇にはそれがなかつた。公卿の一人の藏人右少辨俊基は、美濃の國の武士で、武勇の評判の高い土岐頼貞と多治見國長との二人を仲間に入れました。この頼貞の親類に、土岐頼員といふ武士がありました。頼員の妻は、北條氏の重立つた家來の齋藤利行といふ人の娘でした。いよいよ御征伐も近くなつたといふ頃です。頼員は、戰場に出れば生きるか死ぬか分らない、この妻に默つて死ぬのは心殘りだと思ふところから、自分は何時死ぬか分らない、そのつもりでゐるやうにと話しました。妻はその譯を尋ねました。頼員は、隱しておかなければならないことだとは思つたが、口を止めて置けば大丈夫だらうと思つて、實は天皇の御征

伐のお身方をすることになつてゐると話しました。

妻は、それは大變だ、天皇がお負けになれば自分の夫が死ぬ、お勝ちになれば父親が死ぬと思ひましたので、天皇の方ではお支度のできない中に、父親に話してしまひました。北條氏は驚いて、頼貞と國長の二人の武士を攻め圍んで殺してしまひ、資朝と俊基の二人の公卿を捕へて關東へ送つてしまひました。その時、天皇は島流しに、二人の公卿は殺されるばかりになつたのを、罪を少し輕くして、島流しとしたのでした。それでもまだ天皇は御征伐の御心をお棄てにならないのが分つたので、今度はいよいよ天皇を島流しに、二人の公卿は殺してしまはうといふことになつたのです。

『お父樣は陛下の御爲に殺されるのだ。殺されるのは嘆くまい。ただお命のあるうちに、一と目でもお目に懸れば、それで私は本望だ。』と、阿新はもう一度心のうちで思ひました。

三

阿新は佐渡へ着いて、本間入道の館の前まで行きました。だが、それから先は何うしたらばいゝかと迷つて、ただその門の前に立つてゐるばかりでした。

すると館の内から一人の僧が出て來て、阿新に眼をとめました。

『あなたは、この館へ御用でもあつて立つてゐるのですか。何んな御用です。』と、尋ねました。

『私は日野中納言の子供です。父が近いうちに斬られると聞きましたので、せめて最後の樣子を見たいと思つて、はるばる京都から來たのです。』

さういふと阿新は、急に悲しい氣がしました。涙がぽろぽろとこぼれました。

僧はうなづいて、そして氣の毒さうに阿新の顔を見てゐましたが、『暫くお待ちなさい』と云つて、又館の内へ引つ返して行きました。間もなく出て來て

『入道に話しますと、おかはいさうだ、館へ御案内しろ、と申します。此方に入らつしやい。』といつて廣い館の内の、佛像の据ゑてある室へ連れ込みました。家來も附いて行きました。

本間入道は、阿新を客にして、大事にあつかつてくれました。

阿新はうれしいと思ひました。だがそれよりも、早く父親に逢はせてもらひたいと思ひました。明日にも斬られる父親だ、早く、早くとあせりました。だが、本間入道は逢へと云つてくれません。

『海山を遠く隔てゝゐた時も、戀ひしくてたまらなかつたが、今は一層戀ひしい、すぐそこにいらつしやるのだ。何うか早くお目に懸りたい。』

さう思つて阿新は泣いてばかりゐました。

『せめてお父樣のいらつしやる所でも見よう。』

阿新はさう思つて見に行きました。そこは館からは四五町ばかり離れた、竹の林の中にある牢でした。

牢のまはりには堀があつて、その中に塀がめぐらしてあつて、係の者の外は出入りのできないやうになつてゐます。

『情のない本間だ。父はかうした嚴重な牢の内に入れられてゐる身ではないか。子はこんな子どもだ。たとへ一しよに置いたからつて、何をしよう。それを逢はせもしないといふのは、何といふ情ないことだらう。』

阿新はさう思つて悲しがり、口惜しがりました。

四

阿新は、本間入道から、火葬にした白骨を渡されました。それは父の中納言の白骨でした。そして父は、五月二十九日に切られてしまつたといふことを聞かされました。

阿新は家來を呼んで、

『お前はこのお骨を持つて京都へ歸れ。そして高野

山の奥の院へをさめろ。私はもう少しのあひだ、ここに殘つてゐるから。』

家來を先へ歸してしまふと、阿新は本間入道に、

『病氣ですから、も少しのあひだ置いていただきます。』

と云つて、館の内にゐました。

五

阿新は晝間のうちは、病氣の風をして寢てゐましたが、夜になるとそつと起きて、本間入道と、その子の寢所は、何所だらうと搜してあるきました。そして四五晩搜すと、やうやう其所だと分りました。

阿新は、入道が、命のあるうちに父親に逢はせてくれなかつた、それが口惜してたまらないのです。その恨みを霽らす爲に、入道親子のうち一人でもいいから殺してやらう。そしたら何うせ此所から逃げることはできない。その時には、腹を切つて死なうときめてゐるのでした。

或る晩、雨が降り、風が吹いて、騷がしい晩がありました。

『ちやうどよい晩だ。』

阿新はさう思つて、本間入道の寢所へ忍び寄りました。そして見ると、その晩は入道はそこには寢てゐないのです。阿新はがつかりしました。

次ぎの室に灯が明るくともつてゐました。

『あれは入道の子だらう。せめてそれを討つてやらう。』

さう思つて覗いて見ると、それも子ではなくて、本間三郎といふもので、一人で寢てゐるのでした。これは父の中納言を切つた男でした。

『ままよ、此れでもいい。これも父の敵だ。入道を討つも同じだらう。』

阿新はさう思つて、すくに躍り込まうとしましたが、氣が附くと自分は刀といふものを持つてゐない。

切る時には相手の刀を奪つて切らうときめてゐた。刀を奪はない先に眼を覺まされてはまづい。それには灯が明る過ぎる。何うにかならないものか、と思案してゐました。

見ると、灯を慕つて集まつて來た蛾が、障子の上に一ぱいゐました。

『うまい。

と思つて阿新は障子を細目にあけました。蛾はそこから室の内へ入つて行きました。間もなく灯は蛾の羽で消されて、室は眞つ暗になつてしまひました。

阿新は本間三郎の枕元へ忍び寄つて、手さぐりに搜ると、太刀も脇差もあります。そして主人はよく寢入つてゐます。先づ脇差を取つて自分の腰に差し太刀を拔き拂つて、三郎の胸元のところへあてがひました。

『寢入つてゐる者を殺すのは、死人を切るも同じだ。起してにしよう。』

さう思つて阿新は、三郎のしてゐる枕を足で蹴とばしました。三郎が眼を覺ましたところを、あてがつてゐた太刀を、疊まで刺し透しました。そして次ぎの太刀で、喉笛を切つてしまひ、落ちついて館の裏の竹の林の中に隱れました。

三郎は胸元を刺された時に聲を立てたが、それを聞きつけたと見えて、大勢の番の武士が、どわ〳〵とその室へ集りました。そして騷ぎながら灯をつけました。

『ここに血の附いた足跡のある。小さい足だ。阿新殿のしたことだ。』

『堀は越せないし、木戸(門の入口)は出られないからその邊に隱れてゐるだらう。搜し出してぶち殺せ。』

その話も騷ぎも手に取る樣に阿新に聞えました。

その中に、松明をともした者が、その邊を、殘るところもなく、木の根元、草の中までも搜し出しました。

阿新は竹の林の中で、近づいて來る松明を見ながら、

『もう、とても逃げられない。人に殺されるくらゐなら自害しよう。』と思ひました。『待て、憎いと思ふ敵は殺した。今は何うかして此所を逃げて、父の志を繼いで陛下の御用をつとめよう。』

阿新はさう思つて、堀を飛び越さうかとしました。

堀は幅二丈、深さ一丈もあります。とても飛べさうにはありません。

『これを橋にしてやれ。』

さう思つたのは、堀ばたに高い竹があつて、先の方が水の上へ靡いてゐたからです。

阿新は竹の上へ登つて行きました。十三の身輕のからだは一番の先まで登れました。それを堀の方へしなはせると、からだは堀を越して、向うの土の上に輕く下りました。

六

『まだ夜深い。港の方へ行つて舟に乘らう。』

阿新はさう思つて、港と思ふ方へ逃げました。まだ港へ來ないうちに夜が明けてしまひました。阿新はそこにある麻畑の中へ屈んで隱れました。

そこへ百四五十人ばかりの者が群らがつて駈けて來ました。そしてそこにゐる者に、

『今ここを、十三ばかりの男の子は通らなかつたか。』

と、きいて、そして又向うの方へ駈けて行きました。

暗くなるまで阿新は麻畑の中にゐて、それから又港の方へ行きました。

そこへ、年寄の山伏が來ました。山伏は阿新を見て、

『何所から何所へ行くのですか。』

と尋ねました。その樣子が深切に見えたので、阿新は隱さずに譯を話しました。

『さうですか、それなら安心なさい。港には舟が澤山あります。それへ乘せて、越中か越後へ着けさせて上げますから。』

山伏は、阿新が勞れると、肩に乘せて歩きました。夜明けに港へ着くと、ただ一艘の船があるだけで、それが出かかつてゐました。

山伏は阿新と一しよに船に乘りました。船はすぐに出ました。そしてやゝ岸から遠ざかつた時、百五十人ほどの追手の者が來ました。

『その船をとめろ。返せ。』

と、追手はいひました。

船頭は聞えないやうな顏をして帆をあげました。帆船は風を得て走つて、その日の夕方には、越後の港へ着きました。

（をはり）

童謡

野口雨情選

（子供篇）

すゞめ

群馬　吉田勝子（尋四）

うめのこえだで
すゞめがね
なんとかかんとか
しやべつてる
わけのしれない
すゞめがね

うめの木　小えだで
しやべつてる

麥のたいそう

埼玉　石川ツネ（尋二）

麥のたいそう
上手だな
麥のぎようれつ
上手だね

川

埼玉　福田弘（尋四）

さらさら流れる
ほしかはに
くさのかげが
ゆるいでる
風がふくたび

ゆるいでる
木の葉が一まい
とんで來た

お日暮

千葉　大川政雄（尋六）

かへろかへろ
ちつちやがなくから
もうかへろ
草葉で花つみ
やつてゐた
子供がみんなで
かへつてく
長がく　長がく
みんなのかげが
たんぼの中まで
つゞいてた

お馬と影

福岡　宮本一美（尋五）

お馬がかける
かつぽかつぽ
かつぽつぽ
お馬の黑い
影さんもかける
お馬の影さん
黑い影かける
かつぽかつぽ
かつぽつぽ

田舍みち

山形　佐藤繁祠（十六才）

田舍の一本みち
草履みち
あさづきつみに
行かないか
田舍の一本みち
草履みち
土手のふきのと
伸びました
一日遊んで
日がくれて
歸りの道が
しめります

舟の月

山口　末松安一郎（尋四）

舟の月
三日月さんの
舟の月
だれが乘つてる
星の赤ちやん
のつてゐる
星の赤ちやんの
お守舟

夕日

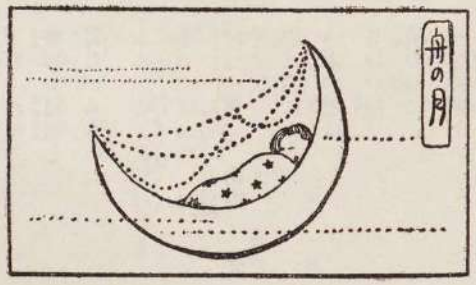
名古屋　廣瀨基

ゆう日が
しずむよ
みなでて
をがめ
翌日
おいらの
日曜日

りんご

川崎　原田善郎（十二才）

りんごのお家は
まるいお家



赤いペンキを
ぬりたてゝ
お屋根に一本
煙突があるだけで
どこにも
門がありません

わら家

福岡　森山勝次（尋五）

夕暮
わら家は
紫のきもの
きてゐるよ

ふくろ

青森　戸館かつ（尋五）

小鳥がみんなねんねして
お山はしづかな夜でした
ふくろの小父さん
夜まはり番

ほう〳〵と
ないてゐる
大きなお目
キヨロ〳〵と
あたりを見ては
ほう〳〵と
ふくろの小父さん
夜まはり番

子ばと

埼玉　谷部たけ（尋二）

子ばと
どこへ行く
日がくれる
お寺のやねに
とんでいつて
かあちやんに
だかつて
ねんねする

しやくり

東京　永井重雄（尋六）

しやつくりしやつくり
こまつたな
ほらまたしやつくり
こまつたな
水をおのみよ
ひとくちに
ほらまたしやつくり
こまつたな

釣瓶

茨城　石川亮三郎（十五才）

井戸の釣瓶は
朝からないた
子供二人に
上げられてなき
下げられてなき
晝のお月様を
見ながらないた

のはらの一本の道

埼玉　山内武（尋四）

のはらにある
一本の道は
さむい道
道の向に
一本の木が
あつた。
その木に

すゞめか
一ばいだ。

運動會

豊橋　澤田利男（十四才）

眞青い空へ
花火がひろがつた
運動場に
カン〳〵日が照つた
子供が走る
赤い旗と白い旗が
おどつとる

夜ふけ

朝鮮　中村數枝

靜かな夜ふけの
家の中
ひとりで眼覺めて
聞いてれば
茶の室で鈍の
鈴の音
母さん夜なべの
鈴の音

カラ豆（落花生）

山梨　坂本としえ（尋四）

店屋の中の
から豆箱で
から〳〵から豆
音がする
店屋のおばんとが
一合ますで
一ッはかつては
から〳〵から
二ッはかつては
から〳〵から

キヨウカイ

小樽　山本クレバ（一年）

アルトコニ小サナ小サナ
キヨウカイガアツタトサ
中ニハ　タカラガ
ザツクザク
ダレガイツテモ
モラヘルヤウニ
オサラニタカラガ
ザツクザク

子牛

神奈川　竹内ナカ（尋三）

子牛がないた
かはいゝ子牛で目が丸い
桶をたふして
そつぽむいて
子牛がないた

雀

高一　井本茂

寒い寒い冬の日
雀はさむそに
枝わたり
木から木へと枝わたり
風にさらされ
枝わたり

山道

高一　井本茂

山道小道は
遠い道
どこまでいつても
道ばかり
山道小道は
細い道
どこまでいつても
曲り道

お星さん

福岡　山本慶明（尋五）

出た〳〵お星さん
お寺の上に
又出たお星さん
お山の上に
かぞへりや
かぞへる程
お星さん出るよ

綴方

齋藤佐次郎選

おなべの中（賞）

大連日本橋尋常小學校四女
竹内貞子

お母さんが寒所の方へ行かれた。そして寒所の戸をぴしやーんとしめてしまつた。

私は『又かきでもたべるのではないか』と思つたので、戸のすき間からそつとのぞいてみた。

お母さんは、おなべの中に水を一ぱい入れて、なべのふたをかぶせた。そして戸だなの中から眞赤なかきを三つ取り出した。そしてそれを握つて、こちらの方へ來るやうだ。私は、驚いて、すぐまげてゐた膝をのばし、お便所の方をむいた。

ガラ〳〵〳〵、お母さんが出ていらつしやつた。私はあの眞赤なかきがほしくてたまらない。

『一つちようだい。』

『ばか言ひなさい。これはお父さんにあげるのよ。』と言つて、通りすぎてしまつた。

私はほしくてたまらない。しぶ〳〵ながら寒所へ入つた。そして、おなべのふたを取つて見ると、いりこがぐた〳〵にえるお水のまわりを、ぐる〳〵ぐる〳〵まわつて居る。

面白い。おなべか兵隊さんたちのお庭でいりこの兵隊がぐた〳〵とラッパをふきながら、まはつてゐる。いりこの兵隊はきりつが正しくない。前の方は四れつだが、後の方は五れつであるかと思ふと、其の後は六れつになつたり、三れつになつたり、七れつになつたりして、れつがぐちやぐちやだ。

ふと見ると、一ばん前に太つたいりこが一匹居る。そうすると、これは此のいりこの兵隊たちの大將かもわからん。大將だつたら、すいぶん惡い大將だ。こんなにれつをぐしやー〳〵にさしといたら、敵に負けるぢやないの。

にくらしくなつたので、其の大將をつまみ上げてバクリと口の中に入れた。あぢもすつぽんもない。かたいいりこの目が、はとはの間にはさまつた。

『あいたつ。』私は思はずはき出した。

『お前何して居るの。』と、頭の上でどなられた。

『へつ。』私はびつくりして、上を見た。お母さんがさむらいのやうな顔をして、つゝ立つて居る。すこしこわくなつた。

『お前何して居るの。いりこなんかたべてそんなにおいしいの。ばかれ。』と、お母さんは少しばからしくなつたやうに言はれた。

『だつて、あの……あの……いゝ、いりこいりこが面白いんだもの。』

妹（賞）

東京府三宅島神着校尋六
栗原壽

『こつちで見るやうに持つて來いよ。』

『おゝ』末の妹は、子供アサヒを二三册かゝえて來た。今年四ツになつたばかりの妹は、母になにやら聞いてゐたのであつた。床の中へ入つて見初めた。

『愛子こりや何だ』と、赤く書いてある柿の上へ、人さし指をのせた。

『かきだよ』

『これはよ』

『バアナー』と、まはらない口で、バナヽを云ふ。

『これは梨だいな』

『うん』

『はい、はぐれよ』

『……』妹は、だまつて一枚めくつた。

『オオー』と思はず聲を上げた。

『これは、父ちやんだつて、母ちやんは云つけど』

『これはよ』

『これはアンポー』と、赤坊のことを云ふ。

『こんだ、たこ入道だぞ、いゝか』と私が云ふと、妹は、

『おら、りうぐうへ行つた時見たけども、おつかなかあ、なかつけど』とほゝえんだ。

『えー龍宮へ行つた？——さうしたら、何が居たつけよ』

『舟がオツバイ居たつけ』

『乙姫は居たつけか』

『うん、れえちやんみたいだつけや』

僕は面白くなつたので、たほ聞いた。

『なんで行つたよ』

『ブン〳〵うなる飛行機で』

『乙姫に、なにをもらつたよ』

『櫻ンボ、箱でオツバイ』

『それをどうしたよ』

『あのな、母ちやんに半分やつて、半分おれが食つちやつた』と口を開けて『アーン』

『はい、れるべい』

向の間で赤坊をねかしてゐた母は、クスクス笑つてゐる。

母のかへり（賞）

大連日本橋小學校四女
入江治江

『上田さん、さよなら』と言つて、私たちはわかれた。とぼ〳〵と歩ゆんでゐた。すると向ふに、しいちやんが見へた。其のそばに、赤んぼをだいた十八位の人が、しいちやんとしきりに話をしてゐた。『もしや内のれえさんじやないか。』と、思つて、いつさんにかけ出した。だがよく走れない。おしりの所でかばんがさかんにどた〳〵してるのですもの。やうやくの事でついた。やつぱりれえさんであつた。『れえさん』と言つて、しいちやんと、れえさんの間を二三べんまわつた。すると、だかれてた信子ちやんが、『ええ、ふふふ。』と言つて、笑つた。『信子ちやん』と言つて、まる〳〵と太つた小さな手をにぎつてふると、信子は顔をかくした。かわいゝ〳〵と思つて、ひよつと内の方をながめると、又いつさんにかけだした。戸をあけて『たゞ今』と言つてかばんをほうり出し、かた一方の靴をぬぎもう一方の靴のひもをほどいて、上つて行かうとすると、足にくつゝいて、たゝみの上にあがつたので、又おろして上つて來たら、お母さんやボーイが聲をあげて笑つた

ので、私も笑つた。久しぶりにお母さんの顔を見た。お母さんはやつぱりやさしさうな顔をしていらつしやる。お母さんが『はこちやんも、よくべんきやうをしてゐるだらうと思つたから、れえさんとお母さんがすゞ虫のお人形を買つてきたよ。』とおつしやつて、立ち上つて、とだなをあけて一ツのきれいな箱を出して來た。『ほれ見てごらん。……さうさう、まだあつた。りぼんを買つて來たよ。ほれ』と又出して來た。私はりぼんと人形と二ツをもつて、家中の者に見せた。するとみなが『いゝれ』といふので、うれしかつた。さうして、れえさんのをなほしておいて、私のをかざつた。外に出ると、學校から、かへつて來るれえさんが見へたので『れえさんうれしいよ。お母さんがかへつてきたよ。』といつたら、れえさんもとんで[illegible]かへつた。

お池の氷

神奈川縣高座郡大野校尋四

小川歌子

或る寒い朝、私はいつもよりはやく起きて、戸を明けてお池のそばにゆくと、お池にたいさうあつい氷がはつて居ました。私は金魚がかはいさうに思はれました。こんなあつい氷では氷りついてしまひはしなからうかと、すぐにたけんぼうを持つて來てお池の氷を力一ぱいとん〳〵とたゝきましたら、氷はみし〳〵と音をたてゝだん〳〵にわれて行きました。一度たゝく度に、一かけづつ小さな氷がはなれて行きました。これにおどろいたのか、お池の金魚たちはおひつこしでもはじまつたやうに、あつちへいつたり、こつちへにげたり、音のする度にびん〳〵とはねまわつてゐました。氷つてしまつては可哀さうに、と思つてやつたのが、かへつて金魚たちを驚かせてしまつたので、氣の毒になりました。

ぼうやの爪

東京市本郷區彌生町本郷校尋五

姓名不明

『ぼうや、お爪を切つてあげるから、お手々を出しなさい』と、私ははさみをもつたまゝ言ひました。

ぼうやは、無言のまゝ差出しました。まあ、そのつめのやはらかい事。チョキ〳〵と切れてゆきます。ほんのりと、もゝいろにそまつてゐて、見とれるくらゐです。家中で一番きれいなかはいゝ爪だと、お父様はおつしやいました。

『お爪を切つてあげるわよ』と言ふと、すぐにお手々を出します。

ところが此の頃は、ちつとも爪を切らせないで、大變でないていやがるのですから、今は、きたない爪をしてゐるのです。いつになつたら昔の爪が見られるのかと思ふと、自分の爪の樣にかなしくなります。

力で勝たなくても

神奈川縣高座郡大野校高二

大谷嘉一

前週の火曜日の事でした。

前の日に引いて來た車を、弘司さんと二人で、一臺づつひいて行つた。通りに出たら、弘司さんが『オートバイをして行かうか』と言ふので、『おう』と言つて、二人でオートバイを作つた。先づ、一臺を前に置いて、心棒と荷をつける所との間に、片方の車の引く所をつゝこんで、さうして弘司さんが乘つてかじ取り、私が後からおして行つた。

丁度其の時、前の方を綾さんと駿ちやんが歩いて居ました。私達は、忽ちそれに追ひついてしまつた。そして、殘さうとすると、駿ちやんはひよいと向いて『乘せろい』と言つて、車につかまつた。

『駄目よ、引かないくせに！』と私が言ひかへすと、駿ちやんは、まみやをびりつと動かせて、『何い？乘せない？生意氣言ふか』と言つて、私のあごをつついた。

私は癪かつたので、『いてえよう』と言ふと、『まだ問ふか、此の野郎』と言つて、又ついた。

私はこれまで、毎日のやうに學校で、いぢめられて居たが、がまんして居た。そして私は毎日い、折を待つて居たのである。

だから、今日こそ！と思ふと、よけいにむら〳〵として來て、私は思はず駿ちやんの横つらをなぐりつけました。

『うゝむ、やるか。よし、やるべえ』と駿ちやんは言ひながら、鞄を下ろした。

私は用心しながら、鞄を下ろすのを待つて居た。駿ちやんが鞄を下すと、直ぐ飛びかゝつた。すると『何をこの野郎』と言ひながら、駿ちやんは私を振り放さうとしました。私は振り放させまいとして、暫くの間、とつくんだまゝ、もみ合ひました。

弘司さんは、車の上から『よせよう、嘉ちやん。よせよう、駿ちやん、よせつてば』と、どなつてゐましたが、私達はそんな事にはおかまひなく、もみ合つてゐました。

其の内私は振り放されて、よろよろつと前にのめりました。そこを後からぐうんと押されたので、私はよつんばいにころがつてしまひました。

私はくやしくてたまらず、今度は足にしがみつきました。だが、いくらやつても勝てる筈がない。

私はだん〳〵と、それが、わかつて來たので、喧嘩は止めてしまひました。

私は駿ちやんに負けたのです。けれど、其の時には、くやしい、くやしいと思ふ心なんか念になくなつて、力で勝たなくつたつて、勝つ事が出來ると言ふ事が、びーんと心にひびきました。

火事

千葉縣長生郡茂原校尋五

吉野德子

『ヂャン〳〵〳〵』『ソレツ火事だ〳〵』『火事場は何所だアツ』『アレツ〳〵煙が見えるぞッ』

その時私達は、日當りのよい緣先でまゝごとをして居た。表へ下駄をびんちよにつつかけて飛び出した。高石の所では、かご屋のおぢさんが、一生懸命たゝく半鐘の音。皆は煙を目がけて、自轉車でとばすやら、足袋はだしでどん〳〵かけて行くやら大さはぎ。家のおぢさんや、姉さんお母さんにどん〳〵倉の後の方へ行つたので、又私は引返つた。おぢさんは『土橋の近所だナ』とせいのばしをして言つた。母も『何でも其のけんとうですれ、八幡樣の附近ですれえ』と青くなつてた。『アツ火の子〳〵。よう』と妹は泣きさうになつてる。母は妹の頭をなぜ〳〵『何でもないのれ、家ぢあな

いんだから大丈夫よ』となぐさめてた。氣がうか〳〵してゝ、そつちへ行つたり、こつちへ行つたり、うろ〳〵してゐる。表の辻へ、茂ちやんや姉さんや保ちやん達が居たから行つて見た。火はいゝ勢にもえ立つ。時々木と木の間から眞赤な〳〵火がボウボウともえ上るのがよく見える。私の胸にはたゞ何處が燒けてゐるんだか早く聞きたくてたまらない。家の方を見たら、鈴木さんのおばさんが、母や姉等と話合つてた。おばさんは足袋もはかず、羽織も着ずに、ぶるぶるして居る。きつと家かと思つて來てくれたんだらうと思つて、又も火の手を見てた。あたりを見ると灰が落ちて來る。わらのたばになつたちくや、むしろの小さくざき〳〵になつたのなどが、木の葉のやうに散つて來た。時が丁度お寢時分なので、そゝう火だらうと想像した。半鐘は先とかはらず、すりばんがヂャン〳〵〳〵鳴つて居る。よつぽど火事場へ行つて見ようとしたが、家が氣になるので行かれない。又家へ引返して裏へかけて行つて見ると、向ふから三四人若い人達が自轉車で歸つて來た。丁度家の畑の所で、何所かの年よりがかけて來て、『何所ですか』と尋ねたら、『高師の屋根屋だい』『屋根屋のとらさんだよ』と言つたまゝ、すうといつてしまつた。私は一散に母の處へかけて行つて、『よう〳〵、おつ母さん。屋根とらの家だつてさあ』と言つた。母はうなづいて、『こまつたねえ、屋根とらぢあナア……』と力を落して言つた所へ、又保ちやんが走つて來て、『よう〳〵屋根とらだつちよう。おめえあんかやつだつべえ』ゝ姉さんだけあつて言つた。鈴木さんのおばさんが、『其の屋根とらさんて方は、お宅の何かにあたるんですか』と、さも心配さうにたづねた。母は『えゝ……しんせきなんですよ。おやぢがのんべで、其の上おつかがしだらがないんですよ』と、こぼしてた。又角の所へ行つて見たら、火は消えたやうだつた。かごやのおぢさんは手をやすめて向ふを見てる。又母やおばさんの居る所へ行つて、『もう火は消えたやうだよ』するとおばさんは、『それぢあ今日はおいとま致ます』とことはつて、出て行つた。半鐘はやんで家に御飯を食べに入つた鐵びんの湯がにたつてゐるので、妙な音をたてゝるのが、半鐘の音にきこえて、中の間が暗いのでさつぱりわからない。物が赤や青に見えて困つた。お茶をさそうとしたが、きみ惡くて歩けない。目が見えないからである。火事を見に行つた兄も歸つて、皆お膳についた。兄さんが、女達が頭をもぢや〳〵にしてふるえてることや、近所の人のあわてゝるやうなどのまねをして大變面白かつた。妹がキャッ〳〵笑つてると『ほんとよれ、私達はかうして笑つてるけれど、其の時はあはてるよ』と母が言つた。其の内に家の火事の話も出て來て、色々話をした。

飴賣りのおぢいさん

東京府北多摩郡清瀬村上清戸　澁谷正治

飴賣りぢいさんの太鼓がなる。『デヽンデンデン』長閑に流れて行く。子供が三人かけて來て、一錢銅貨を三つおぢいさんにわたした。おぢいさんは、ニコ〳〵笑ひながら、上手に飴を木の棒に卷きつけて、二人の子供にもたせた。丁度三人目の子供に持たせやうとした時、今さで後の足もとでぢやれてゐたボチが、何を思つたか、突然『ワン〳〵ワン〳〵』とおぢいさんに飛びかゝつた。おぢいさんはびつくりして、子供にもたせやうとしてゐた飴を、土の上に落してしまひました。三人の子供は一度にどつと笑つた。おぢいさんは苦笑ひしながら、ボチの頭をそつとたゝいた。そして又飴を棒に卷いて子供にもたせました。ボチにもう吠えつくのもあきたといふ樣な顏をして、今おぢいさんの落した飴をペロ〳〵なめてゐる。あたゝかい靜かな初春の眞晝頃でありました。

私の百人一首

仙臺市土樋二四五　阿部和子（十五才）

『百人首を買つてちやうだい。』

私はお父樣に幾度かうお願したことだらう。けれど、その度にお父樣は『むづかしい歌があるから、和ちやん達にわからない所があるだらう。』

とおつしやつた。

私はどうしても百人首がほしい。そこでお母さんにお願ひした。お母樣も、始のうちはお父樣と同じやうなことを言つていらしつたが、あんまりしつゝこく言ふので、『そんなら、和ちやんにもわかるやうな歌だけえちんで、書いて上げませう。』と、おつしやつた。私はどんなに喜んだだらう。まるで夢中になつて、

『ほんとう。』

と聞き返した。

『えゝ。』

お母樣が笑ひながらかうおつしやつた時、私はもうとび上りたいやうな氣がした。

それも、今から思へば、一週間も前のことである。それからお暇のある毎に、お母樣からかいて頂いた六七十枚の歌留多が、今私の目の前にある。私は歌留多を抱きしめたいやうな氣がする。私の心は、喜びで滿ち滿ちてゐる。けれど、その喜びは、書いて上げさせうと言はれた時のとび上り度いやうな喜びとちがつて、まへまへからの希望が、やうやく成し遂げられた時の靜かな、それでゐてみちあふれるやうな喜びである。歌留多の中には、

さびしさに宿を立出でて眺むれば
何處も同じ秋の夕暮

夕されば、門田のいなば音づれて
蘆のまろやに秋風ぞ吹く

など、私の大好きな歌もある。また、學校の讀本にあつたり、お母樣から前にきゝはつたりした、なつかしい歌もある。

あゝ、私は本當に嬉しい。何と言つてお母樣に感謝したらいゝかわからない。お友達がもつてゐらつしやる歌留多より、すつと〳〵尊とい、心のこもつた歌留多を私はもつてゐる。もう、お友達を羨やむ心なんかどこかへ消えてしまつた。嬉しい。本當に私の心は、嬉しさで一ぱいだ。

ふと氣がつくと、もう暗くなりかけてゐる。私は、

『今夜とつて見ませうれ。』と、笑ひながらおしやつたお母樣の言葉を思ひだして、百人首をとつて立ち上つた。

一茶と童心句に就いて

藤田健次

童心を通してみたる物の生活は自然は、最も律動的でなければならない。然るに近代獄はれてゐる詩にしても、俳句にしても、餘りに複雑な感能から生れた技巧以上の所産であることである。これは素朴を失つた近代人の慾ましい生活様式が、所謂文明といふ社會制度に煩はされてゐるからであらうが、一面に於て誠ふこと既に怠惰な特權階級の人たちの玩具として作られてゐるからではなからうか。それら童心を失つた現在の俳句と共に思ひ出すのは彼の一茶である。

鳴く猫に赤ん目をして手鞠哉　一茶

鳥打や子がはひ歩く土蜘蛛　同

露の玉つまんでみたる童かな　同

これ等の句は、實に子供の無邪氣なる主觀的情美を客觀的事物に借つて言ひ表したものである。一茶は常にかうした幼子の遊ぶ一つ一つにさへ驚喜の心と觀察の眼を深めて子供の精神をそのまゝ具體化してゐるところにかれの玉のごとき純眞さがあると思ふ。それが律動的にして簡素であるばかりでなく驅逸にして人生の機微をよく捉へてゐるのを見ても、彼は如何に無垢で飾りない心の持主であつたかを感知することが出來ると思ふ。

持たすれば雛たちなる子供哉　一茶

やれ打つな蠅が手をする足をする　同

この句を見ても、實際、彼は天眞無垢な嬰兒そのものゝ心を持つて一生を終始してゐた。それを思ふと、まつたく心から感激せずには居られない。彼は性來天眞にして童心的詩人であつたからでもあるがそれが現在の魂を失つた俳句と、可なり隔たりがあるやうである。技巧や調律の差でなくて、兒童の詩的趣味の涵養上の差である。一茶の句は、どれだけ子供たちの慰藉になるか、子供たちの生活をどれだけ幸福にしてゐるかと云ふことは、單に童心より發した純然たる藝術としての童心句であると云ふばかりではなく、彼の句は周密と愛ある觀照、その確かな描寫や調律は極めて自然に吐露してゐるのを見ても、世の所謂俳人たちの煩雑な娯樂以上の一種の玩具的に作られた作よりは、どれだけ光り輝いてゐるか知れない。それで今度、野口雨情氏に依つて新しく提唱された『童心句』であるが、それは俳句の委意をもつて現在の童謡を十七音字の詩形としての童心句即ち童心の世界にのみ宿るところの子供たち本然の生活を純眞に誘導し暗示を與へる事に於ての貢獻である。

勿論その一言一句は直に子供の精神を融和するに最も輕便な律動的のものである。從つてその主張する『童心句』は……

童心句とは童心に映じた事物を俳句の樣式による十七音字を基調として表現した詩である。但しこの樣式の基調を無視すれば童心句以外の作品で、それが歌謡の樣式であれば童謡である……

と野口雨情氏は云つてゐられるやうに、童心句は童心藝術として尤も子供の生活に近い單純な言語教育であると共に、又一面には幼子の心にふりそゝぐ眞實の精神教化としてよき指標を與へるからである。從來情操涵冶の名目の下に行はれて來た訓話、修身等がやゝともすれば理窟にのみ流れて、却つて子供の自然にして本來の個性をも無理に鑄型の中にはめやうとした風があつた。で子供をさうした中から解放するには、どうしても彼等の個性を自然のまゝに成長させ、發揮させ表現せしめる事が肝要である。この意味からしても童心句の提唱は兒童教育上大なる使命を有してゐると思ふ。機智や表面の美にのみ誤り易い兒童のよい生活の糧としても童心句は童謡と共に最も兒童に適合した詩形である。今その童心句を二三例擧してみやう。

どんぐりのねん〳〵ころり〳〵哉　一茶

鳥追の人や田甫でホーイホイ　雨情

風ぐるまはして走る辻の先　露月

若草やおんぶをすれば子の眠る　健次

これ等の句は童心句としての處女作である。そして又在來の俳句と比較して餘りに幼稚である。しかし藝術は幼稚で簡素なるが故に藝術としての尊さはあるのである。この子供らしい句の力と眞率さはどれだけ私たちを淨化してくれるか知れない。こゝに於て童心句は童心藝術として最も調子の高いものであることを主張すると共に、わが教育界に於ても、この新機運の開發に、いさゝかでも兒童と童心句の接觸に就て深甚なる考察を經られむことを望むものである。（完）

童謡斷片語

國田彌之輔

童心の芽を一日一日と大きく成長さして童謡の美しい花をさかせ。

○

本能を最も善い方によく生かす人ほよい童謡が生れる。

○

童謡には謎けがほしい
樂園の世界がほしい

○

「心の平和」を中心にして童謡創作せば永遠性が生れる。

○

童心を失つた人は自然から與えられた色々のものを受入れの出來ない不幸な人である。

童謡研究欄への寄稿を乞ふ

本號より、童謡研究欄を設けて、童謡に關する權威ある評論、感想等を毎號募集して掲載することにいたしました。かうした企ては、童謡道の當然なすべきことであり一般童謡愛好者諸君にも大なる參考ともならうと思はれます。欄へ寄稿の原稿は、なるべく簡明に責任をもつてお書き下さることなのぞみます。ことに、童謡と教育との一致研究に關した、實際問題のそれは最も歓迎するところであります。尤も原稿の取捨は私へ一任して下さることを願ひます。（野口雨情）

童謡と童心句

野口雨情

童謡と童心句とは姉妹文藝である。童謡の表現冗長は、童心句によつておぎなふことが出來る。又、童心句の單純化された表現が、兒童の理解力では不可能なときは、童謡表現の樣式を用ひて、それをおぎなつて行くことが出來る。

なぜなれば、童謡と童心句とは、同じ童心の心境に立脚して、表現樣式の相違があるだけだからである。尤も、童謡との姉妹文藝に童話があるが、童話と童謡との關係よりも、童心句と童謡との關係の方が、同じ韻文である點から、一層接觸が深いのである。かうした意味に於ても童謡と童心句とは唯一の姉妹文藝であるといふことが出來るのである。

童話の選後に

齋藤佐次郎

▽この頃は、どうした事か餘りよい作が集りません。今月などもさうです。推薦するに足りるやうな名作をどし〳〵投稿していたゞきたいと思ひます。

▽それで今月は、數多くの作の中から五篇だけを選び出しました。『警察へ行つたピー』(大島智惠子氏)『五兵衛さんと狐』(柿澤幹雄氏作)『なかよしに』(伊藤三千夫氏作)『病氣の小供のお話』(中村連生氏作)『蛙のわからない事』(久保田晴藏氏作)

▽以上の五篇の中から『警察へ行つたピー』を推薦しましたが、それは何時もの推薦作から見ると、少し見劣りがします。しかし眞面目な作風がいゝと思ひます。

▽『五兵衛さんと狐』は少しあつけない感じがします。狐のお話も、チトあきて來ました。

▽『なかよし』は無邪氣な作で、童心の境地がうかゞへるもので、面白いところがあります。

▽『病氣の小供のお話』『蛙のわからない事』二篇とも子供篇に入るべきものですが、なか〳〵上出來です。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

一三二

○大連の日本橋小學校の作品は、皆紋が揃つて光つてゐます。これは、一つは指導者がいゝからでありませう。三篇とも載せたかつたのでしたが、紙面の都合上、割愛しました。

○竹内貞子さんの『おなべの中』——キビ〳〵とした筆で、よくその場の光景を描きだしてゐます。茶目で、へうきんな貞子さんの姿が、眼に見えるやうです。

○入賞第二の『妹』——前の作と同樣、むだのない、ひきしまつた作ですが、少しむだが無さ過ぎて、了解に苦しむ所があるので、筆を加へて置きました。勝當六年の作としては、平凡なものですが、妹さんの云ふ事が面白いので、つい讀者を引張つて行きます。つまり、材料が優れてゐるからです。優れた材料をつかむ事、これは、文を書く上に於て、とくなやりかたです。

○入江治子さんの『母のかへり』——第一番の『お鍋の中』とは、又違つた味があります。前半が殊によく書けてゐます。『ねえさんの廻りを二三べん廻つた——』と云ふところもいゝし、『かわいゝ〳〵』と思つて、ひよつと内の方をながめると、又いつさんに駆けだした——』のあたりは、なんでもない事のやうであつて、中々かうは書けません。純眞な子供であつてこそ、はじめて意識なしに生れ得るものです。この作で殘念な事は、後半に至つて、色々なお土産を貰つて喜ぶあたりが、ひどく力拔けがしてゐる點です。

○小川歌子さんの『お池の氷』は、作者のやさしい心持ちがよく現はれてゐます。

編輯室より

(記者)

▽春になりましたな。櫻の咲くのもさう遠い事でもありますまい。今年は冬がつらかつたゞけに、春のおとづれが嬉しい氣がします。皆さんは、いよ〳〵お元氣の事と思ひます。編輯室の一同も大元氣です。

▽四月號の岩岡先生のお描きになつた表紙は大評判でした。さすがは岩岡先生の作だけあると大層な評判でありました。五月號も引續き岩岡先生にお願ひしましたが、ます〳〵美しい、面白い表紙です。

▽三島霜川先生の『大石主殺』と小島政二郎先生の『暗闇城』の二大長篇とはます〳〵佳境に入り讀者諸君からやんやといふ喝采を博して來ました。毀を追つて、ます〳〵面白くなります。

▽久米敏一先生の『漂流二百三十日』は近く完結します。原作は『十五少年漂流記』の作者と同じだけに流石はと思はせるものですこの物語は、原作通りに大册の本となつて近く本社から發行になります。(S記者)

▽こんどいよ〳〵、野口先生が二十日間の豫定で、臺灣へ童謡行脚に出掛けることにきまりました。去年の秋は滿洲、今年の春は臺灣と全く先生も、童謡普及運動の爲には席の暖まる暇もない有樣です。臺灣が濟んで仕舞へば完全に、日本本土は勿論・領土全部に先生の足跡が印せられたわけです。この號の出る頃には、先生の姿は椰子の葉茂る常夏の國に見出されるでせう。恐らく臺灣の童謡界にとつて、又とない機會だと思ひます。特に臺灣の誌友、愛讀者の皆さんに吉報をもたらします。(T記者)

▽立石先生の『恐れを知らぬ人』は如何でした?この作を讀んで、ある感激を覺えない人はないでせう。私は、この御原稿を立石先生のお宅へ戴きに行つた者ですが、その歸り途に、省線の電車の中で拜見致しました。ところが、思はず身が逆入つてしまつて、もう少しで電車を乘り過ごすところでした。氣が附いて慌てゝ、飛び降りましたら、ヒヨロ〳〵とよろけて、倒れさうになりました。プラットホームの人々は、皆んな此方を見て笑つてゐます。私は眞赤になつて、いえ、練瓦色になつて、コソ〳〵と逃げるやうに外へ飛び出しました。

▽この時、もし私が、プラットホームから線路へ轉げ落ちて、電車に轢かれたとしたらどうでせう。——兩手は肱のところで、ブツツリと斷ち切られてゐる——そして、その手の先には、立石先生の原稿をしゃかりと握つてゐる。——そこへ、驛員を始め多勢の者がバラ〳〵と集まつてくる——お巡りさんも來る——コモを持つてくる奴もある——『どうしたんだ〳〵』『飛び込んだのか?』『さうぢやない、降り損なつたのだ』『馬鹿だな、大きななりをして——』『手になんだか持つてるぢやないか……』

▽そこで人々は、私の手から原稿を取つて開いて見る——一番先に眼につく文字は、『恐れを知らぬ人——』

▽人々は互ひに顔を見合せて、『なるほど、此奴は恐れを知らぬ男に違ひない。』——

▽なんだか妙な話を書いて、自分ながら胸が惡くなりましたが、兎に角、私はそれほどこの作に心を惹かれたのです(Y・N生)

▽私は、金の星社の給仕です。今は給仕でも、ゆく〳〵は先生になるつもりです。私は毎日皆さんから集まつてくる原稿の區別をしてゐます。その時、私は記者先生の眼を掠めて、そつと皆さんの原稿を拜見することがあります。そして、『此奴はいゝな、僕ならかう云ふのを入選にするんだがな』と思つた時には、その題と作者の名を手帳に記しておきます。これが、私の何よりもの樂しみであります。(春雄)

新らしく出た本

○未明童話集(1)（裝幀武井武雄　挿畫初山滋）

小川未明氏の童話には既に定評があり、此處で喋々する迄もない。童話と云ふもの、藝術的價値を、他の一般の劇や小說と同樣の地位まで引上げたのは、未明氏の賜物であらう。武井氏と初山氏の裝幀挿畫は、未明氏の作品とピッタリ氣分がとけあつて豐かな藝術境を展開してゐる。未明氏は、この本の序文に『世のすべての子供達、新らしい考へを持たれる學校の先生方、並びに家庭に於けるお母さん方に、この童話集を讀んでいたゞきたい』と、云つてならるる。菊判四七一頁、挿畫三色版他多數入、定價參圓、日本橋通三丁目丸善株式會社）

○世界名篇物語叢書　第十四編　愛犬物語

（小島政二郎著、高坂元三裝幀）

金の星に一ヶ年に亘つて連載され、滿天下の少年少女の血を湧かしめた小島政二郎氏の『愛犬物語』が、いよ〳〵一冊の本となつて現はれました。原作はジャック・ロンドンの『野性の呼び聲』と云ひ、名流の家庭に飼はれたバックと云ふ從順な犬が、自然の聲に呼び覺まされて、次第に元の野獸の本性に還り變つてゆくその有樣が、小島氏の流麗な譯文によつて、氣持よく傳へられてをります。大人にも子供にも、あまねくお薦めしたい名著です。（四六判箱入美本一七四頁、挿畫三色版他多數入、定價九十錢、東京市外巢鴨上駒込二八金蘭社發行）

○少年少女科學大系　第二篇　兒童地文學

（松平道夫著、池上浩裝幀）

第一編の兒童天文學を讀まれた方は、何びともその說明の親切さ、挿畫の豐富さに驚かれたであらう。本書は第一編と同樣、ある兄弟の會話を以て、火山とか、地震とか、津波とか、氷山とか、その他あらゆる地球上の現象を、何人にも分りやすいやうに、面白く說明されてある。絕好の科學讀本である。（四六判一七四頁、挿畫寫眞版、內版數十葉入り、定價一圓、東京市外巢鴨上駒込二八金蘭社發行）

○童謠集　波のお馬（岩井允子著）

岩井允子さんは四歲の時、童謠集『つぶれたお馬』を出して世間を驚かしました。本書には允子さんが其後の四年間に作られた童謠が收めてあります。作つた方がいゝかも知れません。いえ更に允子さん自身の生活であり人格そのものであります。このお子さんが、どんな工合に成長されて行くか、私共は多大の興味を以て見守りたいと思ひます。（四六判五〇〇頁、定價二圓八十錢、京都市丸太町川端東入、叢文堂發行）

童心句掲載外佳作

大島知惠子（兵庫）近藤恭太郎（秋田）
長崎　憲博（朝鮮）後藤　賢三（東京）
松岡嘉一郎（和歌山）山脇三樹子（富山）
皆川　充（東京）西村　順爾（長野）
戸部　貞夫（長野）橋本　白柿（栃木）
春日　秀一（宮城）坂部　作平（山形）
中島　塗郎（京都）野田　圭典（京都）
川島　省三（東京）中山　二郎（山口）
山本　力（朝鮮）市川　博江（京都）
小西　勇（香川）千本常太郎（千葉）

綴方掲載外佳作

石井美代子（神奈川）石井　壯（神奈川）
石岡喜代治（青森）山村加枝子（熊本）
佐藤定次郎（山形）小林チイ子（新潟）
渡邊多枝子（東京）安保二三子（京都）
土田　チカ（大連）吉原　了三（滋賀）
原田　善郎（神奈川）横井　修吉（京都）
福原喜代子（京都）水也　正見（群馬）
佐藤　ヒサ（不明）板坂　定久（石川）
正元　正二（石川）寶地戶要一（不明）
井上　榮一（山口）廣瀨　基（愛知）
關　數夫（長野）細川　公正（石川）
雪月　永（京都）和（千葉）
門井　弘（茨城）平山　常夫（茨城）
矢崎　雪情（長野）樫本　松岡　嘉一（不明）

童話掲載外佳作

伊藤三千夫（山口）柿澤　幹雄（神奈川）
中村　遼生（大阪）久保田曉藏（東京）
山形新次郎（東京）掘田　信孝（京都）
野街　令樹（愛知）秋峰　香二（三重）
福井　藤秋（愛知）夏木　凉風（山口）
稻垣　宗一（愛知）矢崎　雪情（長野）
志村治之助（東京）茶木　七郎（神奈川）
鈴木　敏夫（愛知）且原　孝次（山口）
高岡　千尋（不明）堀田　愛泉（兵庫）
有吉　德子（東京）小川　辰雄（京都）
酒井　朗（兵庫）中澤美智雄（東京）

童謠掲載外佳作

【大人篇】

柴野　民三（東京）小山えうじ（神奈川）
關口　草人（埼玉）小川　驥郎（千葉）
大島知惠子（兵庫）近藤恭太郎（秋田）
葉山すみ夫（東京）且原　浩爾（山口）
小山　夢子（東京）大川　十六（東京）
千葉　仔郎（東京）鈴木　敏夫（愛知）
中坂石次郎（東京）土居　新花（愛媛）
平野　純（福岡）河野　青雨（朝鮮）
西岡　種雄（愛媛）丘ゆうひこ（不明）
高野　文雄（山形）金子　虹詩（東京）
山野　瑞雄（長崎）中村　冷粹（大阪）
河邊すみ子（神奈川）みつ（東京）
桑原まさじ（東京）伊藤　勝秋（愛知）
福井

草川せいじ（東京）五味くに三（山梨）
南　柑子（千葉）名和　暢一（福岡）
大塚　一仁（大分）伊藤　益平（岐阜）
神原　一郎（愛知）石倉　眞造（山梨）
中村　里郎（兵庫）竹下　啼月（島根）
象松　桃夢（大阪）清水まさを（大阪）
福田　初（神奈川）鈴木　壽郎（茨城）
柏木　俊雄（山梨）山形新次郎（東京）
茶木　七郎（神奈川）中村　里郎（兵庫）
澤田　利男（愛知）小林チイ子（新潟）
中村　數枝（朝鮮）佐藤　圭一（新潟）
畑山佐太郎（秋田）配野　一男（不明）
伊藤　明一（千葉）馬場　鐵矢（鹿兒島）
中谷　久夫（和歌山）有吉　光子（東京）
山本クレバ（北海道）春山　德次（東京）

新誌友名簿

高橋　源治（青森）大塚　清（千葉）
石塚　巧（千葉）山村加枝子（熊本）
高野　勝一（埼玉）宮內　幸年（埼玉）
篠崎　保正（東京）堀田　重忠（朝鮮）
寺島　武雄（長野）寺田　稔（富山）
中谷　久雄（和歌山）石岡喜代治（青森）
鈴木　三夫（東京）山崎　光照（茨城）
川村　花子（岩手）佐藤　松廣（德島）
高野　竹美（埼玉）新井　榮子（愛知）
梅田　和歌（長野）大野　作三（東京）
吉村惣三郎（兵庫）小池　喜市（北海道）
篠松　桃夢（大阪）田中　昌夫（東京）
吉川　前助（東京）太田　善作（橫濱）
江川　政清（東京）花田　なか（富山）
白岡　關藏（長野）鈴本　幸雄（兵庫）
岩崎　要二（大阪）春日　秀一（宮城）

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々の特典や便宜がありますから、どうか振つて御加入下さい。ハガキで本社へお申込み次第、誌友規則書をお送りいたします。

讀者だより

▼金の星四月號！御社より三月十日受手。童謡欄の擴張は、げに今月號に於て實化された事が當局者に感謝の辭を贈ると共に今後増々大々的進展を切望してやまないものである。童謡推奨者七氏！全く其の作品に於て利あるもの多大であつた事を嬉しく思つてゐる。中でも石崎青花氏は野口雨情氏の序文を添え匠に童謡自選集を出版されたの由。唯今後の御自重御自愛を祈る。さて『金の星』も増す〳〵斯界の權威者であれ。幸ひ今ら誌上諸兄姉よ。童謡童話の爲『金の星』の爲め奮つて後援して行きませう誌友に誌友に！何と心强い言葉であらう。奮へ誌上諸兄姉。入れ誌友に！切望する。野口雨情先生！『童心句』に就いて、詳細な御講義を『金の星』誌上に公開下さる樣切望いたします。二月二十二日野口雨情氏が、（岩井信夫氏）の宅にお出でになると岩井氏からうけたまはり、二十三、四日電話で岩井氏宅にかけたのですが大阪とんぼの家、童心社主催の講演會の爲上阪されてゐると聞き、全く失望してゐました。もし先生に會える事が出來たら！　私誌『新興童謡』（駒田君と發行してゐる）に就いてお高評を願つたり、お寄稿を岩井氏からお願ひして貰ふつもりや、其時私作童謡（二年度新作）四十五篇餘り岩井氏におあづけして、其の何分の一でも作品に就いてお批評願ふつもりでゐました私の大望も全く絶望と化して悲しみの極でした。思起せば當地こども博覽會の時にも岩井氏宅をお訪れしたのでしたが、お留京になつた後、重れ重れよくも先生と御縁のないのを悲しく思つてゐます。此の上は音信の上に於てお交り願ふつもりでゐます。どうぞ此の哀な子をお教導下さいませ。それから誌上諸兄姉、私誌新興童謡のため御入會御寄稿下さいませんか。見本請求は二錢切手十二枚と共に京都市下京區二條通御前通東入南側藤山藤村宛に下されば直送します。

▼雨情先生の『金の星童謡の更新について』は、童謡作家が多年待ちに待つた御言葉だと思ひます。童謡道は益々明るくなりました。

『童心句藪梨』――金の星編輯局に積まれる雑書の山を想像させるに充分です（小石川區白山前町四五　山崎方　小林重義）

▼春！春！牧場にひゞく牧笛の角笛に……時たまモーとなく牛の聲に……あゝもうほんとうに春です一日私は本誌を書店に拜見致しました。なんとその内容の高尚なるか！なんとその挿畫の俗じみてゐらないことか！全く私に本誌金の星に魅せられて、初めて拜見したまゝ求めてしまひました。で本月から新たに金の星の皆樣のお仲間に入れさせていたゞきます。何卒先生方初め皆樣！私も一童謡童話愛好家として御指導下さいませ。お願いいたします。又私は詩歌句と童話の研究誌『鍬菊』を發行いたしてゐます。只今第三號が出ました。色刷菊版四十頁です。何卒玉稿をおめぐみ下さいませ。又御加入下さいまして御援助下さいませ。二錢切手五枚御送下さい。本月號を早速お送り申します。尚……駒田汀香兄藤山於菟路兄河野牧草兄林潤花兄……何卒幼い誌へ御指導下さい（東京市外大崎町谷山二〇六　石山一翠宛）

▼皆樣、御めん下さいまし。妾は一月よりお仲間入りいたしました刈谷の蝶ちやんですの。わたしは以前から、お謡にあこがれてゐましたが、父が、ナンバだとか何だとか云つて、六ケしい漢文やなにかばつかりよませるの。わたし、それで、もう、とう〳〵がまんができなくて、とう〳〵、お父さんに内密で、金の星を買ふことにしたの。わたしの名前、男の樣でせう。わたし、本當は、男…？女…？まアどつちでもいゝわ。小石川の坊や樣、森三郎樣、おたがひにふるい下さいませ。それから投書の仕方はこれでよろしうございますか（愛知縣刈谷町　竹内健二）

▽男の子のくせに。（給仕）

▽覆面を取れ！取れ！（其他多勢）

▽投書はあれでよいでせう。（愛讀者係）

▼拜啓貴社には益々御發展の程お喜び申し上げます。左の文を貴誌

『讀者だより』へお載せ下されば幸に存じます。金の船創刊號より四卷五號まで（二卷八、十二三卷十二四卷一號欠本）金の星四卷六號より五卷七號まで（四卷十一號欠本）右計四十册を金八圓で御希望の方におゆずり致します。一、二卷は多少よごれて居ますが、三卷以後は新品同樣。全部岡本歸一先生の表紙さし繪入りであります。但し御一人限り。御一報を乞ふ（麻布區本村町廿二　米山星二郎）

▼四月號本日落手致しました。口繪はほんとに好きでした。又推薦童謡深山載せて下さつてありがたうございました。私は逸見さんのかー番すきでした。青柳さんのもすきでした。浜、坂野氏のお作が見えないで多少物足りない氣がしました。が童謡欄の擴張は何といつても喜ばしい事です。野口先生のトロイカ何ていゝ童謡でせう。魔術奥義書はもう終りさしたれ。又四條先生の童話をのせて下さいでは齋藤、野口諸先生の御健康を祈りつゝ。さよなら（T、K生）

▼金の星の愛讀者の諸君よ！『金の星』と云ふ雜誌を知つて居ますか？あの面白い〳〵お話や、色々の名高い人の書いた童謡や繪の美しいのが本に一ぱいですれえ。所々の本屋へ行つて見ますと、我等が讀む雜誌が深山出てゐますが、その内、大方は探偵物、あるひは、うそばかり並べた冒險譚、或ひは涙をそゝる悲哀談、などをたくさんにのせて有ります。そして我れ〳〵達の美しい羽毛のやうな心を痛めてゐます。近頃この種の雜誌の著しく數を増した事には私は本當に驚くほどです。金の星の愛讀者の諸君よ、聞き給へ、今の世はなんと幸福ではないか。金の星を勉强の合間に讀んで、たくさんに勉强なしやうではないか。金の星の愛讀しない諸君よ、御勉强の合間に讀むのには、最もよい雜誌ですから、お父さんやお母さんにお願ひして是非お買求め下さい。御身御大切に……れえ。（東京府北多摩郡清瀬村上清戸一七一　澁谷正治）

▼四月號『魔術奥義書』の結末には大いに滿足しました。ほんとに好いお話でした。それから、私に勵ましのお言葉を賜きまして有り難い御座いました。でも今月は何も書けませんでした。根强い探れ求める心は持つて居りますが、一方では生活の爲に職はればなりませんゝ爲、思ふ事の十分の一も出來ないのが實に殘念です。次に私不用の文藝書類（童話、童謡、小說、繪畫書等）十册程、定價の半額位で譲りたいと思ひます交換も結構御希望の方には目錄差上ます。（愛知縣渥美郡田原町字西大濱　福井勝秋）

▼今までに一二回雪が降りましたが殆ど降らないと同樣に少ししか積りませんでした。處が今日始めて雪らしい雪が降りました――一日中降りつゞけたので僕の家の庭なんかまるで、すつかり綿をかぶせたようです。うれしくて僕は一日中雪の中をとびまはりました。童謡も出來ましたからごらん下さい。野口先生、齋藤先生、逢崎先生、杜先生、ご元氣でせうれ――今感冒が流行してゐますからどうかご自愛下さいまし。さよなら。（東京　川島秀雄）

▼三月號を讀んで一番嬉しく感じた事は童謡欄の擴張された事と、北村先生の童話のあつた事でした其の外、水谷先生、沖野先生の童話も面白う御座いました。岩岡先生の表紙、可愛くて好きです。これから毎月岡本先生と交代に書いて載いては……白帆の唄、漂流二百三十日、大石主殺等纏る物も毎月樂しみに讀んでゐますがあまりたくさんあると前の月に讀んだのを忘れてしまひます。三つ位にして載きたいです。齋藤先生を始め記者先生御一同の健康を祈ります（大阪　中村逸生）

▼記者先生、御變りは有りませんか、先日は誌友規定書本當に有難うございました。試驗もすみましたので、本日早速三ケ月分誌代御送り申上げました。今後共よろしく。金の星の四月號、實際生れ變つた樣な前び樣ですね。更生の春ですか。以後もつと〳〵立派な本が見せて下さいませ。尚、野口先生の童謡全集の一日も早く出版されん事を御祈り申上げます。大阪市天王寺區東平野町三の三六竹尾方　黄松桃夢）

▼三月九日第二回『金の星童句會』が開きました。小林先生外七人集りました。もう卒業です。卒業してもまた開きます。（下谷區金杉下町一五一　藤澤一郎）

▽御發展を祈る。（編輯部）

金の星社 五月號 出版だより

近刊書のお知らせ

三月は豫定の本の内『金の星家庭文庫』一冊だけが後れて全部發行になりました。四月の發行書は左の五冊です。

○赤穗四十七士（實傳物語ノ三）

○支那英雄物語（名著大系ノ卅七）

○荒野の勇士（名作童話ノ十一）

○家なき兒（少年文學叢書ノ二）

○繪入世界童話集

『赤穗四十七士』この本は三島霜川先生の苦心によつて次々と發行されてゐる『日本歴史實傳物語叢書』の第三卷です。皆さんの御承知の義士のお話です。おそらく皆さんは、これまで赤穗四十七士のお話は、知つてゐる方も大抵は講談本位から知つてゐる位で、本當のお話は御存知ないでせう。

三島先生は、長い間赤穗義士の研究をしておいでになりました。その爲めに、面白いばかりでなく、『成る程、こんなにまで四十七士の人達は苦勞したのか』と深い感動を受ける事と思ひます。

實傳物語も、これで第三册目となりました。いよ〳〵大評判となつてゐます。

（定價金壹圓　送料十二錢）

『支那英雄物語』支那の英雄のお話の中でも『漢楚軍談』といふ有名な本に出て來る英雄のお話が最も面白いのです。項羽や劉邦や韓信などといふ英雄中の英雄が出たのも此の頃です。

その英雄達がお互に火花を散らして戰爭をし合つた面白いお話を書いたのが此の本ですからこれこそ皆さんに喜ばれるに違ひない本です。

支那の英雄には、外の國の英雄には見られない面白いところがあります。皆さんの愛讀書の一つに此の本も必ず選ばれるでせう。三井信衛先生の苦心になり挿畫は井上猛夫畫伯が非常に面白くお描きになりました。

（定價金九十錢　送料十二錢）

出版部より――今月は頁の都合上近刊書の紹介が出來切れませんでしたので、次號でくわしくします。

近刊豫告

○少年天才物語（立石美和先生著）

○少年探險家物語（久米粘一先生著）

○白鳥の騎士（ワグネル物語）（名著大系ノ卅八）

○幽靈船（名作童話大系ノ十二）

○小公楠（實傳物語ノ四）

沖野先生の童話讀本『笛吹川』茗溪會から推薦さる。

□笛吹川（沖野岩三郎著、本郷區動坂町三五九金の星社發行　四六判・六九頁　定價一圓）

（評）『笛吹川』以下十一篇の童話が盛られてゐる。童話讀本の第三輯である。各篇とも大變面白い良い話ばかりであり、筆致も極めて輕妙である。子供は必ず喜んで讀むであらうし且つ又良い糧なも得ることであらう。よろこんで推薦する。

以上の推薦の辭によつて『笛吹川』がどんなに良い本であるかゞわかりませう。

本社發行本の評判

『笛吹川』を讀みて

東京麻布下堀田町五コドモの家　塚田喜重

『笛吹川』――それは何と云ふ感じのよい言葉だらう。そして『笛吹川』の物語りを讀んで一層懷しく思はせられます。

私はこの書の中で、『大統領樣へ』『笛吹川』『歸つて來た與志喜』の三篇の嬉しい物語りを發見致しました。

沖野岩三郎先生の童話を非常に好く私は、私のお伽講演の過半數を沖野先生の物語より拜借して居りますが、その中でも、『寶話』に現はれたる先生の童話物語は、非常に私の心を打つものであります。沖野先生の是等の物語卽ち『大統領樣へ』『歸つて來た與志喜』等は大人に對する講演としても多大の感銘を與え得る盡のものであります。

沖野先生の童話を、殆んど無條件で受け入れつゝある私にも、この度の『笛吹川』は特に嬉しい著書であると思ひます。

童話讀本の第一第二と比べて、遙つた意味に於てゞはあるが、より傑出した作が多いと云ひ得ると信じます。

若し、こんな厚かましい事を云ふ事を許さるゝならば、『實話の童話』を一層多く集めて、第四第五の童話讀本を續刊して頂き度いものと考えて居ります。

『笛吹川』それは絶えず私の心にひゞく音であるでせう。

『狼少年』を讀む

川崎市榎町十七番地　原田善郎

うす水色の表紙、寺内先生の繪『狼少年』はどこから見ても美しいモーグリのぼうけんや、バギラバルーのなさけ、シエヤーカンの惡さや、面白みはたとへやうがないくらゐである。

この本を作つたキプリングといふ人は、まるで狼の仲間入をしたやうだ。大藪の法律の美しいことよ。何回讀でも面白い。又、附錄に『白あざらし』などがある。まだ狼少年を讀まない方は一度よんでおくといゝと思ひました。

『ジャンバルジャン』の感想

名古屋市南區瑞穗町字田光　太田貞夫

『ジャンバルジャン』を讀む。――期待以上に內容の立派なものが嬉しかつた。課者はユーゴーの原作を少年少女にわかりやすくしようとつとめて居、又事實わかりやすくなつて居たのは感心だ。

裝幀――上。活字――上。課者は熱心だ。挿繪がもう少し親切だつたらと思つたが、表紙の美しいのが嬉しかつた。

內容――人の世の冷たさ！どこまでも皮肉でゆゞまれない主人ジャンバルジャンの憐れさ！今さらの樣にこの作の立派な事が思ひやられる。

事件の轉廻が心にくいまでによくとゝのつて居る。

自分ばかり讀んだでは勿體ない樣な氣がする。ぜひ諸君におすゝめする。發行所もこの熱心と努力とを續々發刊の書籍にも大いにそゝいでもらいたい。

『親指トム』を讀んで

東京府北多摩郡淵村　上清戸一七一　澁谷正治

世界名作童話大系のある事を、金の星で知つたので、早速金の星社にあつらへました。『親指トム』の本は三月四日の日に來ました。僕は、六十錢だから、あんまり立派な本じやないと思つて、中をひらくと、四隅とも皆んな美しいではありませんか。僕はびつくりしました。それから、一面に繪を入れておくので、それもたまげた。繪が一枚づつ入つてゐるなどは、まるでイツツプ物語のやうです。

『親指トム』を買つて讀んで、思はず笑つてしまつた。すい分滑稽なトムさんです。一寸法師の『トム』が人間につかまつたり、吹き飛ばされたり、あらゆる冒險をする面白い姿が、漫畫の樣にあらはれて來る。僕は初めてこんな面白い童話を讀みました。まだ買はない諸君よ、御勉强の合間にお讀みになるには、最も良い書物ですから、お父さんやお母さんにお願ひして是非お買求め下さいませ。

讀後感を募集します。

出版部

金の星社發行の書籍に就て、皆さんがお感じになつたことを、そのまゝ、遠慮なく記してお送り下さい。よい批評には賞品を差上げます。

懸賞創作募集

童謡……野口雨情先生選
綴方……齋藤佐次郎先生選
童心句……野口雨情先生選

【注意】課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何編出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は童心句はハガキ、童謡や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は四月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は七月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

（一般讀者の創作）

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選
童心句……野口雨情先生選

【注意】童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には一圓づゝ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づゝ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

【送金の注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和二年四月九日印刷納本（毎月一回）
昭和二年五月一日發行（一日發行）
東京市豐島區巣鴨町中里百二十七番地
編輯兼發行人　齋藤保
東京市豐田区巣鴨町三丁目二十五番地
印刷人　小端安之助
東京市豐田区巣鴨町三丁目二十五番地
印刷所　安進堂　電話神田二二二三番
東京市本郷區動坂町三五九
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

金の星社發行
無類の安價
世界名作童話大系
四六判箱入美本・定價六十錢・送料六錢

第六編
利口な驢馬
驢馬が自分の一生を皆さんに お話したのが此の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほかでは聞かれない愉快なものです。見世物に出たりして、なか〳〵面白いです。

第七編
大勇士
イギリスの有名な話です。ビオウルフといふ勇士が、怪物退治に出かけて、恐ろしい人喰鬼と戰つたり、海の魔物と戰つたり最後に火龍と戰つて退治る勇壯な物語です

第八編
ピーター・パン物語
活動寫眞でおなじみの「ピーター・パン」の本當のお話を書いたものですから誰でも一度は讀まればなりますまい。これこそ本當の世界的童話だと誰でも感心するでせう

第九編
魔法の小人
面白い〳〵童話です。お母樣の病氣を治をうと藥を買ひに行く孝行な少年が、惡いい小人が出て來て、さん〳〵になやましますが最後には王樣のお褒めにあづかります。

第十編
人買物語
日本の人買物語として最も有名な厨子王と安寿姫のあはれなお話です。三荘太夫といふ人買ひにさらはれて、さん〳〵な目に遇ふ話で、これ程哀れな話はありません。

ライオン歯磨
朝起きたら歯をみがきませう、
夜寝る前に歯をみがきませう。
それなら、きつと、
むし歯はできません。
LION
TOOTH PASTE